

續

國姓爺忠義傳

前編

~13  
4270  
1



八13  
4270  
1

画本國姓爺傳序



東人勇而知西人順而義二  
氣所感鍾美于是降若鄭生  
繼志橋梓輔君板蕩大樹  
顛雖一繩毋益音民四代天  
命是賴成功其垂二氣進于

忠義傳卷

序一

林義夫氏  
61  
寄贈

91-2141

志孝者乎  
皇和之振武外國  
神后寢  
處三韓鎮西略者  
中山西洋  
納貢東夷易俗是則無論之  
成功雖不能遂其志能驅不  
教之民數敗維揚之軍區々

海島垂名史策亦 國家之  
大美談也自昔人演此事三  
尺童子皆知有國姓爺然其  
意急於悅人偏言妄驗玉山  
氏乃徧蒐耒藉抄其實函其  
要田畷紅女省覽此冊則頑

廟儒志必不無補于世治矣

文化改元夏五月

西成 彼攷撰



延平王國姓爺像

不食清粟

紀永曆年

一軍入海

忠孝兩全



福建省大克全圖

大克之臺灣に作らるる  
俗これ多如古之  
泉州の南海中  
の島なり又澎湖  
島の島なり  
海上三日程の  
大克す月小島也



文化首元  
甲子新刻

攝陽書坊

玉榮堂

向陽堂

合梓

稱觥堂

復古堂

繪平國姓爺忠義傳花篇

總目錄

卷之三

萬曆皇帝に附姫樂

萬曆皇帝様幸の沖程の圖

崇禎の沖程の圖

朝鮮乞兵の倭

右圖を以て朝鮮と伐て明の援兵と破る圖

楊應龍致西蜀

官軍蜀山の楊應龍を攻圖

劉綏同道進揚應龍を斬る

僧達觀空化獄中

僧達觀康王揚子獄より出る

忍靈辨士須を殺す

魏韜建國号法撃大明

明人院を別て法日降る

長養流安夫人と法河関を戦ふ

卷之貳

貝勒王定計討劉綏

白乳東方に見る

鄭和魁柱松を斬る

明劉綏陰谷に法軍を圍む

鄭芝龍を遠征畧

奇童雅を免る

劍躍て鄭芝龍魁を斬る

客氏得寵而為妃

魏朝忠貞と法宮中を捕らる

客氏裕妃を餓死せしむ

貝勒王定計陷瀋陽

天啓帝自ら巧を修る

貝勒王定計備陽を立圖

卷之三

黃龍瑞之妻死義

日圖

三部之牒書受を宮と圖

客氏魏忠賢を竊奪の圖

鄭芝龍仙板谷廢法軍

鄭芝龍遼陽を討るの圖

王化復後孫黃寧

鄭芝龍仙板谷に法軍と廢軍の圖

羅一貫孫勇法軍と斬崩の圖

明法大に黃寧を裁ふ圖

鄭芝龍遼東下獄

鄭芝龍獄中に糧困雄畧と編圖

帳突臨陣を編圖

帝鄭芝龍之罪を降し終る圖

卷之四

鄭芝龍渡日本

鄭芝龍運華洋を海廢

を抄びやうの圖



鄭芝龍燒香洞又詩を紙と

日國

鄭森又の明の芝龍叔を日本

長崎丸山乃松若國

吳縣人民死義

天啓中天爰乃國

周順昌難又所せらる國

吳縣乃去民等又後廟と用は國

魏忠賢阜城又縊る國

李自成戦を討て黨と集む國

圍城西蜀又猛威を震ふ國

卷之八

李嚴用封府得民心

圍城魯石の民を劫して衣材を奪ふ國

李嚴用封府民の心と得る國

宋殺兇見國王

農民多知縣を打殺と國

李嚴百姓と率て李自成又屬は國

湯日恭尊因多被虐軍

宋殺兇人の禍福を乞ふ國

李自威福王を捕へて後麻酒と造る國

苻專困弘美の國

周陽右射李自威眼

怪風凶を示して車を碎く國

周陽右李自威が眼を討る國

卷之六

崇禎帝封臣擧城

長秋忠雅兒を熱る國

崇禎帝淺秘機

禁中妖怪の國

崇禎帝秘機を淺る國

圖城陷小系城

孩子兵都城を襲る國

燈籠を掲げて明朝基業を終る國

白面親善と毀ら城軍小系を陥る國

城軍丸坊帝都

李自威兼天門の額を討る國

城軍妓婦と集り宮中を宴る國

劉伯溫應國讖

卷之七

忠臣殉死列女死節

費氏罹云を刺と國

吳圭妻婦城を教く怨と殺る國

兩婦殺兩城

日圖

李自成登位

李自成位より昇り懐美見る國

吳三桂為清兵鞭韃雪憤

漢支海漢より龍と蚌と獲る國

清攝政王吳三桂と助け李自成と討國

吳三桂斬唐通

唐通清營より吳三桂を説く國

吳三桂唐通と討國

卷之八

李自成を解令銀遷西蜀

日圖

吳三桂大破李自成

吳三桂清軍を驅て馬城を破る國

扒山之陳破賊軍

牛金星兵と帷幕の内より伏て李巖兄弟を殺る國

吳將軍扒山乃陣入物國

吳三桂劉崇文を討る國

李自成死羅公山

羅暎皇天又降以國

宋孩兒藥を交へて瑞と考る國

胡州の臣李自成を困む國

祚靈箴を詩との國

卷之九

張欽忠死漢中

張欽忠天教の刑と移る國

劉進忠張欽忠を殺る國

大清定鼎燕京

順治皇帝書と南系を考る國

大清順治帝明長をを周奎と嫁る國

大徳の勅後南系を列る國

弘光帝徵鄭芝龍

鄭一貫日本平戸を紅毛人を討る國

鄭鴻逵噴筒火箭を用ひ清軍を燒る國

清が丁未山波上を清の鄭芝豹と戦る國

天妃得感清達擒返回

天妃應ある國

鄭鴻逵返間と擒ふ國

卷之十

鄭鴻逵兼金山軍

鄭芝豹丁里山と楊江に戡ふ國

祁鳳水兵の艦船を覆はす國

西水兩軍討南系

南系弘光帝乞恩を乞ふ國

尤良王我白驛を離

尤良王白驛を離る水軍を調ふ國

尤良王康方國安を斬る國

鄭芝龍説尤良王

鄭芝龍水寨に来る國

鄭芝龍尤良王が陣に到る國

史可法棄兵糧

史可法錢江城に信軍を拒む國

湯餘を賣計信軍を劫はす國

卷之十一

鎮江屠城

吾金王孫州と捕へく奇計を斬る國

唐王即位後州

張仁為城の國

弘光帝車駕河に德幸の國

鄭成功國姓を賜ふ國

鄭成功國姓を賜ふ國

國姓爺函輝多力と競ふ國

隆武帝親征

隆武帝陳謙を斬る國

鄭芝龍國姓爺と泉州に降る國

國帝靈倭臣を討つ國

隆武帝崩汀州

卷之十二

陳睦龍袍の日又曝ると祝て又の讎を報ふ國

泉州の民皆降る順との國

貝勒王安計捕鄭芝龍

小軍陷安平城

韓固山率兵安平城を圍む國

鄭芝龍妻義に死す國

鄭芝龍妻義に死す國

鄭芝龍妻義に死す國

國姓爺破廣東

國姓爺破廣東を築き明使を立すの圖

忠烈十日の糧と食ひ福建を侵すの圖

函輝小軍の馬を奪ふの圖

國姓爺陳龍嘘素と斬國

卷之十三

國姓爺奪南洋橋

國姓爺揚と別れて軍士を分ふの圖

國姓爺南洋橋を奪るの圖

國姓爺南洋橋と隔るの圖

國姓爺火と放て城中の男女を屠るの圖

獲燕恣色傾城

海棠詞を視て獲燕柳力まは情と通川の圖

曾瑛神兵獲燕城を傾ると怒るの圖

獲燕國姓爺が陣まのの圖

國姓爺安海城を攻るの圖

柳巖大と姜仲林勝と戦ふの圖

獲燕信を去と欺て國姓爺が陣まのの圖

以上

繪本國姓正忠義傳卷之三 目錄

第一回

高曆皇帝討討姪樂

弟曆帝妹幸御柱之圖

堂幸之御遊之圖

朝鮮乞兵禦倭

右國奉吉云伐朝鮮破明援兵之圖

楊應龍叛西蜀

官軍蜀山夷楊應龍之圖

劉綎進回道斬楊應龍之圖

第二回

第三回

忠義傳卷之三

三



百廿四回

僧達觀望化獄中

僧達觀康王揚言下獄之國

惡靈殺劫士道之國

魏祖建國号法隆大明

明人列既降法之國

長孫胤與安夫人戰法河國之國



百廿八回

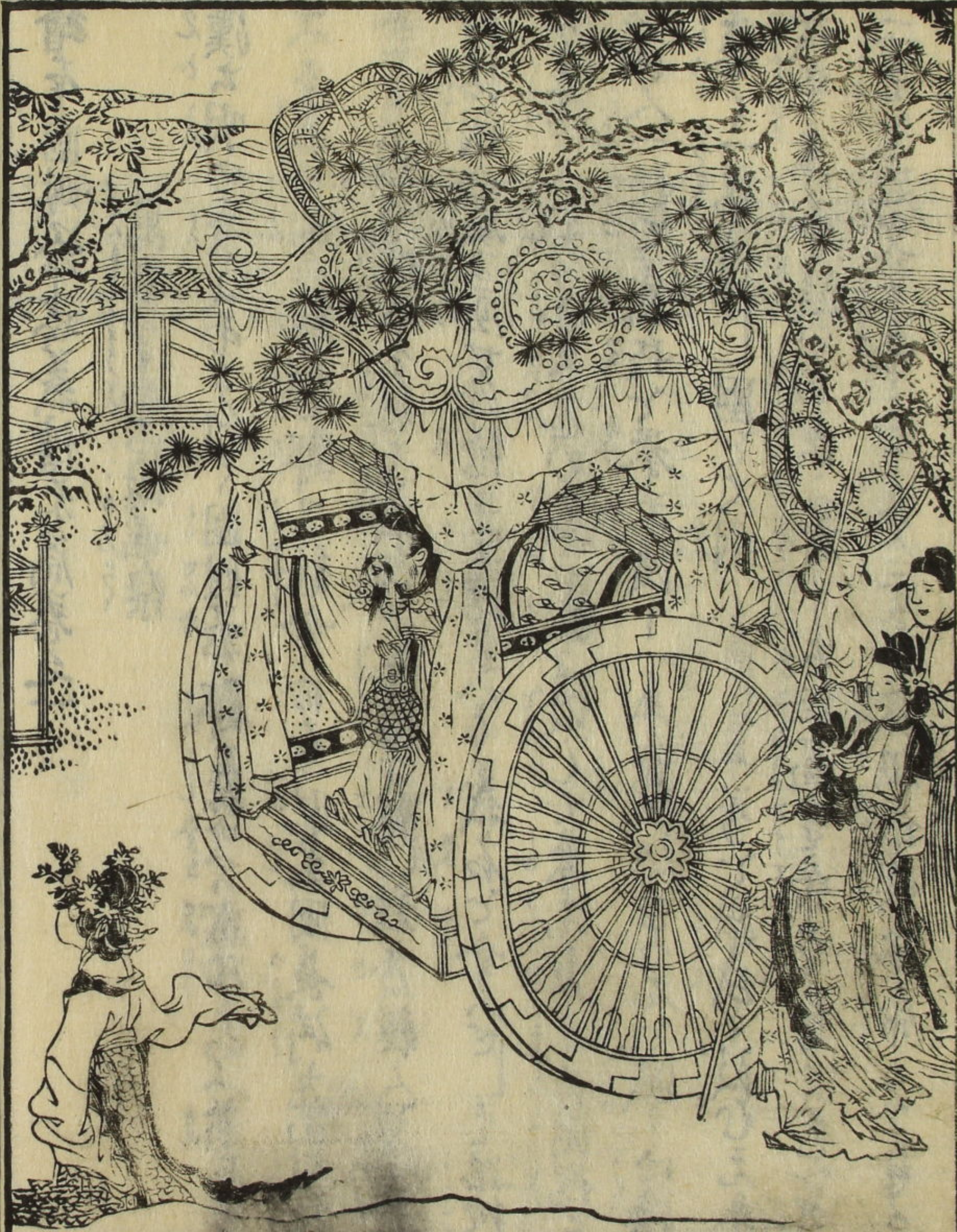
繪本國姓爺忠義傳之篇卷之一

萬曆皇帝に附搖樂

漢去明の季よあつて國姓爺鄭森字の成功と云者あり  
 又る唐去國の都督鄭子龍母の日本肥前國長浜丸山の村  
 女有り明の賊を懲り義兵と東海に配(配)教を難人として  
 け清朝の威を屈せし終に皇漢に入て義名と今にせし其始  
 を承て鄭子龍と云元乃義兵の期に及んで朱元章字の國瑞と  
 云二人一婦を義兵と奉承後十一年の戦ひに大元を滅しは海  
 邊一境に居し國と大明と号し多号と洪武と改む元季  
 成申年金陵の南東に都を置祖高皇帝と号す其の是也  
 二皇と建文皇帝と中皇三皇と成祖永樂皇帝と号す



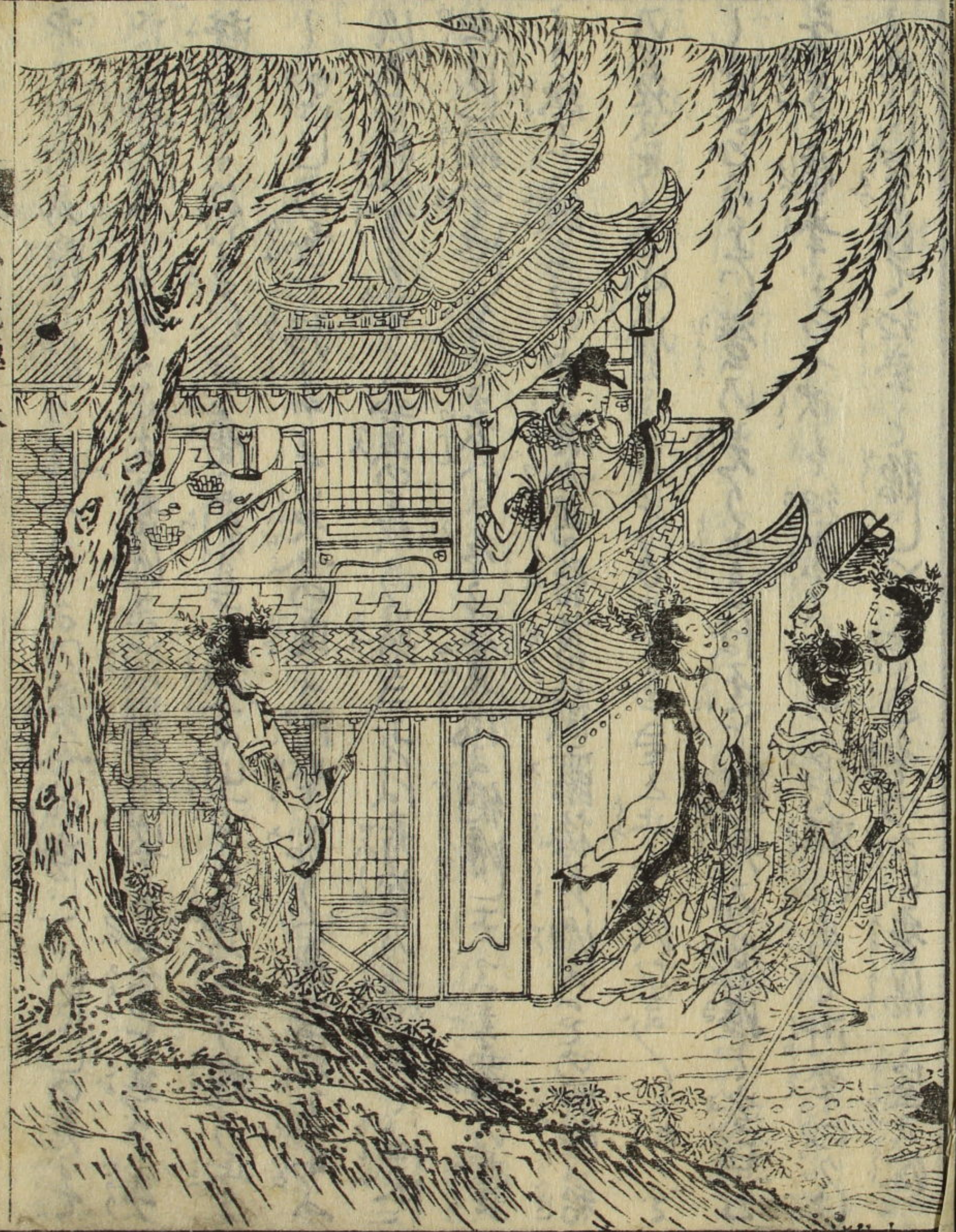
萬曆帝之遊



忠義傳卷前

け附に夷ハ遷遷々々入貢明朝の盛方よりけ帝の御附より  
 くるいは是より後仁宗宣宗英宗景帝憲宗孝宗成  
 宗穆宗代々明朝の帝王として國家の好むる人方は十三  
 世萬曆皇帝の御附より國運漸傾き連年旱魃して又穀  
 乏しく地震洪水の災死す万民は安きをばし然る萬曆  
 十二年魏朝の大王阿魯台とて若孫叛を配し暹加奴仰加  
 奴とて友人の勇は二十余万の軍兵を督せし西海に乱を  
 起せば明の朝廷を威深とて大に遊撃の軍を發し其勢又  
 十余万と成りて魏朝の兵と防しむる威深令と受け終り  
 大軍とて率し遠く西海に抜き魏朝の兵と向つて戦ふの戦  
 月終に魏朝人十五万と討たを猛將孫盛んはけせば魏朝は

魏朝の兵は魏朝の兵と防しむる威深令と受け終り  
 大軍とて率し遠く西海に抜き魏朝の兵と向つて戦ふの戦  
 月終に魏朝人十五万と討たを猛將孫盛んはけせば魏朝は  
 魏朝の兵は魏朝の兵と防しむる威深令と受け終り  
 大軍とて率し遠く西海に抜き魏朝の兵と向つて戦ふの戦  
 月終に魏朝人十五万と討たを猛將孫盛んはけせば魏朝は



御遊之聲

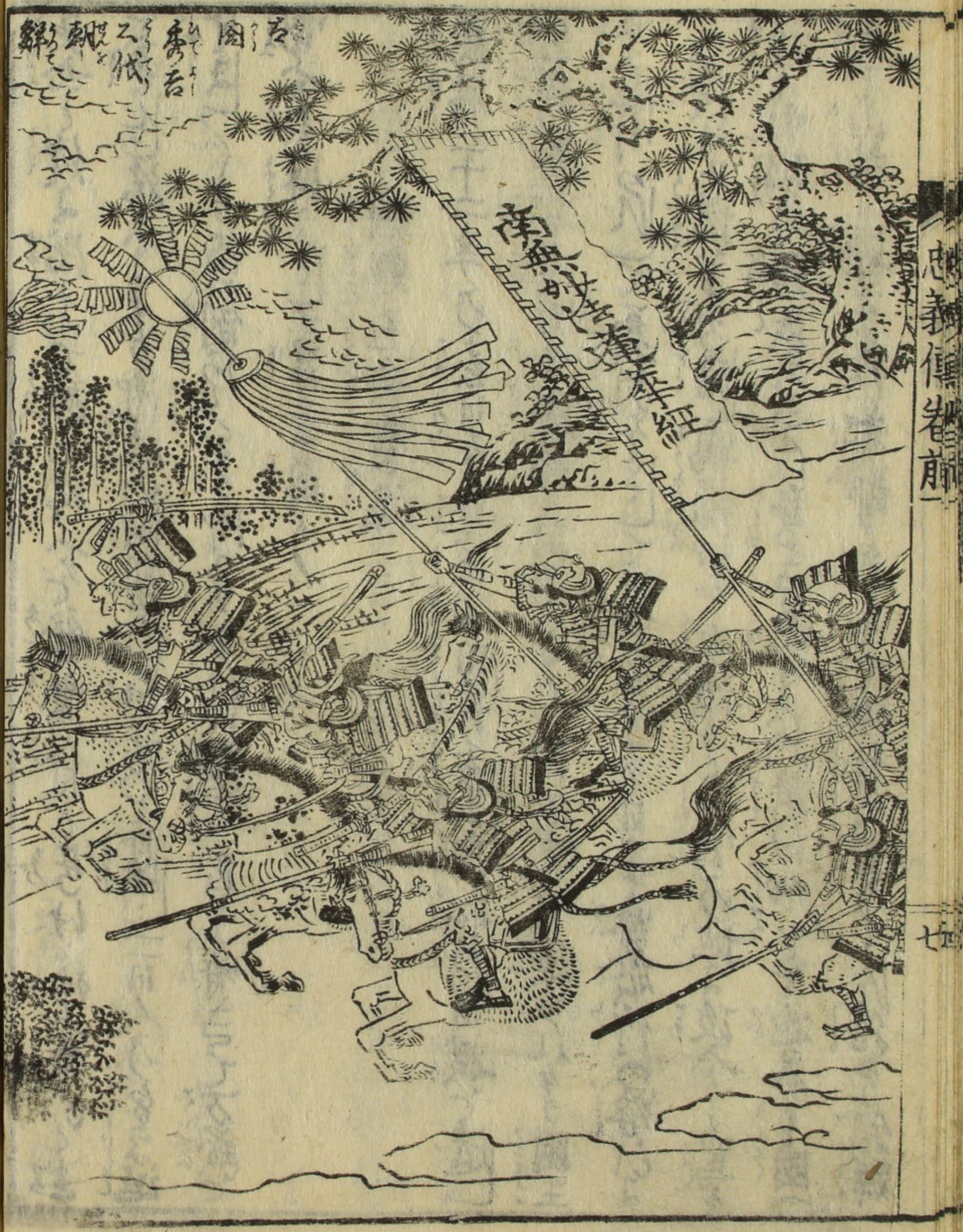
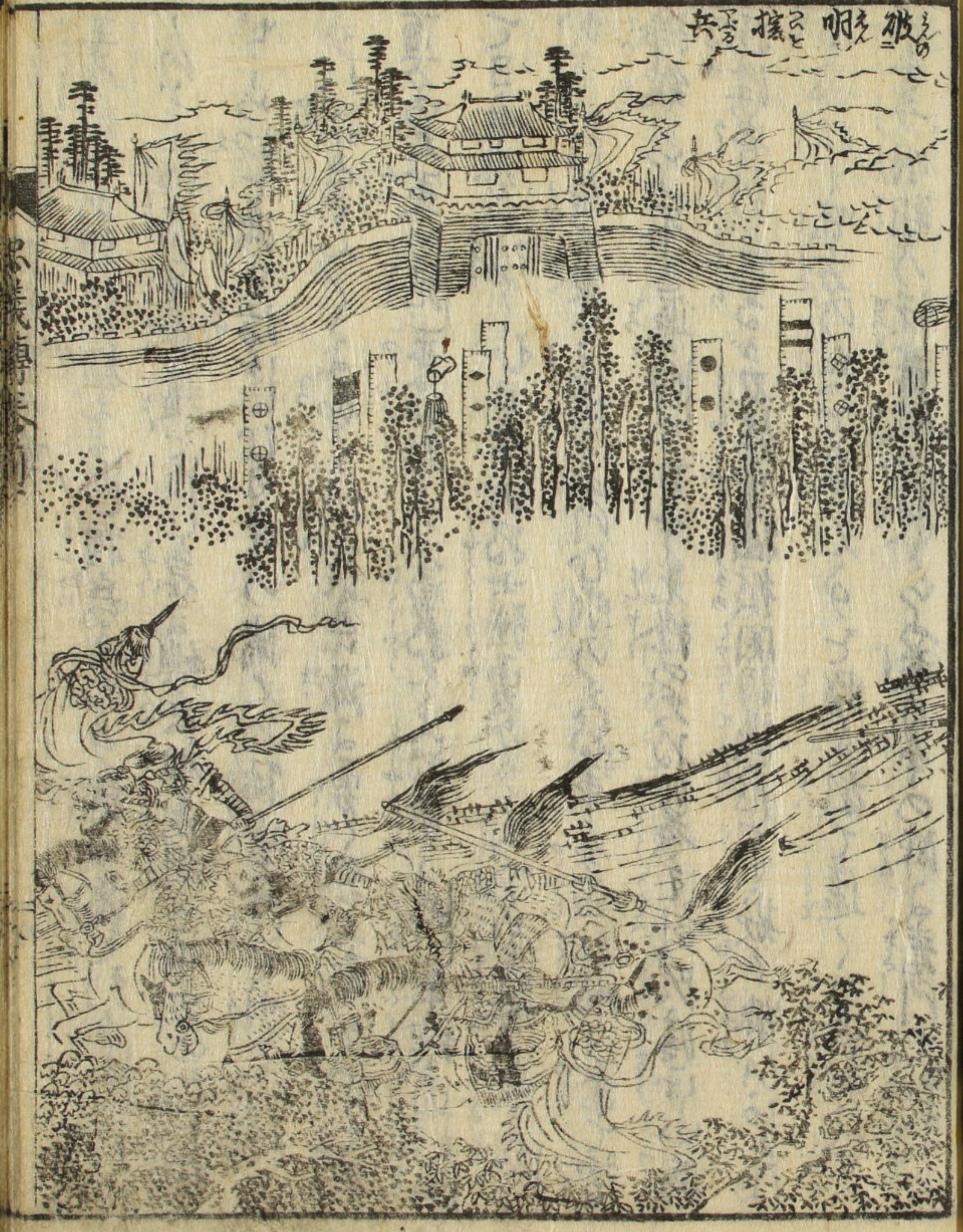


中よりツ乃蟻と放ら流るる三みの美女我傍じくかじの花とて  
に拓くよさらでふふ香流き傾國の風姿よる香と集るる  
懐しあれがむいりて香よ引きて彼方け方よ花さるる蝶の止り  
かじし乃をと膝よてそ美女の圃より御幸ぬり一夜の寵とそふ  
以是と膝幸とそくつ夏の夜の暑さよは青雀の捕籠と池水  
白く猶令世し卒とそ美人よえそを兼風と納降し天子ま羅の雲  
より螢と放ら流るる宮女名は皆苜蓿露梅花瀝るるこの飛籠と若  
のたよそくき小庭をそりてふりもきと止んとけなましくかじ  
し世をりよに螢の光り止まばそと其夜乃を燈とそまじえ  
そ若て螢幸とそ秋と紅雲あ詩の句と題し是と御幸のくけ  
のし号けて知幸と稱しやそまき冬の文の香湯と室よ流へ

美女と終よ活して戯と流るるを鷺鴛會と号け流るる常かく  
とそに流るるより御懐の雨露内家叢と露し二百人の皇子遊  
ばましくなほの例けりる御さるるが百官是と壽きて万歳と  
唱言参拜くとて身よ盛り

朝鮮乞兵御幸倭

萬曆二十二年の春日奉豊臣関白秀吉云兵船教百艘と遣し  
朝鮮國へ押寄せ釜山浦と討囲とせんくよそを攻られんる國王  
李爾汗に就て義別をばして為りよそ日本勢破竹の勢ひよ  
と極よ王城とまほ落し鴨流江をお渡り大明の地よ攻へし罵る  
後よ明朝の祥氏大きたる移るる老るる故抜け切ると抱き軍圍へ  
まら山林よ迎まごい都鄙ともよを強勅とするる流るる乞兵



王李昭明の朝廷へ檄を飛し援兵を乞ふ梯の齒を引がけしむら  
よのく萬曆皇帝懼とばし急し總兵祖秉訓は二十万の兵を督  
せしめんとして防びし日本乃の諸大將猛勇にして明の兵に  
きん渡とせんくは如く故出なきは激し勇く後大来多くと再  
百万の大軍と配し李如松とく勇將を大將軍と拜し平壤道に屯  
て日本勢と防し日本乃の士強勇かりとくも寡の衆を敵  
かて討負て軍と王城はあつし明乃の大將軍李如松勝と乘て碧  
錦館とく不と追はけしが日本先鋒の大將加藤と計既信し小西  
秀津守の長考が刀法勇猛彼國羽張飛とて欺く勢ひは平  
李如松の味方の兵と衰つんとと懼と敢て遠く追討し其  
昭明朝乃の況院惟敏とく者日本の陣は春門と和

計り小西某なる者と誘ひ明朝はゆり日本の討と誘ふ萬曆帝  
群臣と計議して國自秀吉を日本王と封じしとて李宗濂  
は者といはれて揚方亭とくは者と副使とし況惟敏とくは  
日本北地對馬の海ふと後りけしは石の大守宗義我智と續し悟  
澤蘭とくはるふはるる清計の者の事おかりたり日本乃の兵を人  
來り李宗濂の後者もきて中たり大守義智慈心とせし條  
る人李宗濂と揚方亭の兩人を殺害せんと計る間所用の  
以りしと書しやふ小祝しはれは彼後者まことと大さの強主人  
李宗濂はは中と若かりたり李宗濂其怒と怒ら面色去のど  
とくは物もは怒り明帝より日本へをいさうく書書しを候  
打捨て候にまされ小舟は五番ありはれははれして逃げたり

萬曆帝大いに怒りて李宗海と獄に下し揚方亨と沈惟  
 敬五人後海と云き首命し殺し去人取りて日本送り秀吉云揚  
 和平と稱せし人乞ふよめし朝鮮在陣乃日本警軍と云きし其陣  
 朝一多死し萬曆二十二年再び日本人大軍と記し朝鮮と夷  
 破し萬曆帝甚怒し沈惟敬を殺し揚方亨沈惟敬を殺し沈惟  
 敬に私怨と稱し和議の路終つるの事は前後首尾せりて  
 関白秀吉甚怒り再兵と記して朝鮮と夷をよめし向後及之れ  
 帝大いに怒り沈惟敬を殺し揚方亨と沈惟敬を殺し揚方亨と  
 刺り去人と記し再大軍百万人を集め揚禰と劉綎の兩人を  
 お軍と記し朝鮮と接せし西の忠義道黃海道の二より  
 進し日本乃陣營に逼り日夜合戦止附し附し日本関白秀吉

云伏見の城を薨御みされし朝鮮出陣の諸大將先と率し帰  
 國し若後七年の秋いよ諸と保し朝鮮の國王と下の臣人民百  
 姓よりつるよと此の眉をいらきたる

揚應龍叛西蜀

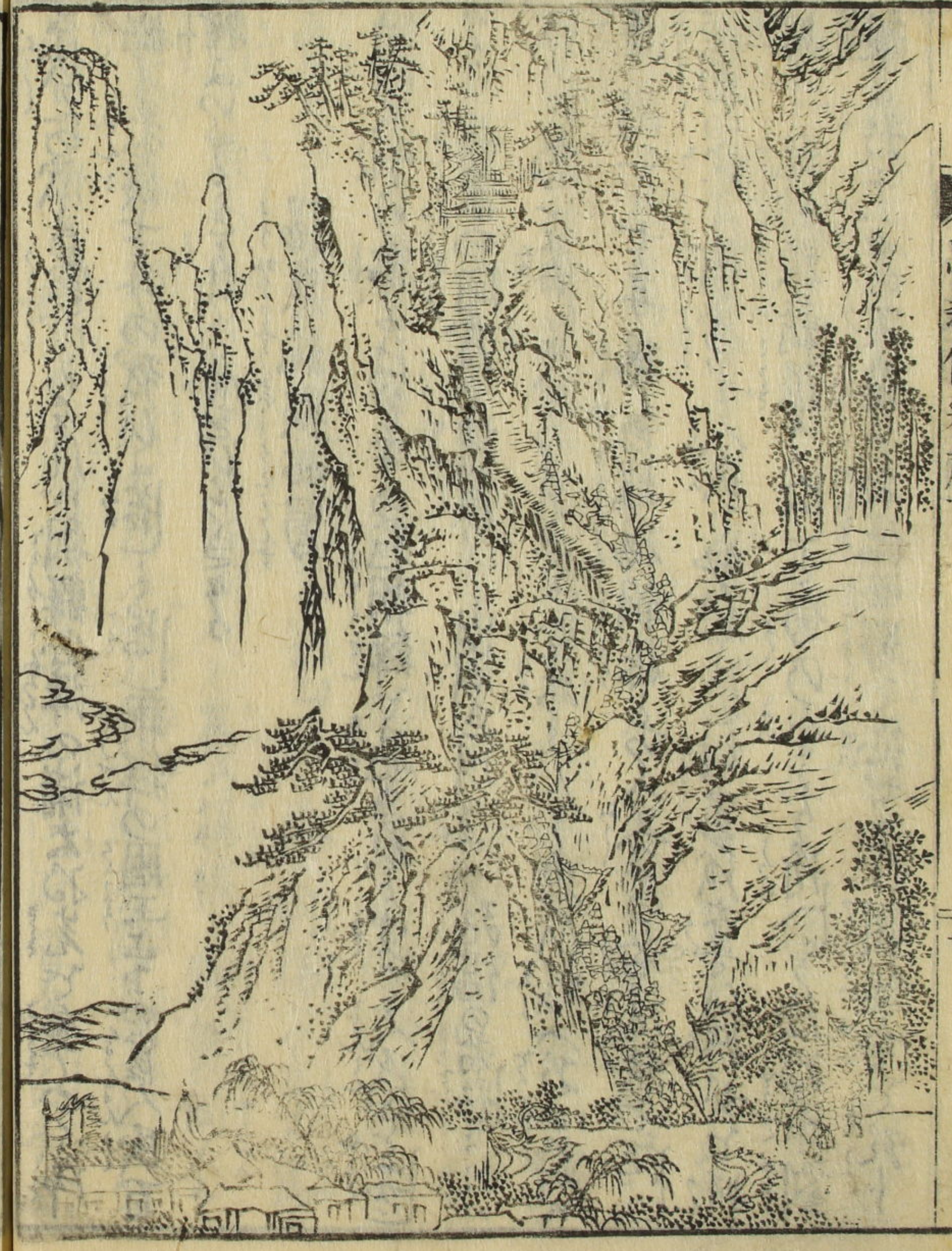
け附大明の都は日本の寇朝鮮と退きぬとて人民心と安  
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 民庶又心と落しめらるるゆり出素々々と思ひぬるお其附  
 萬曆二十七年揚應龍揚朝棟と云ふ父子の若孫叛を記し  
 西蜀の地は捕獲し人民と抄ひやし財宝所奪し婦女と奸  
 淫し乳妨狼籍限りはと蜀の令より所しけはぬ軍劉  
 綎よ數十萬の軍勢とお派西蜀を征せし劉綎命と記し





官軍蜀山  
及揚意龍

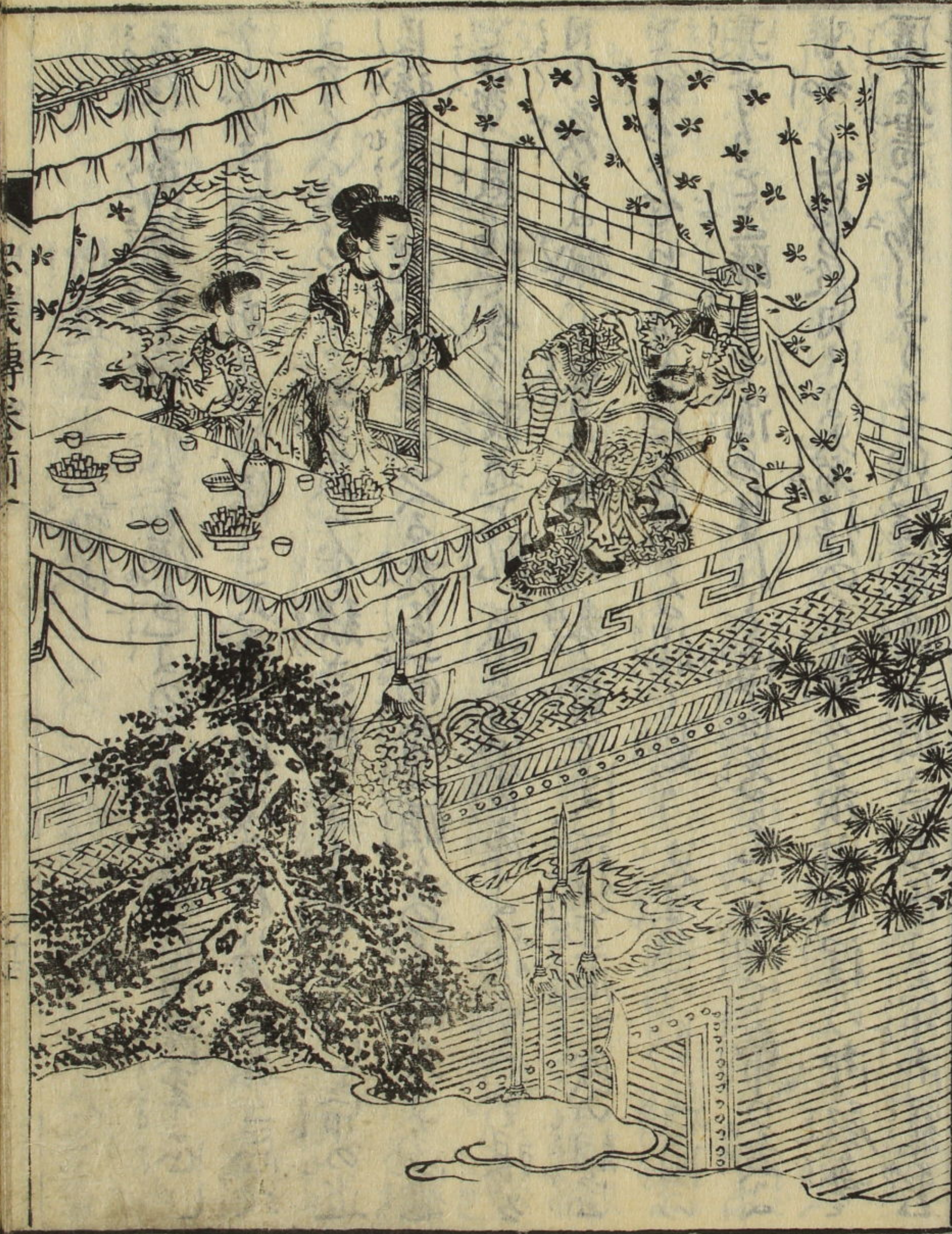
大正七年十月一日



忠義傳卷之二

不日あり彼地より列城營に押寄せ天地も崩れしや  
 きふ討勝負と云ふの教を去りて揚應龍父子山奥に引退き  
 臨陣より防ぎ我人抑蜀山の峻嶺より四方嶺我れと聲  
 申す二線の内道通せり一騎打の坂路に上りて七盤九妙のさしき  
 もるもさしきかよひにけ切石に火礮石砲と傳へる官軍のさし  
 来る中へ二月は嘘と打放せば或は中へ天は打とらむ或は  
 と打放され人馬益々よに倒れ配進んやうらうらう劉延光  
 を見て士卒は中へしてさく臨陣敵のれとる固く搦めいんを度  
 らん左右の回より進み美よとく教の兵に路にかき懸  
 放しを尾と慕ひ女蘿よとくけ巖角は足とはまたとら  
 きつとて推せざる案のぶとく搦めにも城兵僅くのみ命人河

の用をさる侍もなく應龍夫婦酒宴を叙し遊くとして居たり  
 る所は左右の同道より二月は嘘と聞成ゆる教の兵を統とほ  
 るをさる先と乘ひ切て入るは思ひ没けぬ城兵もさしき  
 と周章をさされ防ぎ我れんとる者なく我れよと逃出せむの  
 険固とさへりし軍兵も先と押して大に勢をたしあるも  
 又後乃官軍得たりしとく二月は攻登り柵を破り運  
 本と崩れ出るに切られ揚朝棟も九軍の内討死  
 揚應龍も今先とと思ひたれが室は火とけ自縊死す  
 官軍遠るや切なく應龍が妻田氏をも一刀に切殺滅後  
 教百人を捕は討死首は石の首並に亂敵と唱へ軍とま  
 とめ都として帰陣す



口口口口口口口口

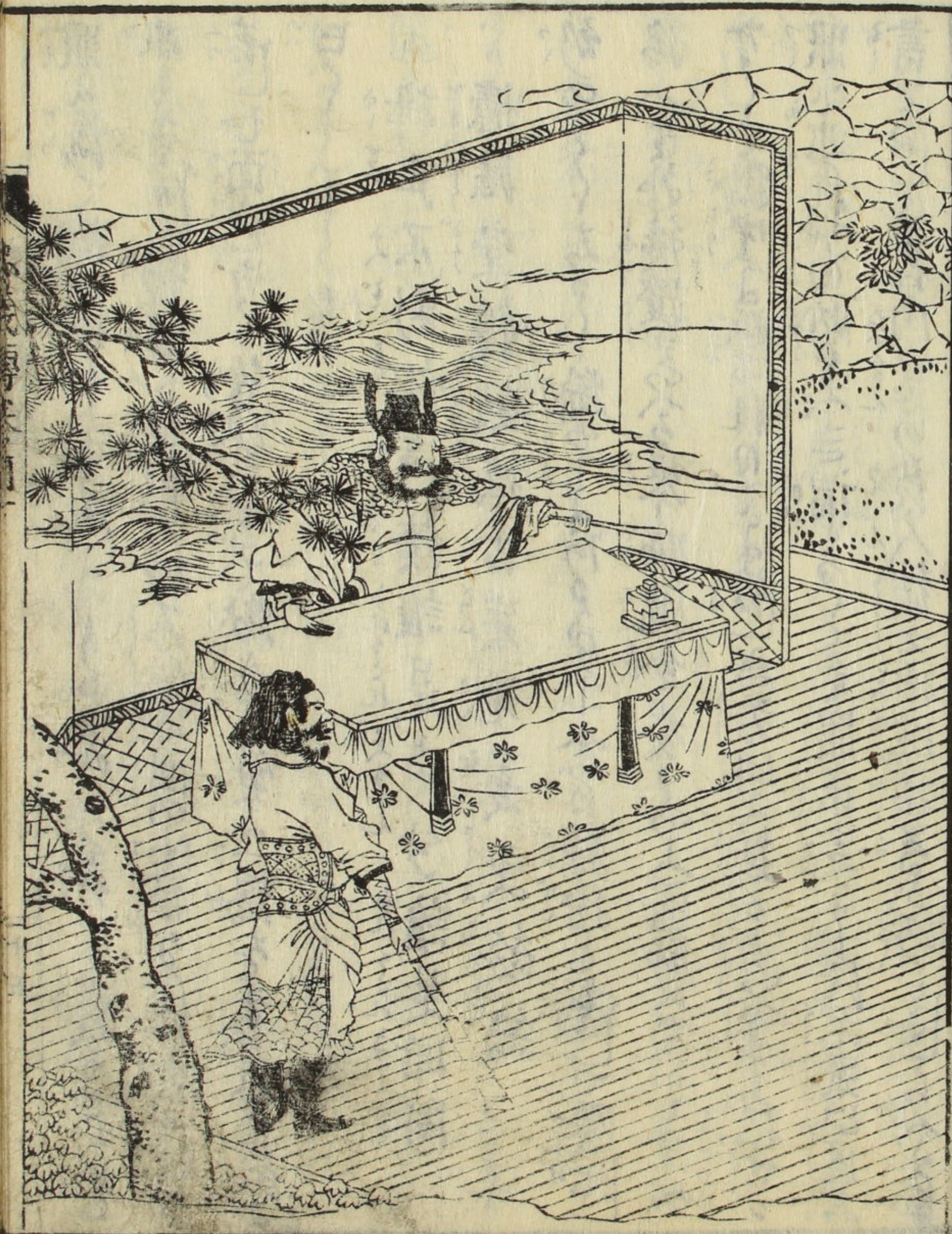
劉綬進同道  
斬揚應龍



僧達觀坐化獄中

去後は萬曆皇帝の明善酒色よの弱き治ひ所政事心  
 うばはしゆれあやう打續き天災地妖屢るれい万民安ん心交  
 りずくはるるやう出来ぬら全歎き悲まざる箱のりは帝の近  
 臣張養廉院一費よとる貴臣の帝へ酒多の勸めたり寵  
 と蒙り恩賜と命り政道と乱ぬとは官庫に積たる金銀を  
 日く夜く減ぐ専ら國の奉貢とは税と産て臣の材室  
 と歎めさせらるるは百姓も眼も怒り忠義の臣の國の  
 基かりこと疏して治めずれと侮臣も乞と隔て帝の憂  
 り知し世治り日く大者後のと募るる或時内程乃沖殿毎  
 匿名書とあしりるる孤群臣懐と披きんは帝沖寵電

の沖妃鄭美妃と沖方望をなと悪して帝へ換へ港法自ら  
 帝後ろ身三の望をなとを子に傳きなると密に誘ひ  
 中と書裁り帝けりやと使し百に鄭美妃元未路りて未  
 望をなと後養はしるるの是は必送惡の乱臣も朕も  
 が間と離し妨んとり工をかりん急ぎ匿名書世貴人を捕刑  
 罰とさしは嚴に治りみされけ治義我匿して朝廷と強  
 りき安ん達觀崇拍大師との大高德の後師あり康玉揚  
 との者もたにけ大師と系法と師才の約あり又諸士澳と云  
 貴曲の内臣ありけ者大師と玉揚とと怒るるのみそけ安ん匿名  
 書に玉揚が不業とて達觀が能るる書と稱くは似はりき  
 妖言と捕へく港法とれい表とて達觀玉揚の二人を安ん



僧達親  
康五揚多  
下獄

忠義傳卷前

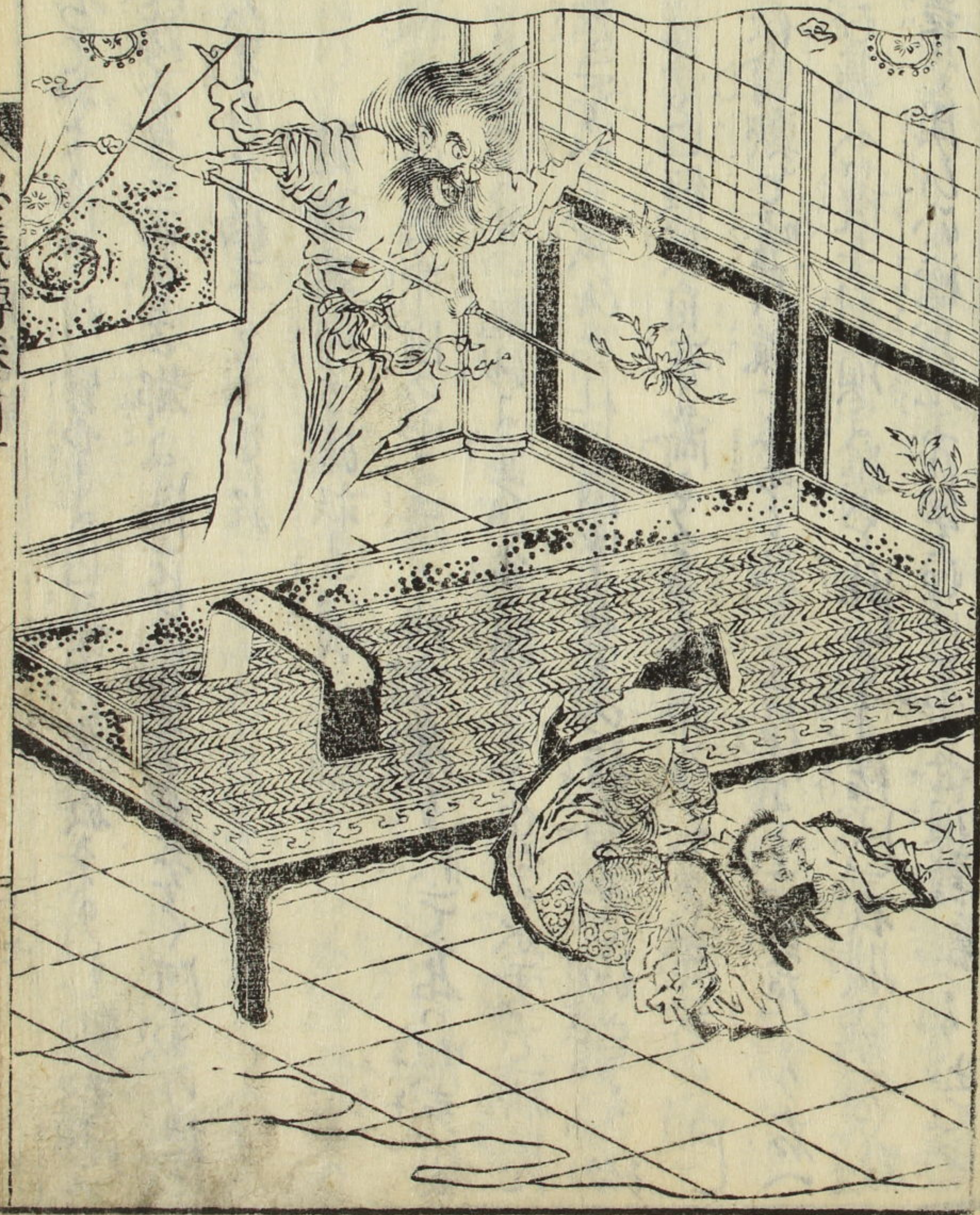
十四

罪よりて獄の枷をへく獄より出ぬる乃其と受ぬるこを是  
罪よりしり動移之違観大所乃心要固の知獄るんが受ぬ教き  
活しむ面色なく等現とてて獄舎の壁より一隅を書以て辭す  
曰く

柝声不絶鈴声續誰是声兮誰足聞因  
憶法堂鐘鼓後古来魂爰又紛紜

初のどくまろ獄中より十余日静持とて遷化  
終小そ外種澄とる琴師沈令卷とる医師とるにみ  
かくて獄中は常れりて苦き考問は然るとして犯せる  
罪も此れは白状とるき謂もてそ罪未定まは元来け匿名  
書とてしる内官の貴人猶士復沈祐多巧とてしらん

ゆかりるぬを罪を人ぬらんとく形然るれ若と捕獄と  
いふあども終は是事落忍とるき体もとるれい曠生光とる假  
令しる罪人と彼匿名書とる若と号け引後確りけて  
諸人の口と塞きとる實に曠生光の復令の大罪れい令助  
るべき若と罪代とるも犯さぬ罪を罪せらるる怒とて死  
りそを復彼貴人猶士復年とる大獲と後下りもあゆとる  
匿名書とてしる我をおかるとりて悲や曠生光の怒  
とるさんとく毒をそやと担ひ死に死しとる不思後や死  
とるそを屍體にけたる罪人のどく肉きとくは穢とる見え  
る人吾れとるしとる沈祐も同じ曠生光が死罪に犯され  
も同じと死しとる激は積悪乃余殃とるも身の毛もよ



怨靈殺  
菊士須

ざらて押さへし、初宮中より内乱の起りぬるや、鄭芝純が  
清海公第三の皇子都ははし、海人をしてきく、河内地方に  
揚子江に於て福王と号せられた

韃靼建國号は寧寧大明

韃靼國のふくま中国の北に隣り地方廣きに在り、  
トウリ西の天竺の龍沙は並びを國からが由は水雪と所は  
人強きとて、然し北國中より里の強馬多く、切きり  
馬と事とに候、横自在の御とるや、他邦より人よく及ぶるは  
少の禽獸と喰ひ獵と業と、文字の邊は十二頁あり、右へ  
讀む其人の政を刺頂、髪と跡して、了結は衣服の多く、鞅  
の率と用ひ必、禮は尤も、其の世祖韃靼より出て中

國と代後、しより以来、堯舜のる廣まり、仁義の教、國中より  
くして、頗る蕃夷の風俗を、しよめ、然るは明の長、萬曆の初  
廷政の善じて、百姓を、若し、國中の人民、韃靼への、若し、  
比、射、韃靼の大王、奴兒哈、との、若し、天の、後、世、は、智、あ、く、徳、を  
以て、人と、懐、け、出、る、中、國、と、親、く、て、是、と、征、せん、と、國、る、明、の、萬、曆、に  
十六年、韃靼國号と大は、送、奉、号、と、天、命、と、建、其、元、年、貝、勒、王  
との、若し、と、軍、帥、と、して、三、百、余、万、の、大、軍、と、配、  
  
九月の、は、じ、り、韃靼國と、出、陣、し、萬、里、の、長、城、を、穿、過、  
小、碛、を、越、過、と、え、田、は、明、の、大、お、李、永、芳、と、つ、り、し、り、  
僅、よ、二、万、人、の、兵、と、配、  
て、守、り、る、が、清、の、大、軍、三、百、余、万、人、を、敵、對、  
と、す、き、中、より、あ、ざ、し、が、塘、と、取、り、て、降、系、は、貝、勒、王、大、軍、と、引、て、塘、の、





忠義傳卷前



忠義傳卷前

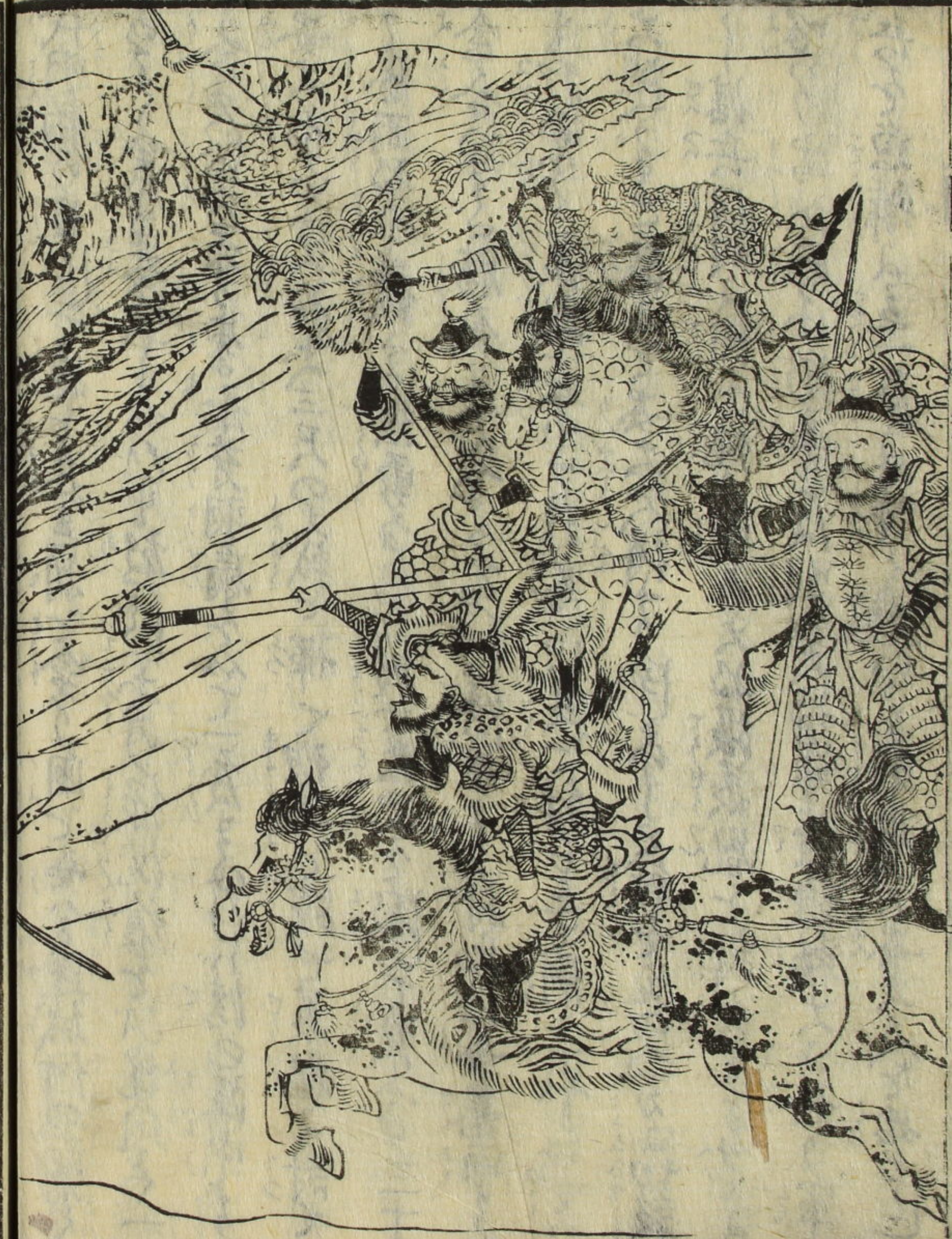
明人利氏  
海江

男の百姓と安んじ奉<sup>レ</sup>税と免<sup>レ</sup>味方の軍士は令と出<sup>レ</sup>丸坊  
 狼藉望<sup>レ</sup>其の百姓の妻ある者よ<sup>レ</sup>難<sup>レ</sup>親人の娘を娶<sup>レ</sup>せよ  
 女の難<sup>レ</sup>親國に送り嫁せしめ兩國の男女婚姻と<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>其の仁意  
 の政と<sup>レ</sup>終<sup>レ</sup>一方民と接<sup>レ</sup>済<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>化<sup>レ</sup>人民大<sup>レ</sup>悦<sup>レ</sup>び<sup>レ</sup>況<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>の  
 政<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>町人百姓皆<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>判<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>改<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>朝<sup>レ</sup>の  
 天子萬<sup>レ</sup>歳と<sup>レ</sup>祝<sup>レ</sup>する<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>の朝廷よ<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>曆<sup>レ</sup>帝<sup>レ</sup>大  
 又<sup>レ</sup>警<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>二十萬の軍兵と集<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>李<sup>レ</sup>維<sup>レ</sup>翰<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>胤<sup>レ</sup>と  
 兩<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>河<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>防<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>師  
 貝<sup>レ</sup>勒<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>降<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>永<sup>レ</sup>芳<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>二十萬人の軍勢と<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>河<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>  
 来<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>戦<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>胤<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>虎<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>賞<sup>レ</sup>金の<sup>レ</sup>銀<sup>レ</sup>  
 是<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>陣<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>罵<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>李<sup>レ</sup>維<sup>レ</sup>翰<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>面<sup>レ</sup>黥<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>累

代<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>朝<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>臣<sup>レ</sup>として<sup>レ</sup>恩<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>忘<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>貪<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>賣<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>遂<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>面<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
 みる<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>来<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>敢<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>孫<sup>レ</sup>沈<sup>レ</sup>槍<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>孫<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>一  
 又<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>来<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>李<sup>レ</sup>永<sup>レ</sup>芳<sup>レ</sup>羽<sup>レ</sup>扇<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>陣<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>より  
 安<sup>レ</sup>大人<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>尺<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>戟<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>揮<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>鞭<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>躍<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>胤<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>討<sup>レ</sup>て  
 凡<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>西<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>破<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>強<sup>レ</sup>勇<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>破<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>戦<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>十  
 余<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>負<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>毒<sup>レ</sup>幕<sup>レ</sup>雨<sup>レ</sup>より  
 も<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>繋<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>胤<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>乘<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>倒<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>  
 大地<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>落<sup>レ</sup>ると<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>大人<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>戦<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>刀<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>殺<sup>レ</sup>  
 一<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>附<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>圍<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>李<sup>レ</sup>維<sup>レ</sup>翰<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>怒<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>軍  
 兵<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>辨<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>嗔<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>喚<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>刺<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>大人<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>に



長義胤  
安大人  
信河國



忠義傳  
卷前

法の大軍は勢ひは殊場(とくば)李永芳も法にも入隊(とく)とて  
 さんぐも法を以て明兵大に勇を余ははして追討(おいつ)の二十里外  
 後(ご)の幕(まく)より別(わか)れ日光(にっこう)西(にし)に沈(しず)み又(また)遠(とほ)寺(でら)の種(たね)多(おほ)軍(ぐん)人(ひと)の  
 肝(かん)とをきくしむ耐(た)よお國(くに)とわがへく鉄炮(てつぱ)一(ひと)多(おほ)をきく後(ご)こそあま  
 玄(げん)武(ぶ)兼(けん)雀(さく)の旗(はた)二(ふた)流(りゅう)と月(つき)教(がう)まきうめき出(で)く法(ほう)の先(せん)鋒(ほう)右(みぎ)全(ぜん)  
 王(わう)右(みぎ)先(せん)鋒(ほう)海(かい)利(り)王(わう)各(おの)十(じゅう)万(まん)人(にん)の道(みち)兵(へい)を引(ひ)降(くだ)し同(どう)乃(の)より横(よこ)ぎに  
 関(かん)を他(た)へく斬(ざん)てうれい秘(ひ)めはせ世(よ)に安(やす)大人(おとな)馬(うま)と返(かへ)して躍(おど)り来(き)り  
 三方(さんぱう)より探(たん)合(が)せ嘆(なげ)き呼(よ)んぞ我(われ)ふまを明(めい)兵(へい)粉(こな)のどくく礼(れい)と麻(あ)の  
 下(した)く斬(ざん)削(せう)され七(しち)類(るい)八(はち)割(わり)討(う)ち者(もの)殺(ころ)す十(じゅう)万(まん)人(にん)血(ち)の流(なが)れとく河(か)とに  
 屍(しかばね)積(た)むとに似(に)たり表(あらわ)し明(めい)の軍(ぐん)李(り)維(い)翰(はん)法(ほう)の種(たね)多(おほ)夢(ゆめ)  
 表(あらわ)す者(もの)殺(ころ)す捕(とら)ふと三十(さんじゅう)余(あ)万(まん)の軍(ぐん)兵(へい)忽(たち)に法(ほう)へぬまは貝(かい)勒(りやく)王(わう)本(ほん)  
 よる終(はつ)るび刻(こく)法(ほう)の大(おほ)軍(ぐん)按(あ)政(せい)王(わう)を法(ほう)河(か)城(じやう)に法(ほう)の官(くわん)庫(こ)と  
 用(もち)ひく百姓(ひやくしやう)と旅(り)はし悉(ことごと)く美(み)貞(ぢん)を免(ゆる)し頗(おほ)る恩(おん)惠(けい)をのりて  
 氏(うぢ)と安(やす)んじぬまは百姓(ひやくしやう)類(るい)を極(きよく)く喜(よろこ)ひいさく長く法(ほう)國(こく)の民(たみ)  
 うらぶと既(すで)に削(せう)て破(やぶ)後(ご)にたり

繪本國姓爺忠義傳末篇卷之二終

繪本國姓公忠義傳花編卷之二 目錄

第一回

貝勒王定計討劉挺

白氣現東方之國

丁知潞斬杜松之國

明劉挺降谷圍清軍之國

鄭芝龍為遠征畧

奇書免難之國

羅釵而鄭芝龍為難之國

客氏得寵為乳

第二回

第三回



魏朝與宋受用乾法宮中之圖

宮氏使諸妃為餓死之圖

貝勒王定計陷瀋陽

天啓帝自他巧之圖

貝勒王定計之瀋陽之圖

書第12回



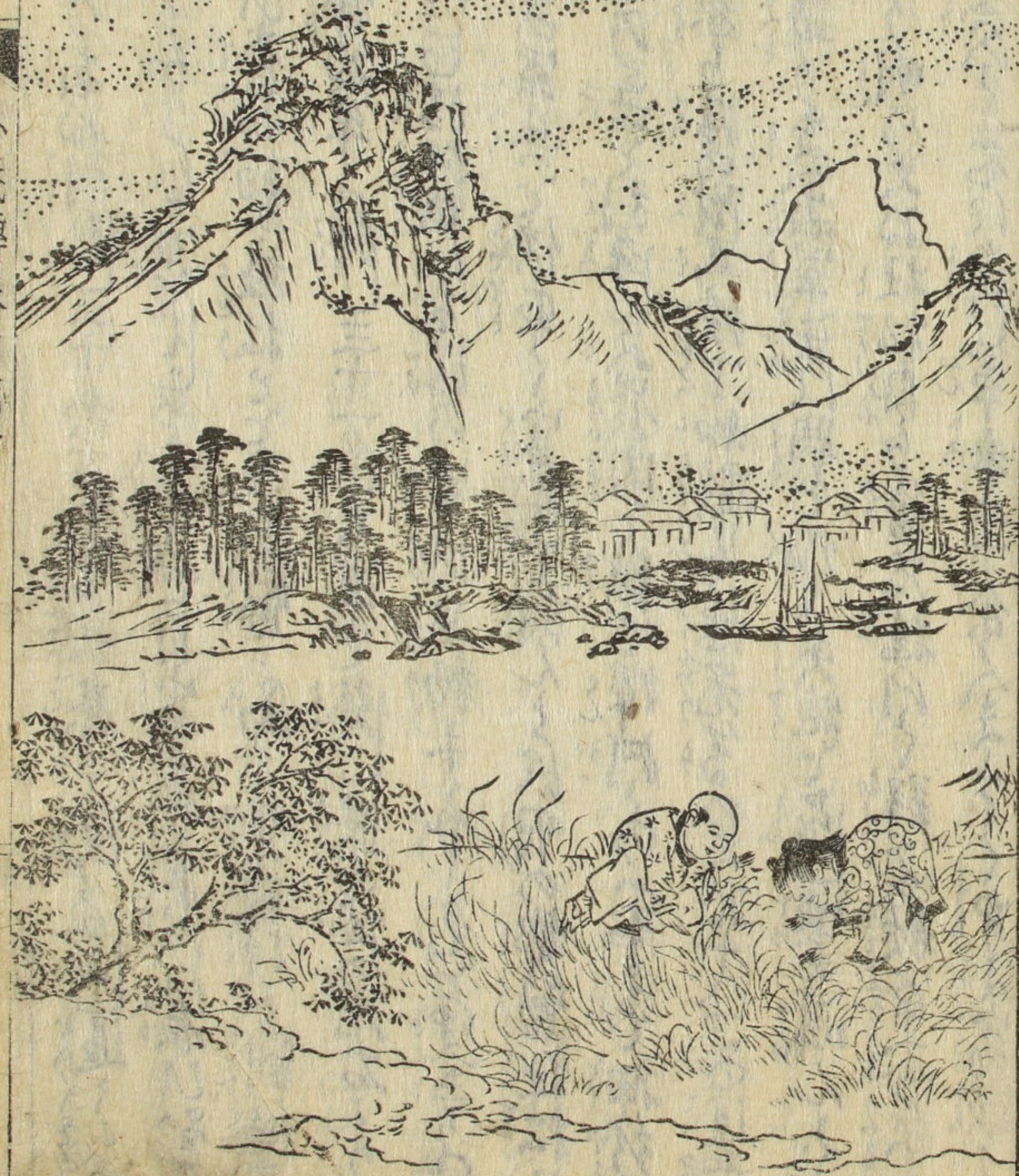
繪本國姓爺忠義傳卷前篇卷之二

貝勒王定計討劉綎

天衆民と守に之ふるよ君とあて之と其の治む人も不徳  
 ありと政と布り均らざる射り天を示はし苗とみて不活と  
 滅むとありけし討候毎は白乳東の方より来るべき  
 り百本をり明の朝廷天文博士を有て其若山と考へしめ  
 終ふは是處を旗とる星りて軍乃後人象と奏以志  
 のをかすは都道き國の山家回園を論せは去より毛と性  
 其の或い白く又い黒く長きの一尺余より右者淮南子を  
 引て曰地毛とせざるは兵記に民安くはは奏使は帝是を  
 使し石と河心と若しは終ふは魏朝の軍陸して李維翰張

忠義傳卷前篇二

白氣 現 東 方



白氣 現 東 方

義胤のあつ討死し二十余万の官兵悉く潰るるよし追々養  
 父しるるや、帝ははじきあはれせ百官も多し震ひおそ  
 と再び李如柏と杜松とを都督とあ、柴國柱と劉燧と  
 とを撃つ軍を辭し三十万の大軍と發し遼の地の左右より  
 進發せし法河城にも遼の軍師貝勒手多、先と安きより  
 て数万の軍兵と使來り官軍と討んと、大明の都督杜松は  
 十又二万の兵と引降し、又炭関を城て、法河より、平を、押引  
 くるふ忽ち法河の附馬、鉄丁、知彪、馬德光等の大お十八万の道兵  
 と、て、遼より、ま、あ軍、まに、間を、焼り、矢炮と、飛、噴き、叫ん、ど  
 殺さる、明の大お杜松自ら、槍、矢、搦、引、く、群、る、敵、軍、一、會、衆、  
 あり、突、入、り、希、に、進、む、軍、率、二、十、余、人、ま、く、中、よ、突、入、り、

與、法、河、用、き、中、軍、一、切、入、り、法、河、の、大、お、丁、知、彪、大、き、の、怒、り、大、八、乃  
 戦と、て、杜、松、と、目、が、け、討、て、う、り、双、方、は、ゆる、強、勇、る、れ、い、南、附  
 より、南、附、ま、で、火、あ、れ、ぬ、く、鉄、ひ、ろ、ろ、丁、知、彪、の、小、湖、の、勇、將、李  
 い、ま、い、三、十、二、萬、の、杜、松、の、發、既、よ、又、十、二、余、り、ぬ、ま、は、終、り、敵、と、あ  
 り、然、る、力、及、ま、き、る、法、河、を、血、と、は、て、馬、より、落、ち、丁、知、彪、が、た、め、み  
 討、ま、る、大、お、く、れ、ど、ろ、れ、明、の、二、軍、大、破、を、討、り、者、教、と  
 知、る、法、兵、の、勝、る、際、に、逃、る、と、追、く、進、む、後、よ、は、柴、國、柱、の、軍  
 兵、十、八、万、と、も、え、ん、ぐ、は、楊、嗣、を、陣、先、の、尖、さ、り、利、刀、の、竹、と  
 破、ぶ、お、く、敵、難、く、ぞ、と、入、り、る、明、の、大、お、軍、劉、燧、の、老、練、の、名  
 ぬ、る、れ、が、同、ろ、より、大、お、と、進、り、勝、つ、法、兵、の、心、中、(あ、い、い、よ、  
 ら、は、斬、り、突、立、り、必、死、よ、ぬ、く、鉄、ひ、の、法、の、熱、軍、大、の、と、道



丁丑  
新  
杜松



長門守

五



長門守

六

陣脚とさうの右に彼を往つた分と大に附馬鉄馬と陣脚は  
各の出しを龍刀と打ちつて當るを幸に切て海勇と奮て  
血氣といはれ兵士もさう方と追つてしつ生紀を去つた  
烈々たる次で明の先鋒劉拓孫と漢の探者即故  
山西の邊に偃刀と打ちつて馬とまじくお戦ひ深草踏天の  
威と道ふといはれ方良少門天の勇と震ひ馬烟と挙げて  
六十余合戦ひしが劉拓孫目明ふも多し電のどと猛  
おるんが少の透間馬とまじく刀と上げ終は故山と西の斬  
て海勢ひはまむく殺害といはれ漢軍は叶つた陰谷の洞  
門の軍と刃切刃交へる銃と放らると飛し安と全を戦  
ふると明軍もた中とく進んで討つ能つた陰谷と打圍と

輝と鳴し鼓と打水も激しと奏つるるるは不極明漢河  
西縣の軍兵二万斗劉挺が陣を棄りてやつるは我々の  
城軍は皆ちらと婦女と奪つた材室は多し困窮とるる  
兵今明の官軍兵と討て我軍と戦ひ終はは取り余り  
の法と困恩と敵をさうんる勢と採つて多しはのりは勢  
は加らと城卒の首とえてはしき怒ととらとせ終へと  
中々れが劉挺大きたらとび困恩を忘れは加勢せるは  
方うと是と孫とを勢と二に別う一は陰谷の攻は向い  
一は本陣は向い休足せむ耐はも耐は日曉の兵漢の軍脚具  
勅王二十万の大軍と引陣し附馬鉄と接んといはれ押寄  
劉挺の道と切しつるるんが少しと強は劉拓孫は七万余

人を交陰谷と美討し自ら八万余人の官軍と陣し西庭  
 柯らにおお先鋒とあり西山のす後陣とあり清軍と交  
 あり貝勒王は形勢をみる兵をよしの登らしめ安軍と眼  
 ちたけん押し味方の勢を顧み軍ははるや勝るぞ進めく  
 とや知しんばいさうでさふ勇まする胡國の兵率何の將し  
 れ勝べき忽強九の坂と下るぞとく教方の道跡一日は晴と真  
 て明の軍中切てうれを勢い浩る九年は繼り細き境と  
 清の兵し明勢防ぎ我んとするふ便と多しは角八方教  
 し討る者教をさうに劉継をに勝りきてる者あり  
 さまる國のお小忠と慶し死して君恩と報せよとさる者  
 まるく妻龍の偃刀と生向よとさるば湖のぞく押寄来る

清軍乃中一面もろに討て入縦横を盡し斬首と清軍の  
 教の毒若雨のよとく飛来りて又進み我より往りて  
 らびり引し劉拓孫とよにあり陣と固めて我んと此の  
 耐先又明乃陣中よ入也し按明清河の軍民二万余人年統  
 國と造り明兵と斬て教例は是則貝勒王が斗略はく彼婚姻  
 をして懐け貢税を免して恵とあふ軍民清のお小忠と  
 さんと貝勒王が斗略を愛て劉継を歎き進てより陣中入  
 也しこのんけ者よと斬らる明の軍中よとりて強勅我よ  
 ぶれ術と多し教とる者教とさるに陰谷に籠る附馬後  
 軍兵貝勒王が援兵来り明軍教れせるとんがれはと討て  
 かく功名を存せよと教方の軍兵國と揚げ無二無三討く



忠義傳卷前篇



明劉經法谷  
圖法軍

忠義傳卷前篇

七

くしん面より具執王大軍と廻く余とと攻る中、撫順  
清河の勢二万余人發りて折居に於て明の官兵と我  
んとと争ふありて死せざるを求めて後をせざる霜風の疾く我  
と相つりかやとれい大に劉継我討死の候しと云ふ事あり味方  
を余にに及は具執王と討て死んものと勇と云ふて敵と折  
り殺を云ふは云ふも同じ余の三方の大軍其身令後継  
ぎは殺す所の死と夢り終に撫順の民は討てし軍中  
命と病しるの痛しうしに死分劉拓孫賈庭打の西討  
死せりこれ明の三十万と云はし軍兵討て死に死今も  
六万余騎ありけしは李如柏を敵討てき力なくよと云ふ  
引りたる

鄭芝龍の遠征

去後、萬曆皇帝は種々兵勢を強めて、あまの軍官軍  
使を以て、李如柏を官と削き、庶人とし、李如柏を  
を擧ぐ、賊を討し、め、死んとして、群臣と集り、高深  
御史楊傑進んで奏し、そのは、竊に天下の材官と云ふ  
ん、小島、附島の總都督鄭芝龍こそ、武略文韜、漢二万人  
を敵とて、英雄なり、渠が家系と悉く、見ゆる小島、世  
象洲、安南縣の庫吏なるが守、蔡若松が館と其家お  
並り、鄭芝龍十歳の附獻とて、石を投て、守の額、中云、鄭  
芝龍と擣へ、刑せんと、以、死る小芝龍、漢女乃、李若松と、うり、  
き、死んとして、曰く、是、美人の相あり、殺さず、と、溜て、則、免



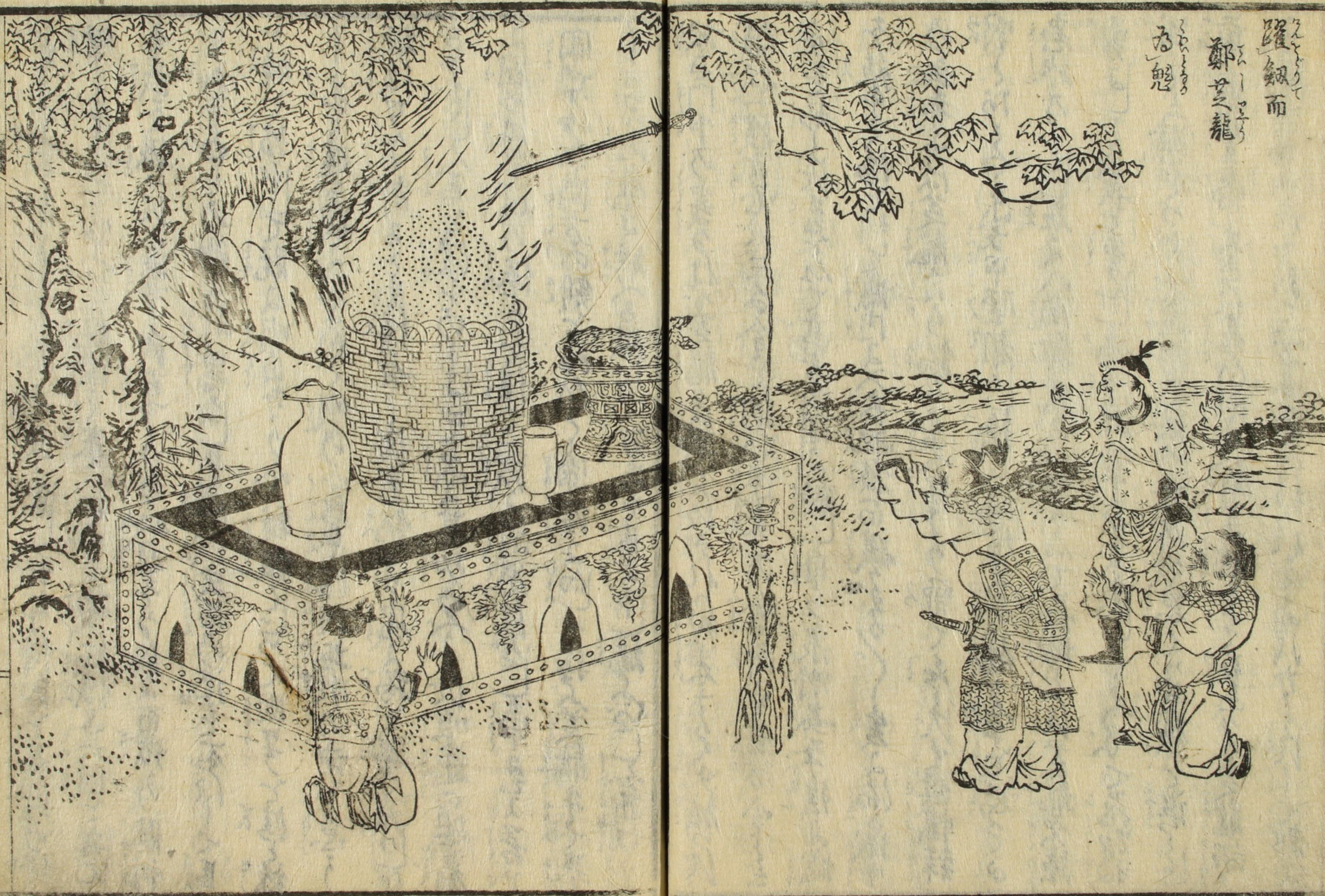
奇童  
兔



忠義傳  
卷之四

と芝龍長人くそ牙鄭芝虎さるるに海島へ入る敵振泉と  
 へる海賊と偽し盗とるに後南蠻よりて火船を遣ひ日本  
 へ送り叔術と振泉の盗魁敵振泉とるの後一人を擇んで  
 魁とせんとしえ素衣程は暗に群盜謀議の心あり君魁とせんそ事  
 止は是よりんく衆盗天より新米一斛と積てそよに一つの船と挿  
 入せしは是に向門へ礼拜し剣の躍り動きと地に居るを  
 天の授くる魁敵方よりと定め衆盗皆是と拜し獨り鄭芝  
 龍が再拜とる所よりとてそ叔術躍り飛で地に居るを以て鄭芝  
 龍とるんくまが首領とて後國の海上と縦横とれども官  
 兵と敵て捕るる族は遂に巡按使是と懐けて芝龍を圍り  
 總兵遊擊とて芝龍と海の情は志り國師の海賊とるる  
 故き門下の妻るれば芝龍が艦とたざれば被素するもの族は  
 緘口一渡は必だ三々令と納む連年の會計を裁り令と云  
 めを知らば是とて其が國を敵し自ら泉州安平港に城  
 を築きと海と引て城内に入らぬ敵を以て安んずるに  
 の兵卒は芝龍自ら餉を以て官守り曾てそは芝龍を  
 明とらざるふ衣甲堅利に強し海賊名芝龍が命と恐るる  
 鬼邪なりとせぬは八國鄭氏の一族を以て長城とて芝龍を強  
 勇はしと義と事しに海法の軍より懸しく人味を以て  
 軍とて集とめされ遠陽と懸しめ給り恐る其被を以て  
 萬曆皇帝とまされ給り鄭芝龍をそとせざる芝龍  
 一應に三々の兵を引て二万余里の幼弱を以て力に於て都

躍たぎ而り  
鄭てい之の龍りゆう  
為な魁かい





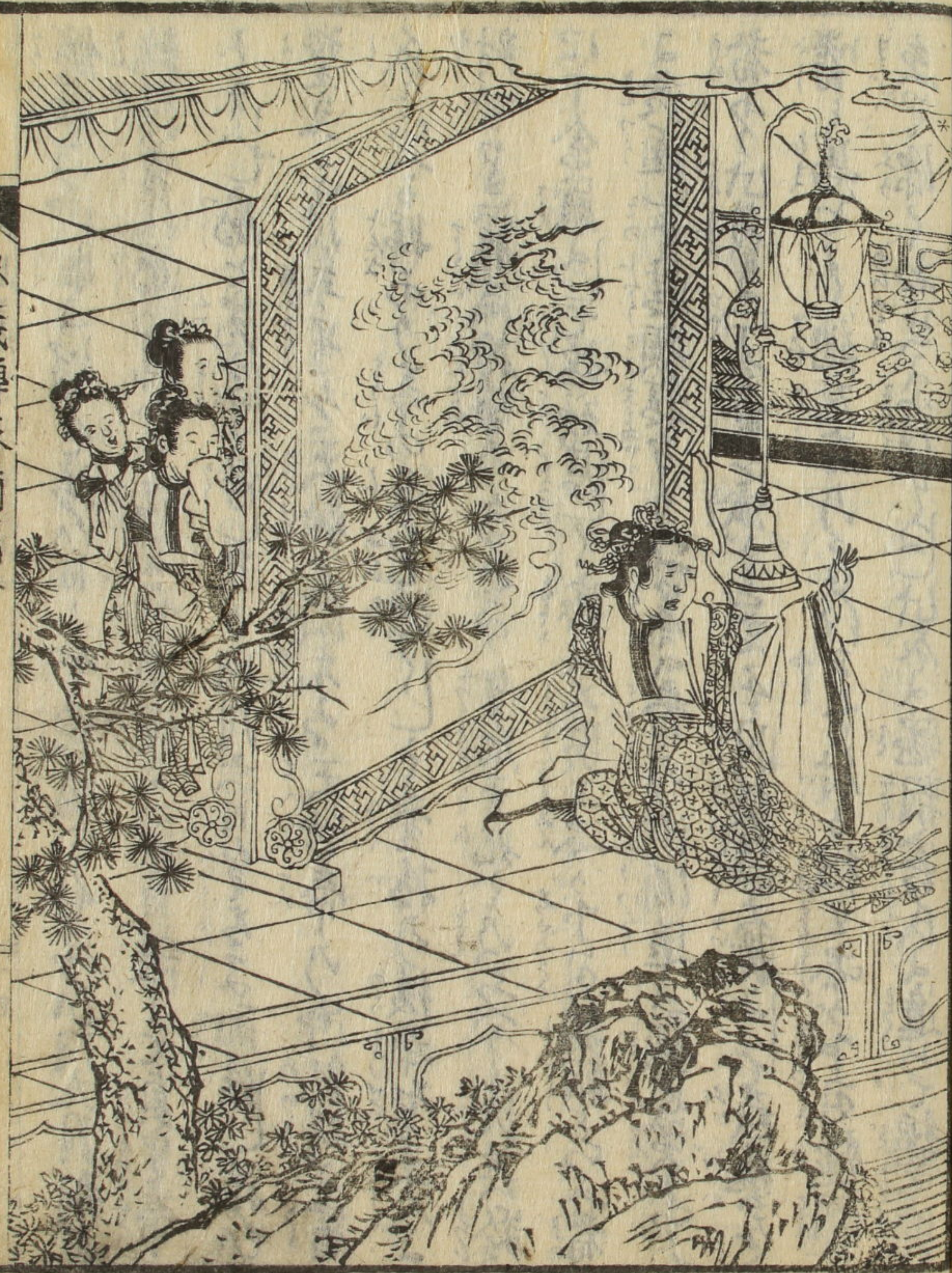
劉宗帝劉鄭芝龍と都御使と兵部侍郎と邊境の終  
略とらじしめ給ふ芝龍謹と奏して曰く抑征伐其國と安ん  
を臣を振る民を要と臣古より白奴寇をうけ又百戰の勝利  
も和をおとの外に計畧は是歴代史臣の記を本はして臣  
が辭と符じて既明白なり今韃靼とてて國号と傳と稱  
し元と建る期は乃の明の官軍清河板眼の地と急り  
烟後せん計るも得ざるは是飢う虎と物と驅て殺しむ  
るがじし人馬と後とのしはして其功あふは唯邊の地と敵  
は固め成り城の倦るを候て一戰に討たれ臣は帝先は若と  
圓せ給ひ尙方の剣と給ひく遼陽は向め給ふ芝龍身を美  
しるの内庫は給へる銀に十萬と長し下賜は臣は所計

美民と振ると帝是ともゆは給ふ臣はとてに十萬の銀を  
芝龍は賜ふ芝龍安は抄ひく教十萬の官軍と引率し不目は  
遼陽の積とあり賞罰とつくり正し其の權と復けて死をの  
靈とあり軍民は十萬と報とあらふとありとて傳と  
傳は石が冬で垣とるく嚴きに城と守るは遼の民は  
てせしるを地をぬ

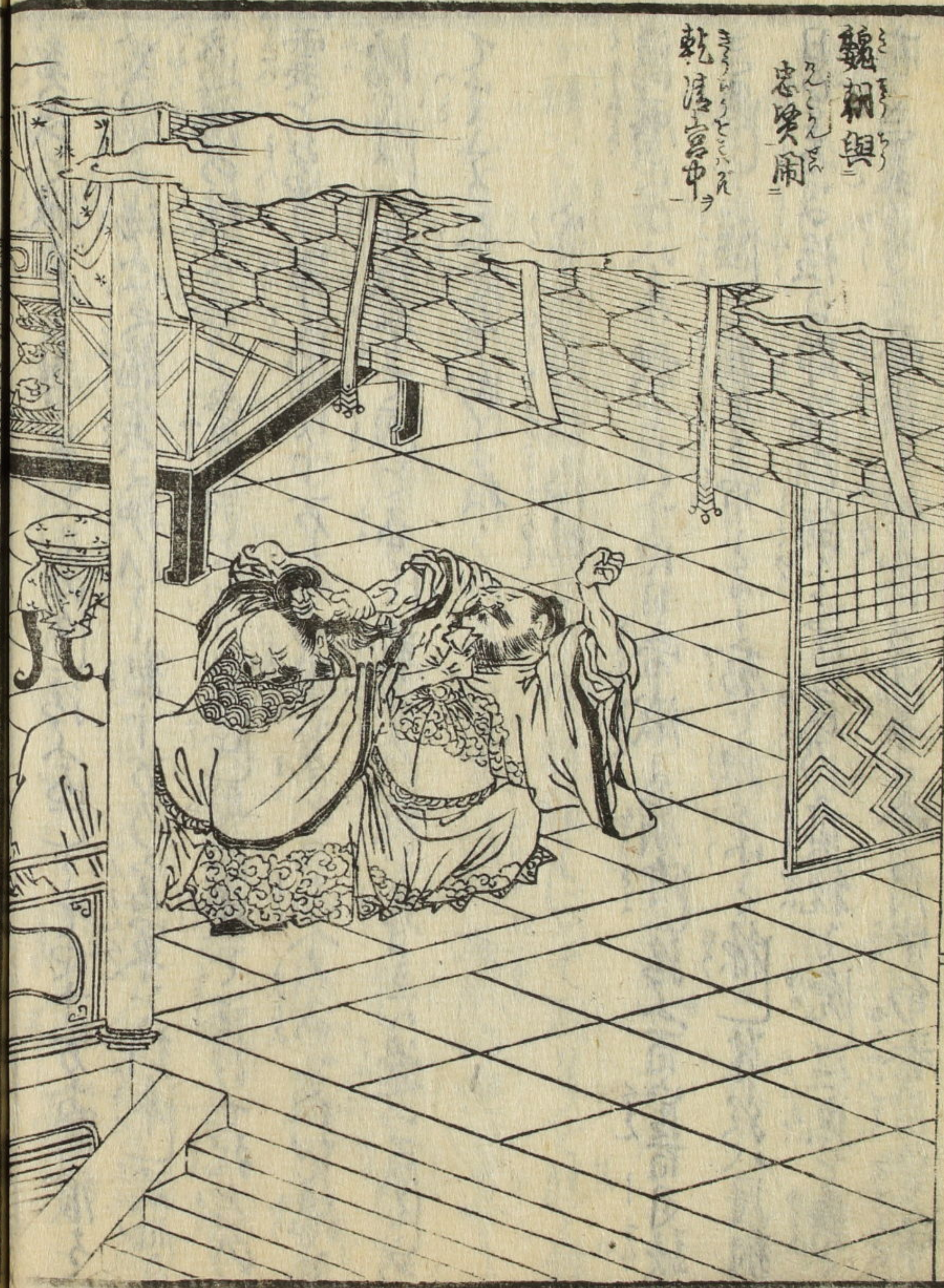
客氏得羅為札

萬曆十八年秋七月十日日帝俄は崩沖は給ふ百官百司款  
き逃しと遜て額皇帝と帝廟と神宗と稱しなれ八月朔  
日皇太子位に即給ひ詔と下し民乃負税と免し仁惠と傳と  
布き年号と泰昌と改えあるは乃は今月中旬泰昌皇帝

史記卷一百一十五



忠義傳卷前篇二



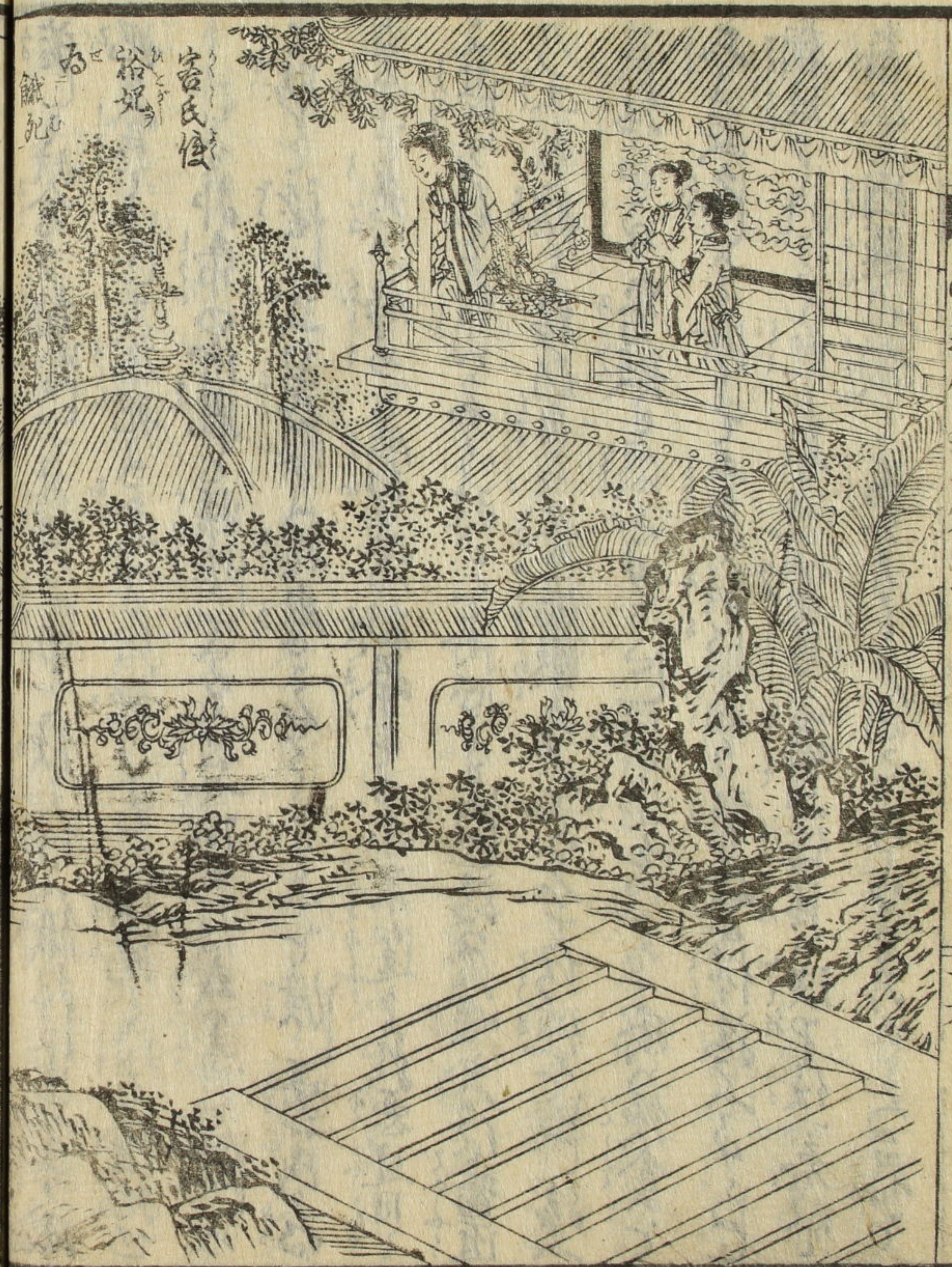
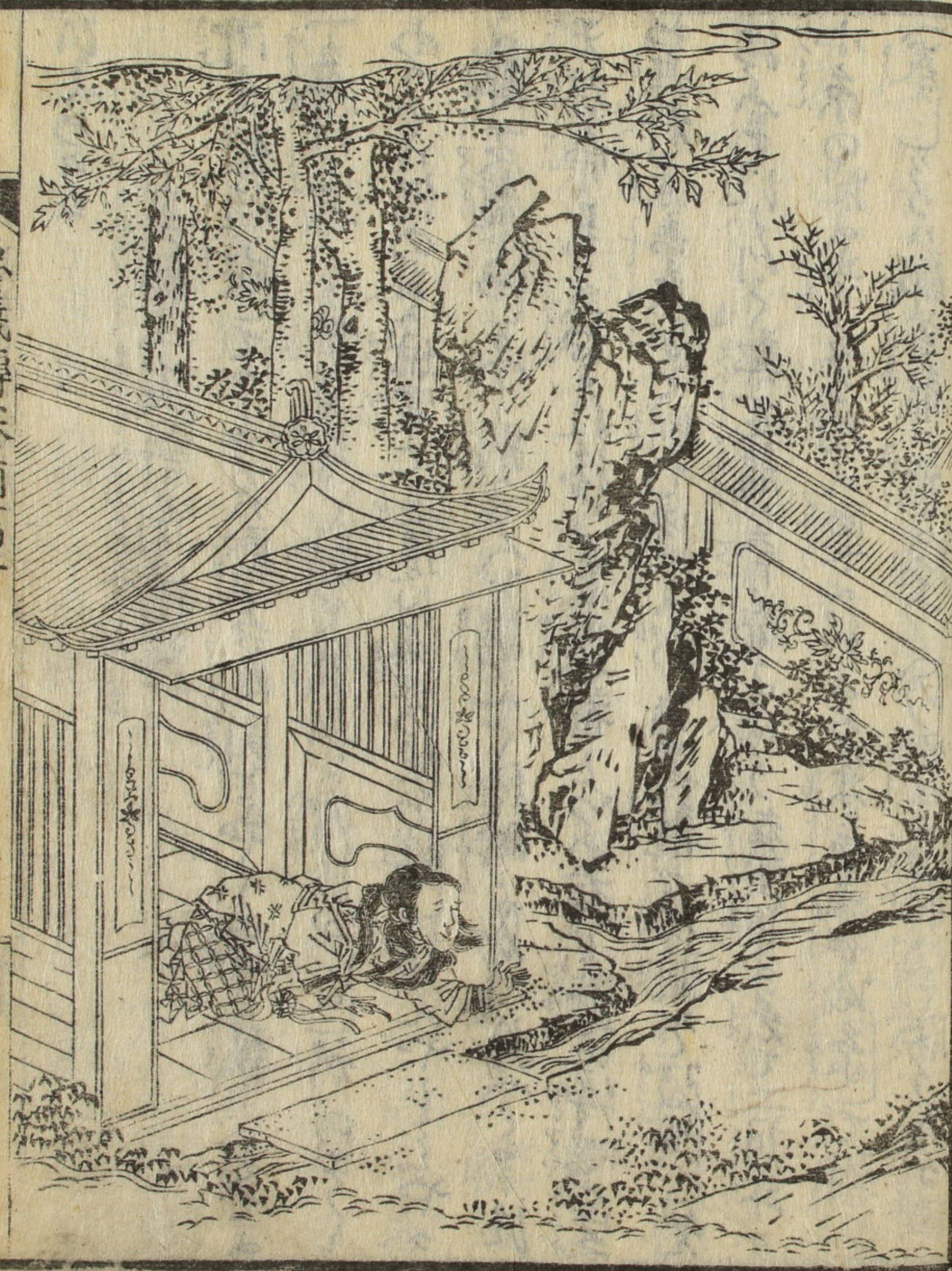
魏朝與  
忠賢用  
乾德宮中

忠義傳卷前篇二

惟神乃神腦ははるを後ひ日く奪宮威をせ給ひ日九月朔日  
 乾清宮に遊し給へり後在り僅に三十日諡して貞皇帝  
 とまほし廟と先宗と号しなり日月六日皇太子即位し給ひ  
 聖年正月年号を天啓と改えり天啓帝乃神乳婦は宮  
 氏とる婦あり帝の慈母也く登極乃後奉聖夫人と  
 封せり且寵威指擗乃るきり皇后を妃し及ぶり其齡  
 に十余歳にして姪欲甚しく密に王母と下日魏朝とる者  
 其適しを情頗結かり又宮の帝乃神酒造は魏忠賢とる  
 者ありけ着目二丁の宮と威を尤も其性陰謀大膽にして武彊を  
 嗜し馬とて馳左右乃るに弓と射る彼王母が下日魏朝と  
 交り深くおほし背りはけれ魏朝宮氏は進りて魏忠賢

とる魏朝の官はは帝初の供御膳部と日しむ元末帝  
 宮氏は欲を進むる神腦のまればきこりまは是にひひて魏  
 忠賢日く刻く宮氏が威安宮へ出へて親しく訓誥びひし  
 宮氏が姪欲を誘ふ其適しを寵を魏朝に信せり魏朝  
 忠賢が宮氏は通じてるは知りて候しはとるもを元末  
 仕へるのの圖なるはは拒むをゆるけりは武夜乾清宮は  
 て魏朝忠賢等しくお合お奉り宮氏を抱くを愛せり  
 外殿は達は是より宮氏魏朝を厭い帝は浸奏して風湯  
 の地は流罪より忠賢密に毒とる人乞と殺せりけ後忠賢等  
 宮氏を乞と夢り忌む避る不はは宮氏忠賢と寵する余  
 渠が武彊と帝乃上流を御候は因官の負に連り面澳を心

寵と愛り威勢自ら割くかりて國柄を執りまきりてまきは  
 宮氏が礼形いよく慕り毎日忠告とくも河殿より出て帝  
 の宴より別り夜更しく宮人の屏風の法と慈と密令い亦  
 若子の美女と威安宮の右より王朝輔劉應坤李承貞石元雅  
 除又瀟湘んとすれ及於の若者集り酒宴とてて戯遊  
 云々彼若者多し碎し余とく美女を鑑とれと宮氏忠告受り  
 然るゆかり却て是と奥とせり是何のおとらふを去り次  
 を依費を移すもて漢呂后唐則天は勝まり後妃とす  
 る宮女たり帝の寵とれと懐妊せり宮氏は是と悪く宮播よ  
 抑籠飲食と射成妃とく宮女是と後と碣石の徳と食也と  
 養し居く後妃が命と保しむ形とて教目と經る後咽喝と  
 若しこれ余の葡萄して養るの雷雷を飲と終り餓死に宮氏又成  
 妃が食とくして後妃よとらるん始り是と後妃とく餓死せ  
 しむ外帝の御亂と懐妊しる宮女は是は或は毒と飲し  
 て胎を墜し或は老使女按摩させとくまこと誤し宮氏お  
 よ命と多し辱めと世多る者叔奉とるふ不逞とれ悪逆目  
 ん甚しこれと帝のやうれとと御心とれは終り唯此の毒酒  
 の工と好し終り自ら斧据敷りんとて巧性をばし終り  
 其精さるる魯般と吸ぶるも「宮造をばるる府の飲食と  
 忘し又之しうけりて棄て形に造り習文と傳終りすの良  
 朝廷くれとく礼とぬまは賢良の退き後長の使り仕(免)は  
 角は困蓬乃傾く不ちるんこところあまの眉と



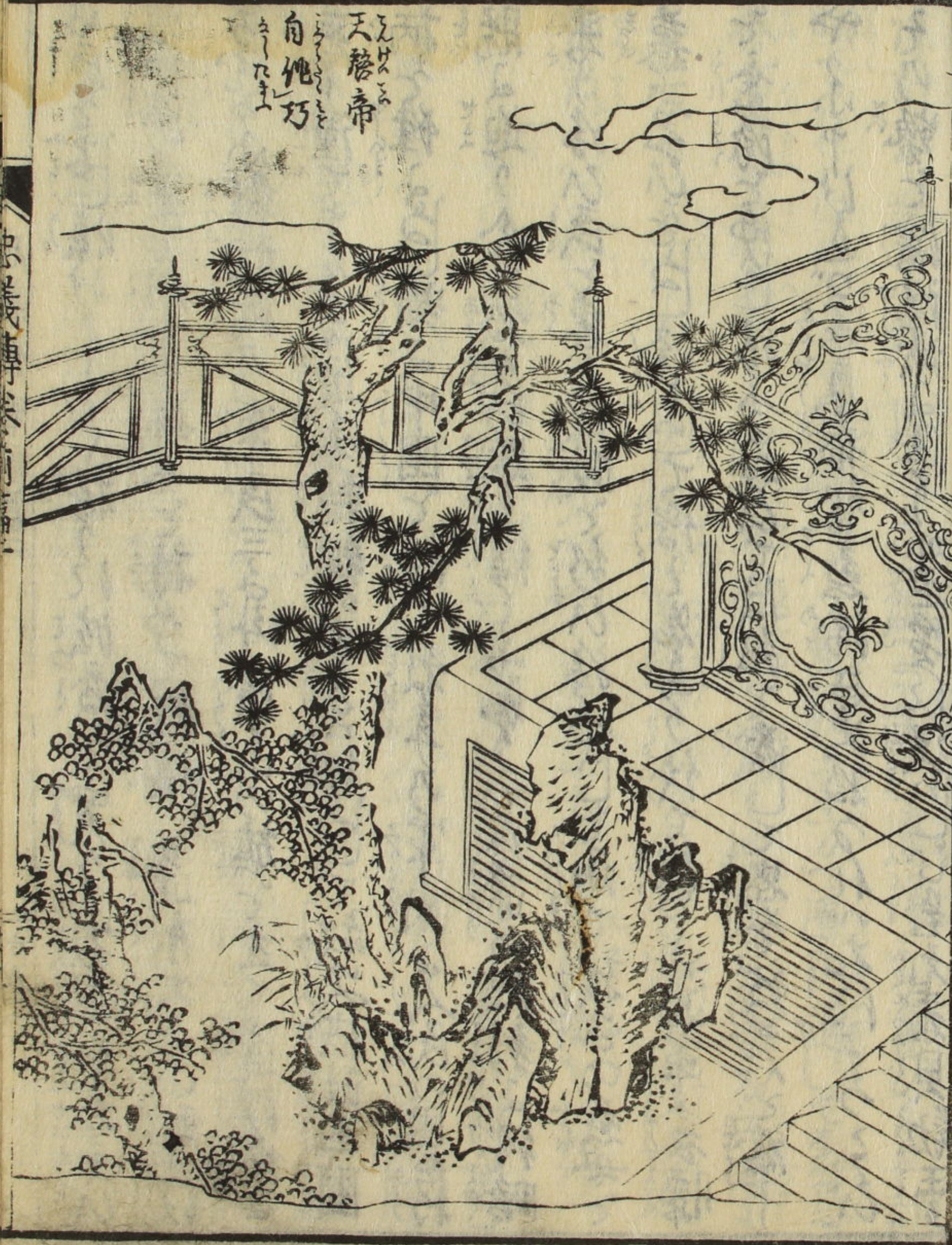
いそりたる

貝勒王定計陷瀋陽

御使顧慥<sup>ごしやくごう</sup>奏<sup>そう</sup>してヤ<sup>や</sup>たるの鄭芝龍<sup>ていしりゆう</sup>固<sup>こ</sup>とせし遠<sup>えん</sup>を執<sup>しやく</sup>きことよ  
 一<sup>いつ</sup>季<sup>せき</sup>に及<sup>およ</sup>ぶも堅<sup>か</sup>く守<sup>まも</sup>りて敢<sup>あ</sup>て敢<sup>あ</sup>ひと信<sup>しん</sup>んじら<sup>し</sup>らぬのぞく  
 ありていつの日<sup>いつのひ</sup>に城<sup>じやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>と退<sup>たい</sup>退<sup>たい</sup>け遠<sup>えん</sup>の地<sup>ち</sup>と版<sup>ばん</sup>得<sup>とく</sup>んやとせや  
 り鄭芝龍<sup>ていしりゆう</sup>とせし入<sup>い</sup>り別<sup>べつ</sup>の<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>と撰<sup>せん</sup>んが経<sup>けい</sup>略<sup>りやく</sup>とあ<sup>り</sup>終<sup>しゆう</sup>つと中<sup>ちゆう</sup>に  
 天<sup>てん</sup>啓<sup>けい</sup>帝<sup>てい</sup>是<sup>こゝ</sup>に怒<sup>いか</sup>れ終<sup>しゆう</sup>つに表<sup>へい</sup>應<sup>おう</sup>春<sup>しゆん</sup>と<sup>ら</sup>ふ若<sup>に</sup>と遠<sup>えん</sup>の經<sup>けい</sup>略<sup>りやく</sup>を定<sup>じやう</sup>  
 り兵<sup>へい</sup>科<sup>か</sup>朱<sup>しゆ</sup>童<sup>どう</sup>と副<sup>ふく</sup>て遠<sup>えん</sup>を助<sup>すけ</sup>り芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>が功<sup>こう</sup>罪<sup>ざい</sup>を改<sup>か</sup>めし先<sup>ま</sup>  
 終<sup>しゆう</sup>つ是<sup>こゝ</sup>に<sup>り</sup>ん<sup>り</sup>と鄭<sup>てい</sup>芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>の帝<sup>てい</sup>都<sup>と</sup>を御<sup>ご</sup>り舊<sup>きゆう</sup>官<sup>くわん</sup>を定<sup>じやう</sup>て二月<sup>にがつ</sup>斗<sup>と</sup>り  
 小<sup>せう</sup>糸<sup>いと</sup>の地<sup>ち</sup>より<sup>り</sup>たる御<sup>ご</sup>り遠<sup>えん</sup>を助<sup>すけ</sup>り朱<sup>しゆ</sup>童<sup>どう</sup>が政<sup>せい</sup>系<sup>けい</sup>して朝<sup>てう</sup>  
 一<sup>いつ</sup>奏<sup>そう</sup>し<sup>り</sup>たるの鄭<sup>てい</sup>芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>の燃<sup>も</sup>え<sup>り</sup>たる<sup>り</sup>の<sup>り</sup>霍<sup>かく</sup>去<sup>そ</sup>病<sup>びやう</sup>に勝<sup>か</sup>つたる

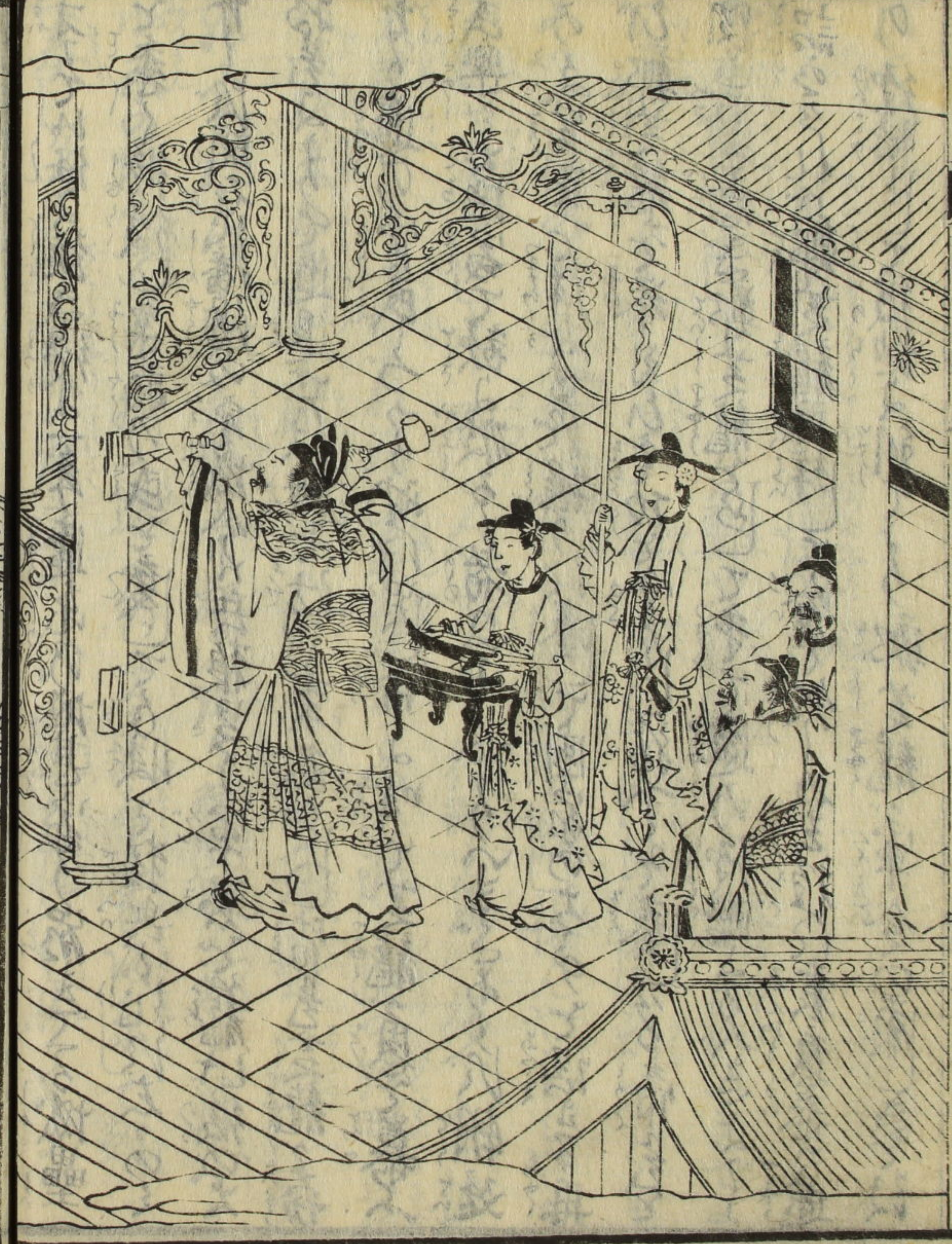
才<sup>さい</sup>てい任<sup>にん</sup>は強<sup>きやう</sup>き終<sup>しゆう</sup>つ一<sup>いつ</sup>年<sup>ねん</sup>遠<sup>えん</sup>東<sup>とう</sup>の地<sup>ち</sup>甚<sup>じん</sup>富<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>崩<sup>くづ</sup>さ<sup>り</sup>たる城<sup>じやう</sup>壘<sup>らい</sup>  
 と悉<sup>しつ</sup>く終<sup>しゆう</sup>つ(梁<sup>りやう</sup>弱<sup>じやく</sup>乃<sup>の</sup>民<sup>みん</sup>と度<sup>た</sup>じても収<sup>しゆう</sup>め<sup>り</sup>精<sup>しやう</sup>兵<sup>へい</sup>を死<sup>し</sup>に<sup>ら</sup>せ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>  
 才<sup>さい</sup>に用<sup>よう</sup>原<sup>げん</sup>瀋<sup>しん</sup>陽<sup>やう</sup>の定<sup>じやう</sup>城<sup>じやう</sup>今<sup>いま</sup>の兵<sup>へい</sup>糧<sup>りやう</sup>を<sup>り</sup>軍<sup>ぐん</sup>と龍<sup>りゆう</sup>の後<sup>のち</sup>の<sup>り</sup>  
 智<sup>ち</sup>は<sup>り</sup>よりて進<sup>しん</sup>退<sup>たい</sup>せは難<sup>なん</sup>と防<sup>ぼう</sup>ぐ事<sup>じ</sup>安<sup>あん</sup>ら<sup>り</sup>ば<sup>り</sup>皆<sup>みな</sup>是<sup>こゝ</sup>芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>の功<sup>こう</sup>  
 才<sup>さい</sup>の遠<sup>えん</sup>の官<sup>くわん</sup>民<sup>みん</sup>を<sup>り</sup>助<sup>すけ</sup>り<sup>り</sup>市<sup>し</sup>を啼<sup>な</sup>り芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>の恩<sup>おん</sup>と慕<sup>ぼ</sup>ふ  
 民<sup>みん</sup>樂<sup>らく</sup>と大地<sup>たいち</sup>富<sup>ふ</sup>で款<sup>くわん</sup>の<sup>り</sup>破<sup>や</sup>る<sup>り</sup>者<sup>しや</sup>を<sup>り</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>い<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>る<sup>り</sup>朝<sup>てう</sup>廷<sup>てい</sup>  
 乃<sup>のち</sup>又<sup>また</sup>官<sup>くわん</sup>事<sup>じ</sup>を<sup>り</sup>洋<sup>やう</sup>に<sup>り</sup>せ<sup>り</sup>終<sup>しゆう</sup>つに奏<sup>そう</sup>て國<sup>こく</sup>家<sup>か</sup>の<sup>り</sup>大<sup>だい</sup>の<sup>り</sup>と<sup>り</sup>誤<sup>ご</sup>ら<sup>り</sup>再<sup>さい</sup>  
 び鄭<sup>てい</sup>芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>を<sup>り</sup>奉<sup>ほう</sup>む<sup>り</sup>し功<sup>こう</sup>と<sup>り</sup>令<sup>れい</sup>し終<sup>しゆう</sup>つと<sup>り</sup>奏<sup>そう</sup>する<sup>り</sup>帝<sup>てい</sup>是<sup>こゝ</sup>と  
 ば<sup>り</sup>一<sup>いつ</sup>意<sup>い</sup>を<sup>り</sup>鄭<sup>てい</sup>芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>と<sup>り</sup>せ<sup>り</sup>て<sup>り</sup>遠<sup>えん</sup>乃<sup>のち</sup>經<sup>けい</sup>略<sup>りやく</sup>する<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>きよ<sup>り</sup>  
 詔<sup>しよ</sup>を<sup>り</sup>な<sup>り</sup>ら<sup>り</sup>鄭<sup>てい</sup>芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>再<sup>さい</sup>拜<sup>はい</sup>して令<sup>れい</sup>を<sup>り</sup>受<sup>う</sup>け<sup>り</sup>復<sup>ふく</sup>に表<sup>へい</sup>應<sup>おう</sup>春<sup>しゆん</sup>の遠<sup>えん</sup>  
 の經<sup>けい</sup>略<sup>りやく</sup>して彼<sup>かの</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>り</sup>到<sup>たう</sup>て<sup>り</sup>より鄭<sup>てい</sup>芝<sup>し</sup>龍<sup>りゆう</sup>の軍<sup>ぐん</sup>令<sup>れい</sup>の嚴<sup>げん</sup>しき<sup>り</sup>に<sup>り</sup>

忠義傳卷前篇二



天啓帝  
自他巧

古今圖書集成



古今圖書集成

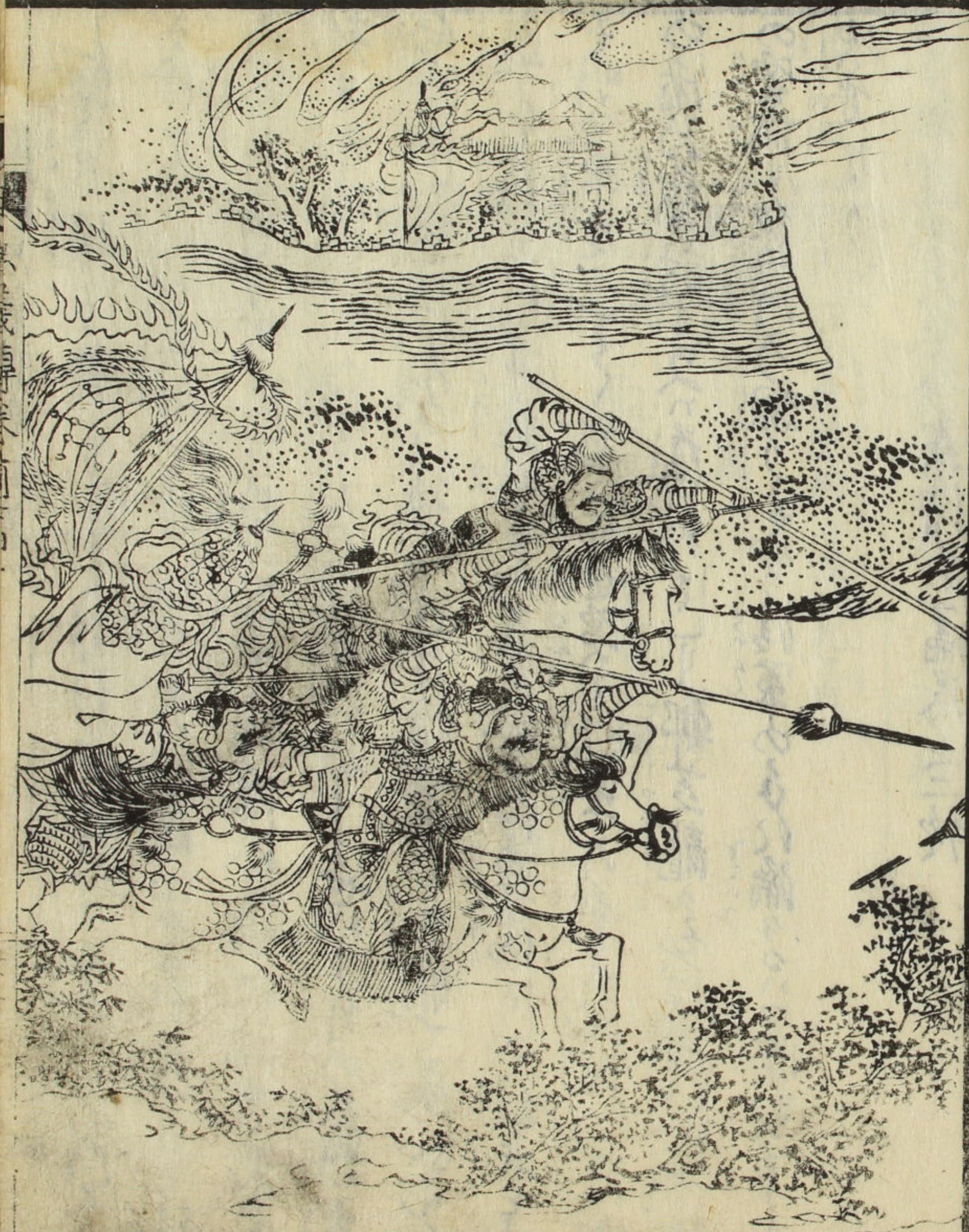
民を安んずるに法度を寛く小忽士卒おまひ  
 遠民の粟と刈りて婦女と掃りて奸婦 遠東をさふ死にけ  
 る猶も小韃靼國の軍民三子斗降糸の旗を立て遼陽城に  
 来り謹でやろい近多韃靼の志を以て叙又樞政王國  
 柄を降しは頻々中園と討く教多の軍用より人民の困窮  
 既又迫り今い朝夕の烟を絶つて少ありては遼の地勢は經略  
 来り治ひ民と惠仁政と多の治はしと承り 孩子の慈母と  
 慕ふ心をは降糸して後と承り伏て殺りいれ軍衣懐  
 と畜養とゆり治り今おひては死と産して忠を致さんと承り  
 やふふやけと衣履奉承智恵沸き入るれば大にすつらび  
 そり勢と瀋陽城に送り加世望に候いし是元来貝勒王  
 謀計とて鄭芝龍が退きしる虚を以て遼陽を奪ひん計  
 略を以ては降糸乃韃靼人より貝勒王が方へ屢内通して表裏  
 奉り軍令厳密なり次平降糸荒を瀋陽に守る兵僅  
 又六万ふはこべり次貝勒王は祥符黃龍瑞と名を密に遣  
 折致し入き約と定め承りいれ大軍を以て瀋陽城を攻め  
 じと告ぐれば貝勒王崔濯して大いに喜ひれ黄龍瑞が志  
 と同じせんそそを女とさるる后妃と侍り黄龍瑞と外戚と仰  
 ぐはの内書をきいしとら軍と出候とて烏合王と名  
 軍とし嚙嚙王女と名先鋒と名其勢深十又万金瑞  
 瀋陽城と進段瀋陽の山西門と名を押しせり瀋陽の守り加  
 世望大に驚き祥符黃龍瑞とて小門と守りし小園山と名と分ち

謀計とて鄭芝龍が退きしる虚を以て遼陽を奪ひん計  
 略を以ては降糸乃韃靼人より貝勒王が方へ屢内通して表裏  
 奉り軍令厳密なり次平降糸荒を瀋陽に守る兵僅  
 又六万ふはこべり次貝勒王は祥符黃龍瑞と名を密に遣  
 折致し入き約と定め承りいれ大軍を以て瀋陽城を攻め  
 じと告ぐれば貝勒王崔濯して大いに喜ひれ黄龍瑞が志  
 と同じせんそそを女とさるる后妃と侍り黄龍瑞と外戚と仰  
 ぐはの内書をきいしとら軍と出候とて烏合王と名  
 軍とし嚙嚙王女と名先鋒と名其勢深十又万金瑞  
 瀋陽城と進段瀋陽の山西門と名を押しせり瀋陽の守り加  
 世望大に驚き祥符黃龍瑞とて小門と守りし小園山と名と分ち



至秋と論せし狼煙と揚げ其烟幕とさるく魏建武は狼煙は引  
 ぬらんを疑ひ遂陽の表應泰遙く先鋒を遣はさんとするや城兵  
 瀋陽を襲ふると敵とんが討つはしと馬達牛維曜二人と先鋒  
 進で前中軍を守つて其勢十余万人瀋陽にして播たのんを  
 急ぎたるを魏は遂の大軍烏令王大軍と誑て大さのんを  
 攻鼓と鳴し周と後瀋陽城とを攻くと云田は城中に  
 大の周教者と各系教者の道兵とを率し門と開いて一に  
 又切て出たり守兵の軍中より金虎山とら猛お槍と槍の  
 て向我の周教者と二十余合後り冷が教者馬より大  
 突死し隘路進く攻まらる秦邦保とら大明お是とて  
 大と怒り蛇矛を打ちり金虎山と討てりる金虎山皆したる

らるをさなく赤巻馬と獲て令せ電光乃ひらめくごとく秦邦  
 保が甲乃透同とを奪りて唯一突又衝通せば馬より落て死  
 たりたる遂の大軍烏令王遙くけ形勢とらんぐれ味方と下  
 知して啼と喚て斬るれ城兵とんぐ討つされ城中へ引入城戸  
 を固めて名をと馳し安と諒とを防ぎるけ附表應泰が十万余騎  
 の援兵雲雨のごとく押来る法軍の後よりまじしを討てるれが  
 城兵皆死す方と得付附城門押ひき討て出て法軍と前後  
 より援と勇とるるを我より遂の大軍と二人に引分  
 自表應泰が先鋒の勢を面しるけ斬てりる喚き叫んで懸然と  
 且と最後の敵に陣法礼と既と攻形と取らるけ附瀋陽の城中  
 俄と火燈出心門と固めりる黃龍瑞韃靼の後兵三万余騎と引年



取 陽  
計 王 貝 勤

忠義傳卷前篇二

九

し加世受後より雨のどくまを討けけむ三夜三実をいひし  
 ぞはるるんが明兵肝と冷し總て多ひに南の方を敷孔せると法  
 乃軍兵得るかにと勢ひ乘て踏渡は明兵討ち若を  
 敷孔知らば安夫人の言より白き馬とぞせ八十竹の大戦とま  
 向よりば援兵の先をけぬ馬達牛維曜両人を忽斬て海にせ  
 進んで獲まれの表懸春さんぐよ討ちけ逢湯にして公を  
 を明の軍尾乃くく若く加世受れ孔軍乃中よ討けけ 且余  
 の諸の表討ちつゝの海外にし鄭芝龍を以て用ひ 陽湯  
 の望遠より忽一行乃烟くく如く法軍のより端々の口は橋めま  
 次才たり

繪本國姓公忠義傳卷前篇卷之三終

繪本國姓公忠義傳卷前篇卷之三 目録

目録一回

英龍瑞之妻孔義

日園

三部牒書官賢之圖

官氏魏忠賢名諸之者之圖

鄭芝龍仙杖谷慶法軍

鄭芝龍劉遠陽之圖

王化貞叔積英寧

鄭芝龍仙杖谷慶法軍之圖

目録二回

目録三回

羅一貫強勇斬崩法軍之圖

明法入我貴寧之圖

鄭芝龍受季下獄

芝龍編獄中經國雄畧之圖

張英徧服朋黨之圖

帝許眾鄭芝龍之圖

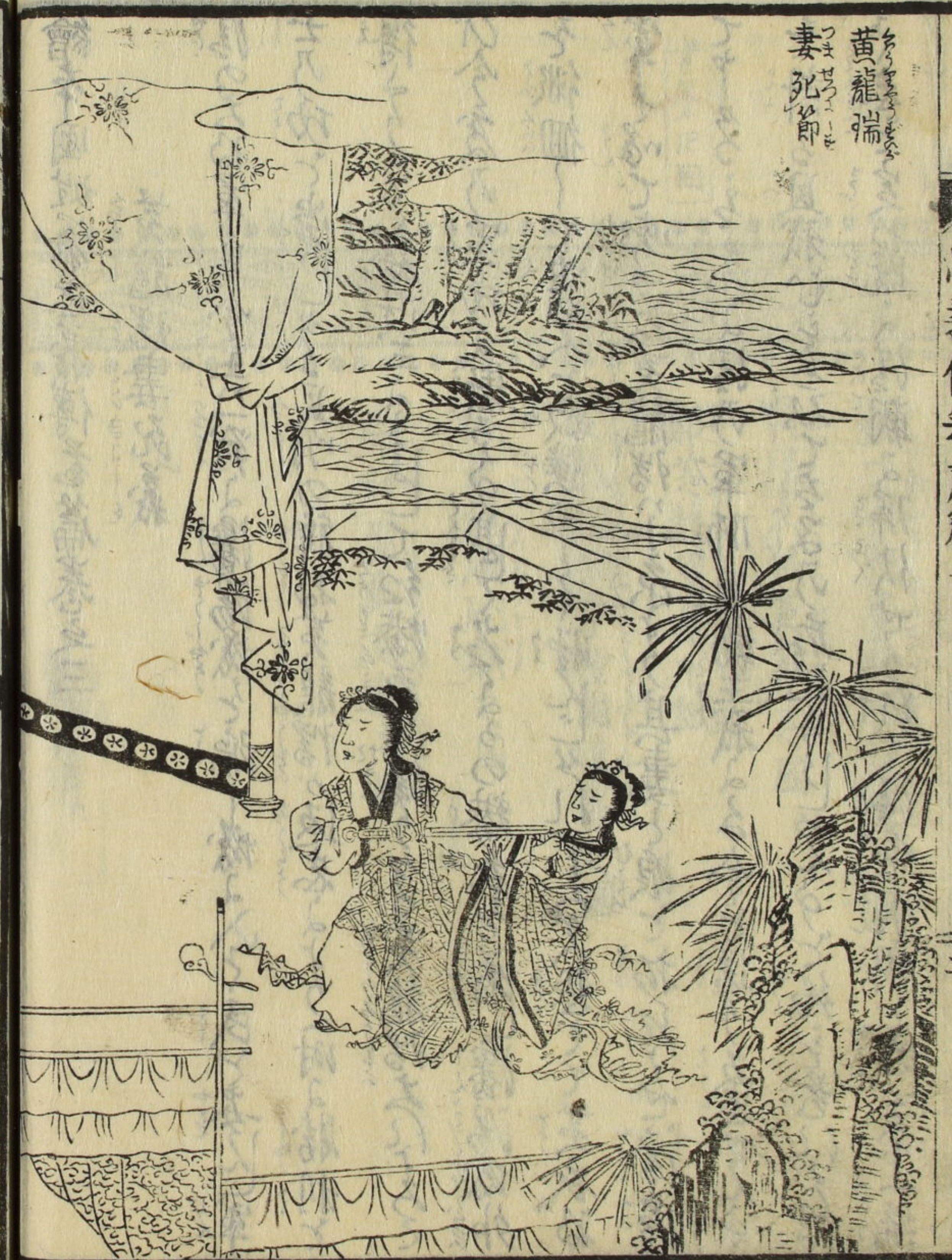
繪本國姓爺忠義傳花篇卷之三

英龍揚妻死義

法の大將軍烏令王の戦は瀋陽城を臨み城に入らば民と安んじ軍士乃功と賞したる良明の神は英龍揚が返忠より一討は勝利と得たりとて橋政王よまほして紅綾衣と揚りたる英龍揚去らば今度乃軍功は傲るるの甚くはるの綾衣を着し瀋陽城外を徘徊して世の人と奴僕のごとく將にござしが主人を要して英衣の軍と略で嘯りて英龍揚の小系より其妻と娘と抱きてを瀋陽にて中するも先は法乃軍師貝勒王我より命令を送りて急せしを計る且我むとて从て去る乃后妃さしやんと物と是にやんく志と定め既は法朝は降伏せり故に法帝明朝を遣て天下を統



忠義傳卷之三



黃龍瑞  
妻死節

忠義傳卷之三

一終りて附我云外戚なり豈既じくはやとつひなるふを妻  
 林氏と云に怒り沖方の利のお小園と賣の寇賊なり我何ぞ然  
 呂の妻と云んばや又明朝の業と喰ひて人々如きり然き難  
 粗の妻と云んばやと海流ると西の如く娘と云く引かせ一刃  
 又刺殺しそむも劔も却て死するなりいまだよき矣劫之る遠乃  
 氏けりてはて大と怒りけ黄衣の賊殺と云んば枝り此と忽二百人  
 計解来り黄龍塔をどとくは斬て捨けり眼を圓恩と云ふ  
 後天村より報ひたるらんと涉後りしありとまかりけ附明の朝廷よ  
 と客氏魏忠賢より圓柄と學に極り詔と矯り功ありて討し  
 眼のとも拳闘い急は暴虐と云んば忠賢と助る倭人殺まありて  
 其罪重三部の牒書と編り其一の朝廷よ下れ官人の姓名云悉く

記一已後小者の朱園と加へ以て官と云め福と踏し已月  
 者より雲の園と加へ以て官と刺殺と削りけ牒と号て然る福  
 とら其後若少と福の牒あり其中又親しき朱と云て園と  
 きい雲と云て園は是と号て曰志福と云ふ已は難言と云き者と  
 撰り載り急は四討と云き朱園と緩く討と云き雲園は  
 是と天啓帝と号てけ三部の牒面と彼彼人々集り俸定し  
 て賞罰の初より下りの官と云んば我先よ諱り使ひ  
 忠賢が如いの人めを殺したるらん天啓帝ありては云きごとく  
 朝廷の政り悉く客氏魏忠賢は決し其権柄月くは増り  
 日くは繁ん天啓は多の妻魏忠賢已が飲知せる涿州の天壽山  
 又先世の事りと云んば客氏と使ひかまする期は先づいり

十余日より乃活と法々厩と立て村色乃百姓戸々を花と扱と  
 柳どかざり男女花が香と焚て乃の跪き謹で迎へ拜々冠蓋  
 乃ひらめく電のづく車馬乃乘い雷田々似たり宮氏忠賢細馬  
 の車に乘り教百の官く乗く日人轎は係(左右前後と押冊  
 道路乃庶民の根鏡をよみおくの縣令よは金帛とよみ  
 富々栄耀天子よ等しくいへ乃直家著著卓石崇とよ  
 とも是はなるとう及ぶべきと見ぬ人少人眉をいそめ  
 勝きつりかくのぶとれ暴虐困政よ其いとしも帝の  
 知るるやあつん又又制し終るや朝文酒と  
 荒々忠良の良と喪い困の由賊んをを懐り終はざり  
 こそ凌ましうりきせ乃季まかり

長門傳記上州巻三

三郎牒書  
 富賢



字民  
魏志賢  
名彌齋



忠義傳卷之四十一

六



忠義傳卷之四十一

五



鄭芝龍仙松谷慶法軍

天啓八年乃去瀋陽の城瑞襄森七万余の軍兵と  
多しははし小系の都少一けりは天啓帝大に移るは  
群臣と译海あり再び鄭芝龍と遼の徑略あり十餘  
万人の官兵を賜ふ鄭芝龍謹で命を乞ひ急ぎ軍兵  
を引率し遼陽往に到りゆる瀋陽の地急ぎ兵  
の巢穴あり百姓胡の衣服を奪ひ取てて  
先より入りし中りとも異を見く後と流し吾中固と  
お故より奪取交出移り代りれ義の國なりとかく率  
胡とありぬる天命の統らしむるなりんと歎息して止まりし  
味方のお士と看てゆる我れ再經略しては地を奪う一衣履紐と討

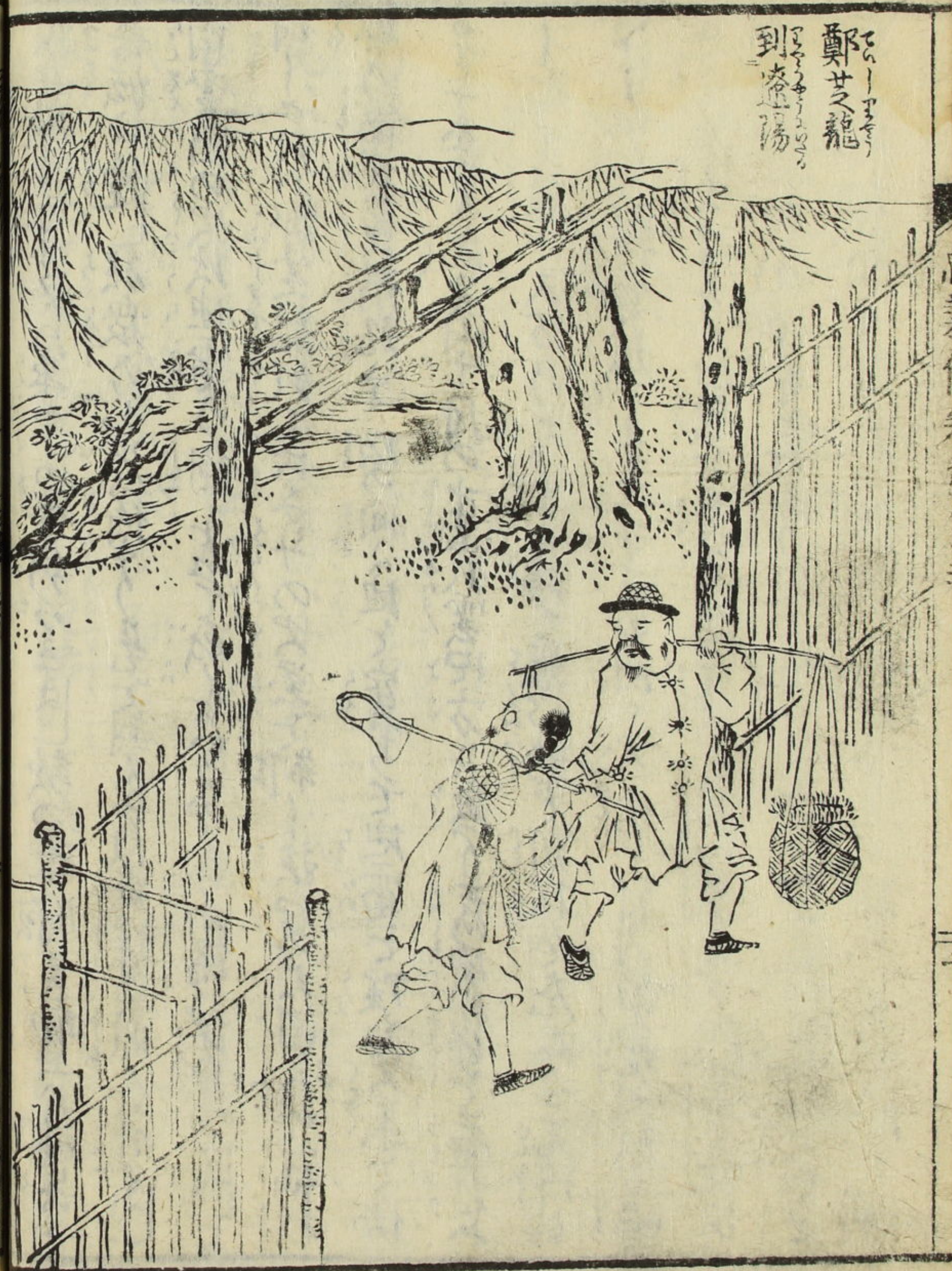
て軍風を示しん軍中の令妙はまはし敵の軍師貝勒王の孫吳  
兵法は達し張衆の兵を得たり先と討んは奇謀あり人討はし  
南寧國の穴攻地雷の術を以て戦いしゆといふ諸君皆然しと  
曰くこれ鄭芝龍にして六子斗の穴と制し張口の大河と法し仙松  
谷乃南を至清乳なる坂の向ふ地と穿ちて地雷と埋め火薬と依  
ると十五里既し時十月の甲辰雲に方より真の旗紫錦と着お  
し鄭芝龍十五万の大軍と驅て張鶴と劉松を左右の先鋒と  
はし張口の縫管に十を其を以て圍め火薬と射りけ火炮と放り魚  
きみで表より入りし營と守りしは張の大將吾令王といふ者虎はの  
後給はの魁長柄斧と打ちり門と用き大軍と引て討ては張鶴と  
馬と交へ相戦ゆる二十余の張鶴を奪ひ取らば馬と取らば

忠義傳



忠義傳卷之四

鄭芝龍  
到漳陽



交し其軍大之圍と懼り數十万の軍兵逐ひ亂し令類と鳴し其  
を逐ひ追つるに鄭芝龍が軍勢放て以し今兵一人も其  
と捨て捕と倒しえくまわんぐやうりる吾令王の孫勇味方  
を和知し頓又追討仙谷谷乃中るにあつた日老西は沈く月落  
勝より忽ち夢の如く流谷間を等しく殺すは彼方の兵と又方  
飛乃大難ちり凡は靡せ鄭芝龍が万の軍兵を引て向ひ来り吾令  
王は侍をえんく南を三宮款乃軍略又漏ちぞ引しと下知する前  
忽ち天地地震動する斗心善き飛天噴筒の大火炮と放ち火煙  
飛て面の燒ぐとく木の葉枯ま火焼付といふふは法軍と共  
小石は俄ちり大地裂破と云ふ而乃地雷火二月は遂りおろり山  
谷懸(天地)も是滅ぬらうと思ししといふ方こそありたり

素は法の大軍我の中王を打とらと我は又裂裂しと碎け飛二十  
万の兵卒悉く命と落し大なる吾令王も殺す大なる松枝は  
屍と留り源も洞窟に流し死入りあふ小堰と云ふは吾令王し  
たまに鄭芝龍は十た乃勝利と功績に城は張明鶴を止し是と  
らに勝軍と抄りて遼陽法へ攻陣しとる

王化貞敗績黃寧

法の執政王は附藩陽の城をめぐ先ね吾令王款乃計略に漏れ  
二十余万の軍兵と大に仙谷谷をえびつるは又大に殺す軍師貞  
勅王として軍乃係せりと云ふ貞勅王謹でやうの鄭芝龍  
も孫星が兵制を達し法去民の知を得り吾令王の款乃は法  
款乃防禦と云ふは小慶寧乃城の其守兵多しは僅に



忠義傳卷前篇三

鄭芝龍  
仙姑谷  
鹿全法軍



忠義傳卷前篇三

六



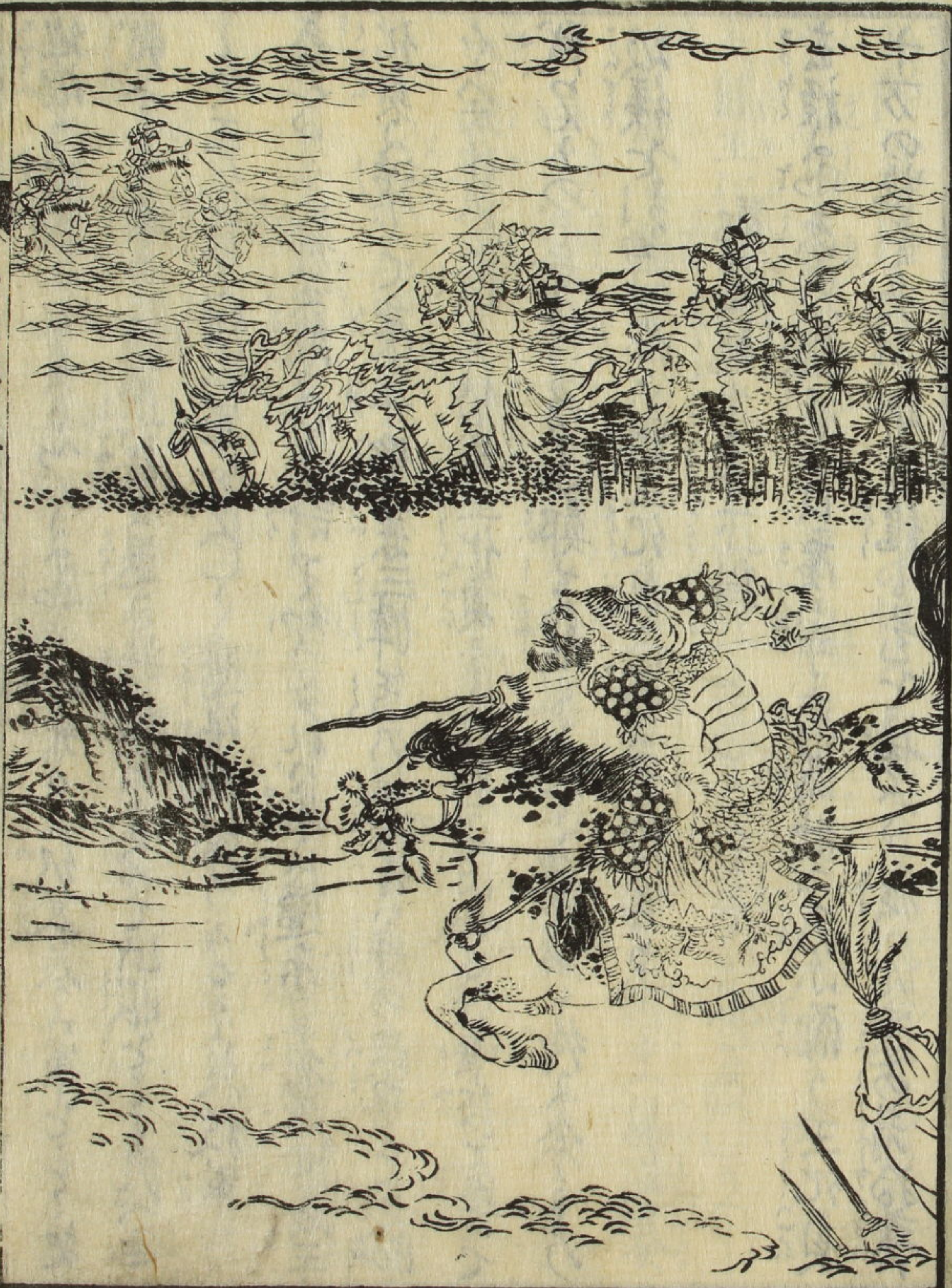


らつをんけんゆう  
羅一貫強勇  
斬崩法軍



近き下せよ二十騎斗筭と既し切捨しう獲時鶴が旗下れるよ  
 羅一貫とく強勇の者ありけ形勢とくく何う悟もれ隊分れ  
 白根の丸境警へ繼の戦袍と被掛栗毛の馬よ折ふあり方天戦と  
 打ち鳴鶴を討せよと群る者もその中まじりけ斬入く敵と  
 討り殺を知りて三度大軍と斬懸けせ死去りては悪戦せよそ  
 及令石のあふれが毒業殺まふよ付せ今に精力盡れは澄の  
 中に身を投じ候よ命と為しけ間よあふの軍兵等とめて石垣  
 を削し雲梯を登りて登入候よ候よ清軍中よ亮澄しるる本城に  
 火とつけて焚えれが張鳴鶴も馬とあふりに自ら着と刻と記さ  
 るる明の援兵王化貞の異寧城の火とあふより南に三宮とや城の  
 落さるとあふりぞ只斬入く討死せよと大馬あつりて河中馬を

打入せば清の軍師貝勒王費令の風益といふまき縁令縁の禮とて  
 大元乃驪駒の騰白羽扇とて一度折けが河の上より殺十カ乃  
 大軍群がり出明人あく隊集せよとあふり招降旗とて降集  
 を入り大旗教百流と川風と舞し王化貞が軍勢と川中へ入り込め  
 鉄炮と放らふと討し面も向べきやうとけしけ形勢と見く明の軍  
 中恐れおのき王化貞が先鋒の太お孫得功とく若くは慶一喜よ  
 降集し隊を刺して清の属民是は依て我もくと發と切隊とて入者  
 六万余人遁怒懐しと我れんととる若くは清の太お安夫人太おの腕矛  
 をとり恰も秋風のまどと倒とどろく敵死微塵よ斬殺せば王化貞  
 をい獲しとてども我れんは後を突ひ候よ兵と引く遼陽とてし  
 級支に統るよ鄭芝龍の右屯将より掃りにんで押来るよ異寧の



和名傳記卷之三

一四



明徳大  
二  
三

和名傳記卷之三

一五

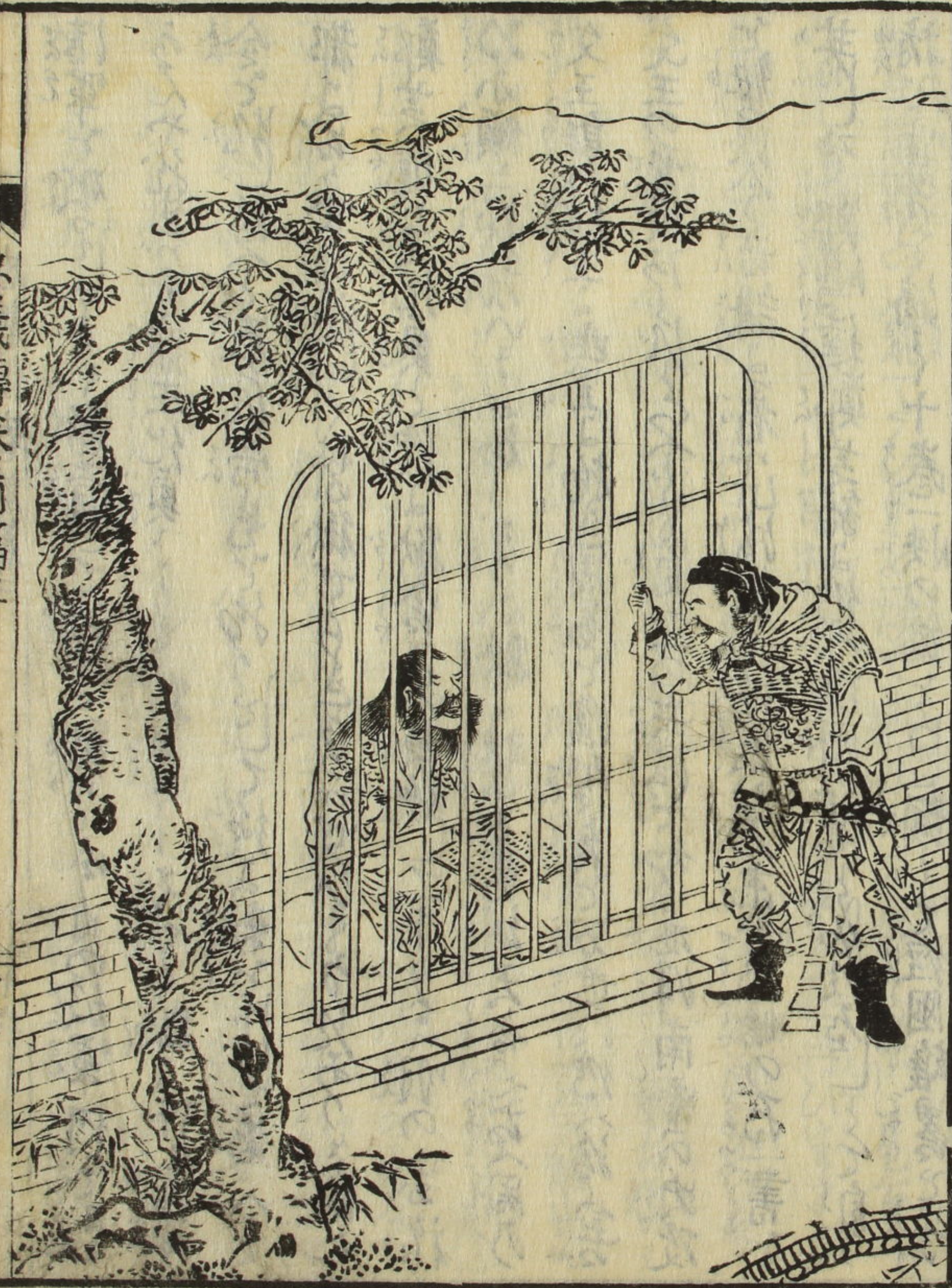


地隔りぬ極王化貞とてくくく山来るるふゆ合分軍とて地  
我々もこのまはし遠湯の退き計略の定めてけ眼とてくくく  
とて王化貞の傳の軍を以てし遠湯城の守りたるるは後軍乃  
みんふと鄭芝龍のく計を知りたれは先は遠東の着陣に附王  
化貞の渡りて廣寧登萊三降等の要害の守の兵おとては  
くくくはと後たれども王化貞は是は日とては唯兵と進めて  
我々のこのまはりたるる鄭芝龍もとてとてくくく後今日乃  
級後と刻しぬる別王化貞が罪よそありたる

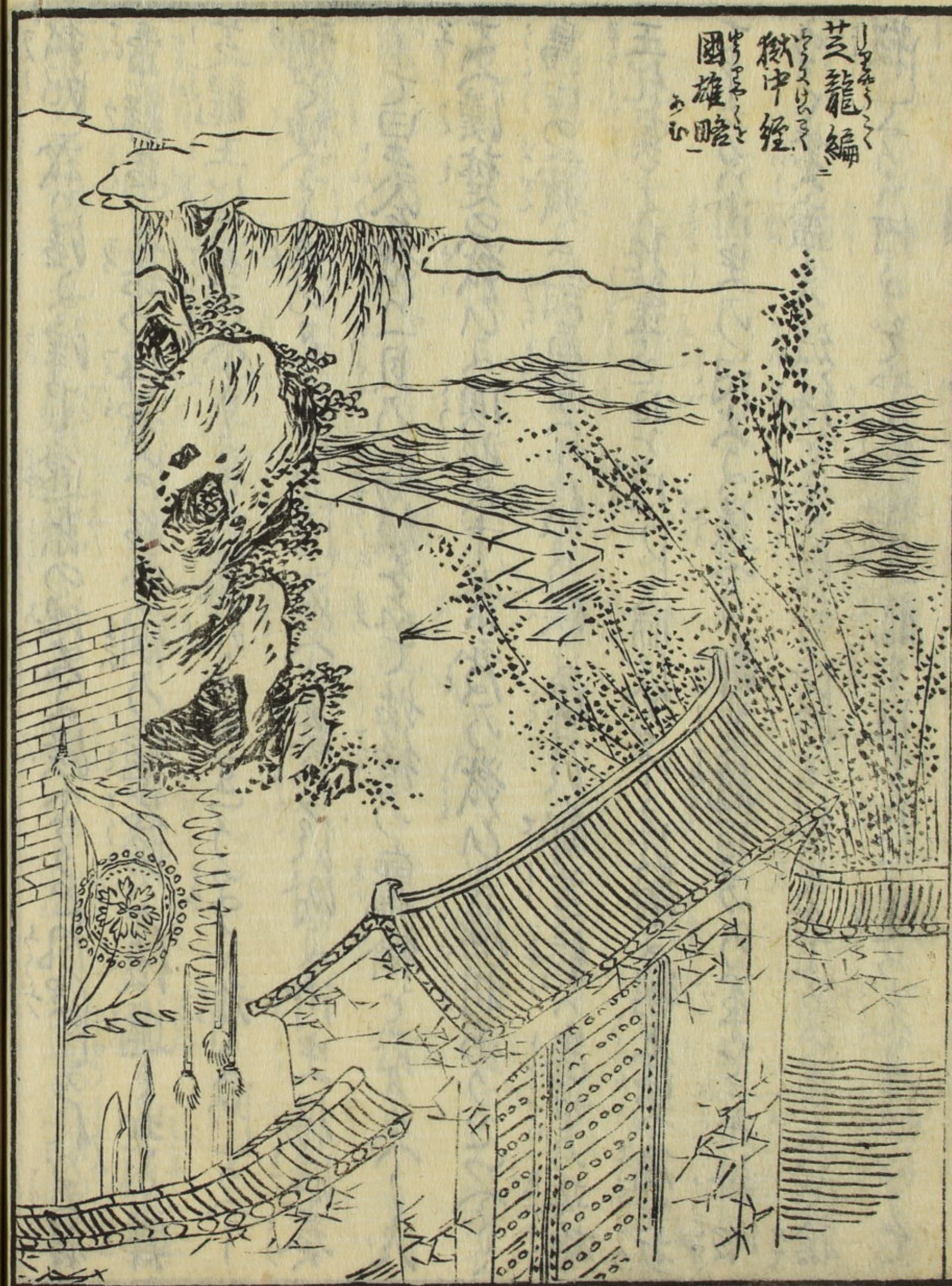
鄭芝龍坐率下獄

去後よ小糸の朝廷よは廣寧府城款のふ小端り王化貞  
十万の勢とてくく鄭芝龍も是と接ふる後たる遠の諸おる

我記「我は後よ降り遠東の地大は後くうと風まはしれは王啓  
帝群臣と集り降我は終る例乃魏忠賢が後進く出く鄭  
芝龍王化貞兩人とて其罪記よ當とてくく都ははくく  
刑と加く後の足ざりしと後と養父の附よ許史楊海奏  
して曰ま合我の一旦乃勝敗を以て始後乃龐輪とてくくべは  
夫は漢楚の戦ひよ頂羽又十余度乃戦ひよ勝利ありとてくく  
鳥にの二戦よ討負天下終る漢の降り鄭芝龍の當世乃英雄  
王化貞とて死罪と日と月け論びるくくは附よ魏忠賢席とて  
てやるの許史の曰はくは後く鄭芝龍百万の軍と率計略  
みく廣寧乃級後と余ははくは王化貞が十万の軍兵と捨  
殺したる何ゆぞや若鄭芝龍と曰く兵と進め先は法はて



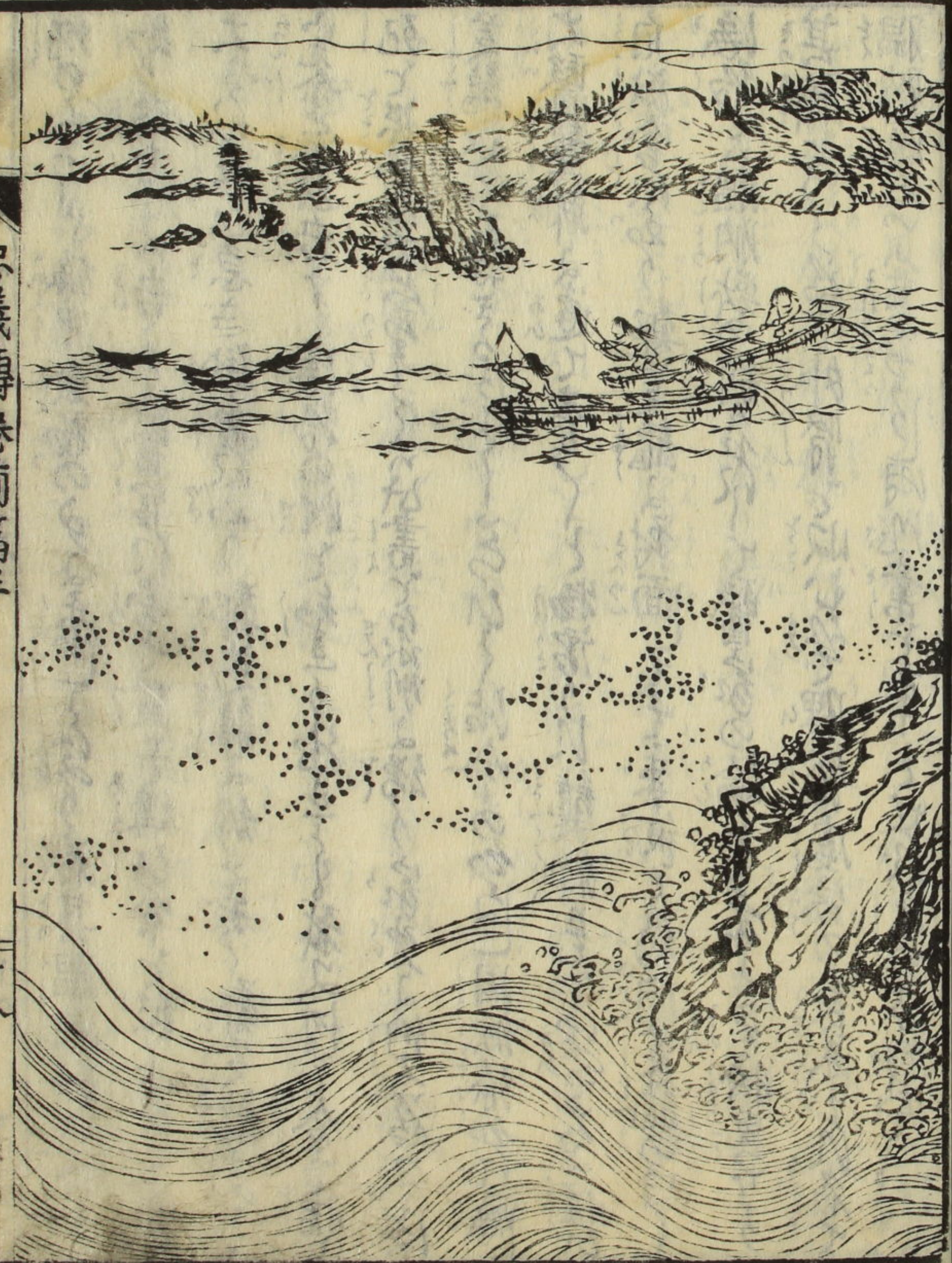
芝龍編  
獄中經  
國雄略



芝龍傳卷前篇三

法軍と破すしてしる移骨して防ぎ然り今日の破軍何ぞ是  
 めんや我ら其を飛王化貞よりも我ら其を飛王化貞よりも我ら其を  
 今と別して我ら其を飛王化貞よりも我ら其を飛王化貞よりも我ら其を  
 都より其を飛王化貞よりも我ら其を飛王化貞よりも我ら其を  
 鄭芝龍の王化貞よりも我ら其を飛王化貞よりも我ら其を  
 ねふ傾き我功いまだ知らざるは我ら其を飛王化貞よりも我ら其を  
 文王殷の紂王の幽王は拘て周易と演習者と万世に傳へ給ふ吾  
 文王の聖に於て此より自ら自二の兵法を知り西洋南蛮の火攻  
 と勢に今我ら其を飛王化貞よりも我ら其を飛王化貞よりも我ら其を  
 著し我ら鄭鴻達鄭芝豹より我ら其を飛王化貞よりも我ら其を  
 指して當りと満く十卷一帙の編と曰く頻りに短國雄略と号

獄吏周快との者一といひ是と漢で慨然として後と法し是古今  
 の平法胡虜と防ぐの要精密なるもの霍去病再び生るるも  
 是にまさるべからずといふ小見して芝龍が刑を免るは則國家の幸  
 かりと竊にこの内を籠て其才固者との者よ後周吉燭く  
 骨と僥思惟くするが忽と拘てやるる天啓帝曾て白鶴山の  
 張冠道人を徴して房中の術と需め給ふ道人海狗腎丸と製  
 て是を帝に服せしめ用ひ給ひて後椒房雲雨湯燼の患をく  
 一宵に數十婦を沖し給ふ給ふ小道吉有鶴山と云其の外を  
 知り給ふ今其の仙系を考へんと其典彙醫官海狗腎丸の号  
 によつて本考を考へんと其の海狗といふ腥膻味なりと知りて  
 其の其狀を考へんと其の帝の考へんと其の鄭芝龍の海南



只此舟中  
卷之四  
三



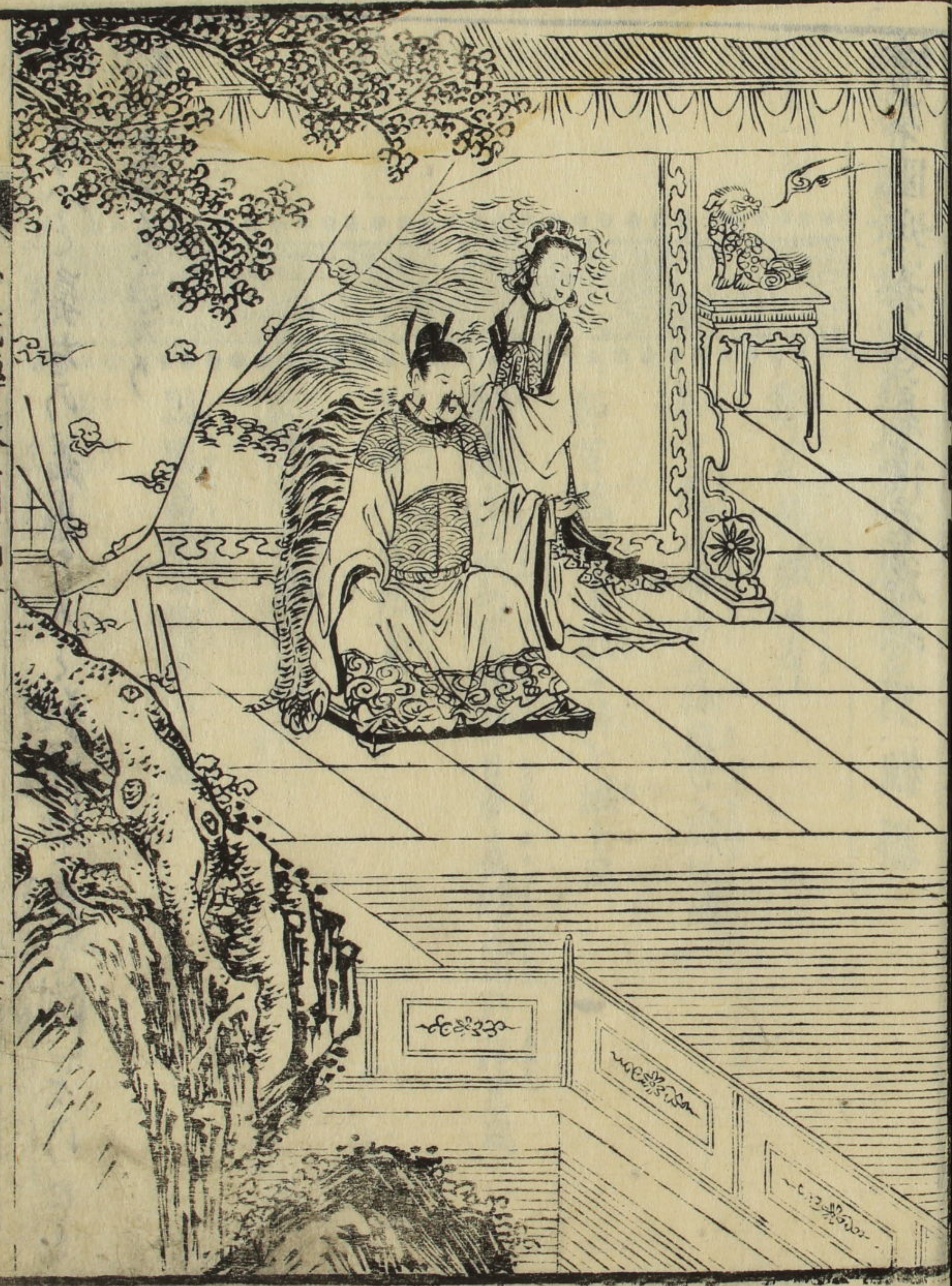
船  
夷  
孫  
温  
納  
歎

忠義傳  
卷前篇三

十七

洲のふらと海中魚物のるる「倭」に安らぎ其温肺鯨の捕り  
 知り者なりふ吾も醫官に於て罪を構ひ命と殺すに周倭  
 大臣に在ひ急ぎ獄舎にあり鄭芝龍より鄭芝龍より告ぐ鄭芝龍は  
 完全と笑ひ吾も海物の性を知り捕さざる我又何を命と捕  
 死と思ふや只重くいし書と泉州に送り家才より他人送るは  
 芝龍永く死せざるごとくといひく活命の由は「周倭」に感  
 大醫龍卿は遠て志らくと物語り以龍卿是と云ふと云は  
 自獄舎にあり鄭芝龍は対面して委細と尋問芝龍の曰く  
 海物と温肺鯨の別名にして醫家の論とる亦くそ状異なり  
 其臍とつゝ移り外腎と収むる脾腎虚勞の良薬といはるて  
 温肺臍といふ某おろし海物業と奉とせは東の方蝦夷の境

松と浮り或日本より流りて松糸乃海とと標記被國人と訓  
 け海物夷被温肺鯨を捕りたる小魚に非に鯨は非に海物乃  
 ざりて其の長きより三尺余り鱗は蒼黒と毛生て多の海異のこ  
 尾の長き又寸計牡魚を淫欲深く牝魚十又五六匹を帯て海と  
 浮り蝦夷守りを引て是と対殺外腎を截て温肺は日本國  
 貨といふ蝦夷者にけ物と食ふよりて一丈二十妻と娶るゆ  
 志より若海物腎を獲んと欲せば日本國使と遣り需物見  
 り物なりとて言はるる龍卿はけ言と帝は奏使し「有りて  
 大帝大さくいふるに御感みそ鄭芝龍が罪と免」泉州の  
 舊藏は後「送」に日本は後海て温肺臍を需り奉る人  
 はし命に送るに鄭芝龍と云ひ設けざる命と賜り刻印は長



忠義傳卷之三

十一



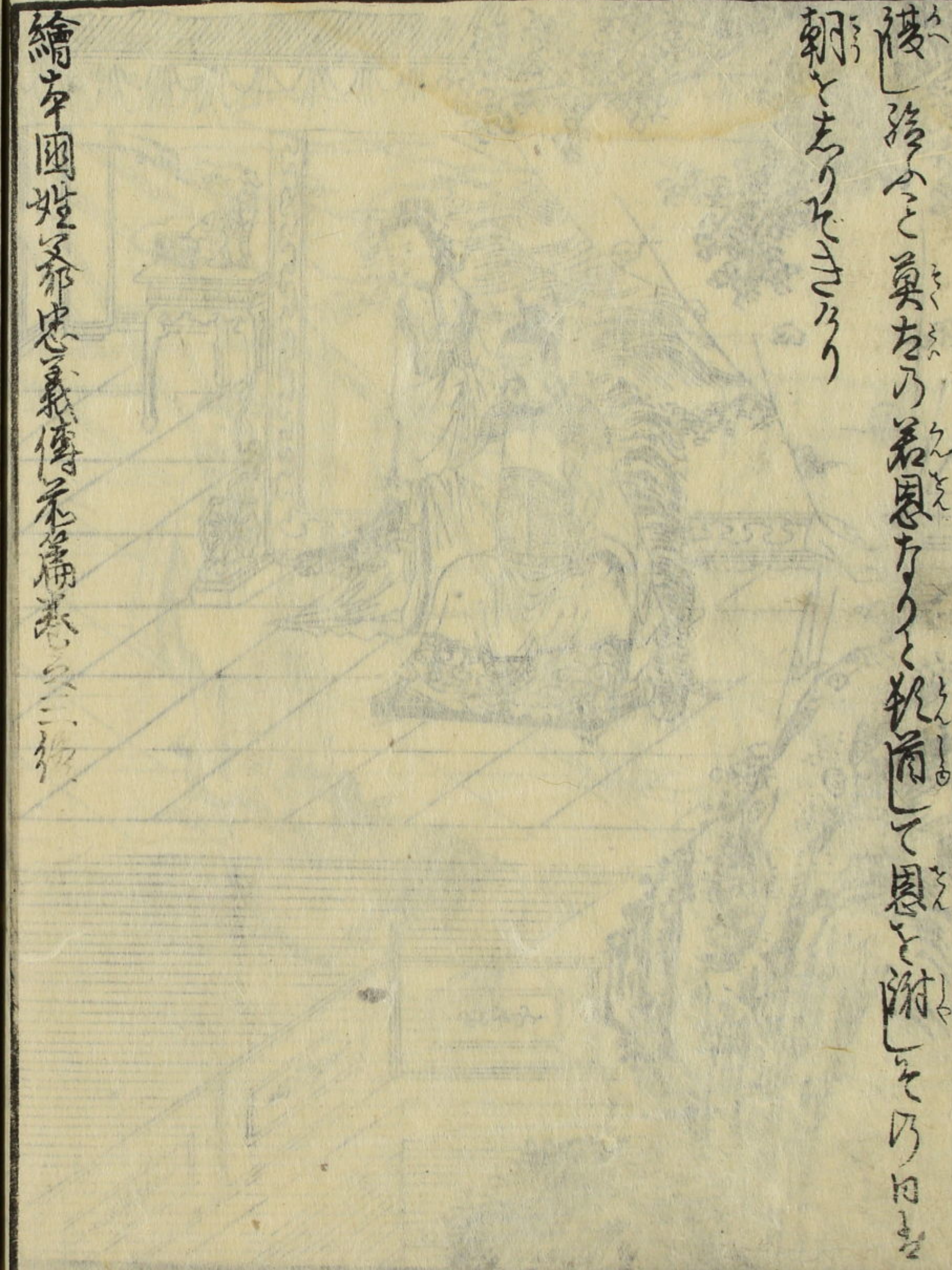
帝許罪  
鄭芝龍

忠義傳卷之三

十二

後「終ふと莫方乃若恩方りて執前」て恩と附しそ乃日ま  
朝と志のたまきり

繪本國姓公忠義傳元篇卷之三



繪本國姓公忠義傳元篇卷之四 目錄

目録一回

鄭芝龍渡日本

鄭芝龍運華洋海廢と威以國

鄭芝龍楚者洞と詩と城と國

鄭森が父の明の芝龍母日本長崎丸山乃松若國

吳縣人民死義

天啓中天妻の國

周順昌難よ所せらる國

吳練の云氏等よ後廟と周以國

目録二回



忠義傳卷前篇四

魏忠賢阜城之極也

李自成賊を討て黨を集む

國城西蜀之極威を震入



繪本國姓爺忠義傳抄篇卷之四

鄭芝龍渡日本

天啓帝より荒れ極み海島に居る鄭芝龍海狗賢の産  
 と知りしははばしむる鄭芝龍はしむるて詔と給ひ鄭芝龍  
 を日本へ渡海せしめ被賜賜服と求むしめ給ひ鄭芝龍謹んで勅  
 書し多し抑日本の海國なりとてども亦王國と開きて二万余年  
 王統連綿と續とるよは幕運の居はし其義を守り信託望と承  
 りてこれにしむる眼とまるとるものもつて流し奉朝のしむる日本  
 霸王國自豊臣秀吉朝鮮を犯し時中國より官使渡海せしめ  
 諸命のしむるの傍るるは怒て國自秀吉後封を更は和親の  
 取とるり然るふ今日本へ復せば國王經て搦む本國へ改はま



鄭芝龍  
連華洋  
二海魔  
威風



品類作卷不第四

不知其所以也聞海の賈船は交(交)る何(何)なるか其(其)まはしく  
 日本に渡海せば此(此)の次(次)て彼(彼)暹(暹)羅(羅)と求め得(得)て海(海)朝(朝)は  
 多(多)く其(其)後(後)に帝(帝)鄭(鄭)芝(芝)龍(龍)が不(不)悉(悉)く獻(獻)慮(慮)を叶(叶)ひ別(別)根(根)三(三)万  
 兩(兩)箱(箱)帛(帛)教(教)多(多)計(計)揚(揚)り賈(賈)船(船)は後(後)船(船)て日(日)本(本)へそ渡(渡)されけり  
 鄭(鄭)芝(芝)龍(龍)は京(京)州(州)安(安)平(平)縣(縣)の本(本)城(城)に留(留)り牙(牙)芝(芝)豹(豹)崎(崎)達(達)は奉(奉)の次(次)牙  
 を物(物)落(落)りぬ(ぬ)度(度)門(門)とつ(つ)る(る)艦(艦)を解(解)と帆(帆)風(風)を帆(帆)と揚(揚)て日(日)本(本)國(國)  
 へ漕(漕)舟(舟)ぬ(ぬ)秋(秋)七(七)月(月)廿(廿)日(日)余(余)冷(冷)風(風)浪(浪)と配(配)し附(附)方(方)ぬ雪(雪)うこ  
 そりやまこれ蓮(蓮)華(華)洋(洋)とつ(つ)る(る)大(大)海(海)よりう(う)る(る)俄(俄)に雲(雲)の脚(脚)平(平)  
 なり風(風)とまは(ま)く吹(吹)来(来)り(り)のど(ど)れ(れ)逆(逆)浪(浪)船(船)を覆(覆)え(え)て氷(氷)を楫(楫)を  
 多(多)く其(其)後(後)に楫(楫)とま(ま)を罵(罵)り(り)附(附)は(は)今(今)と(と)迄(迄)とも(も)是(是)る(る)一(一)つ(つ)の(の)海(海)忽(忽)  
 然(然)と現(現)れ出(出)り水(水)を第(第)一(一)に(に)ほ(ほ)ひけ(け)船(船)は(は)船(船)と(と)せ(せ)て(て)洋(洋)風(風)と(と)避(避)ん

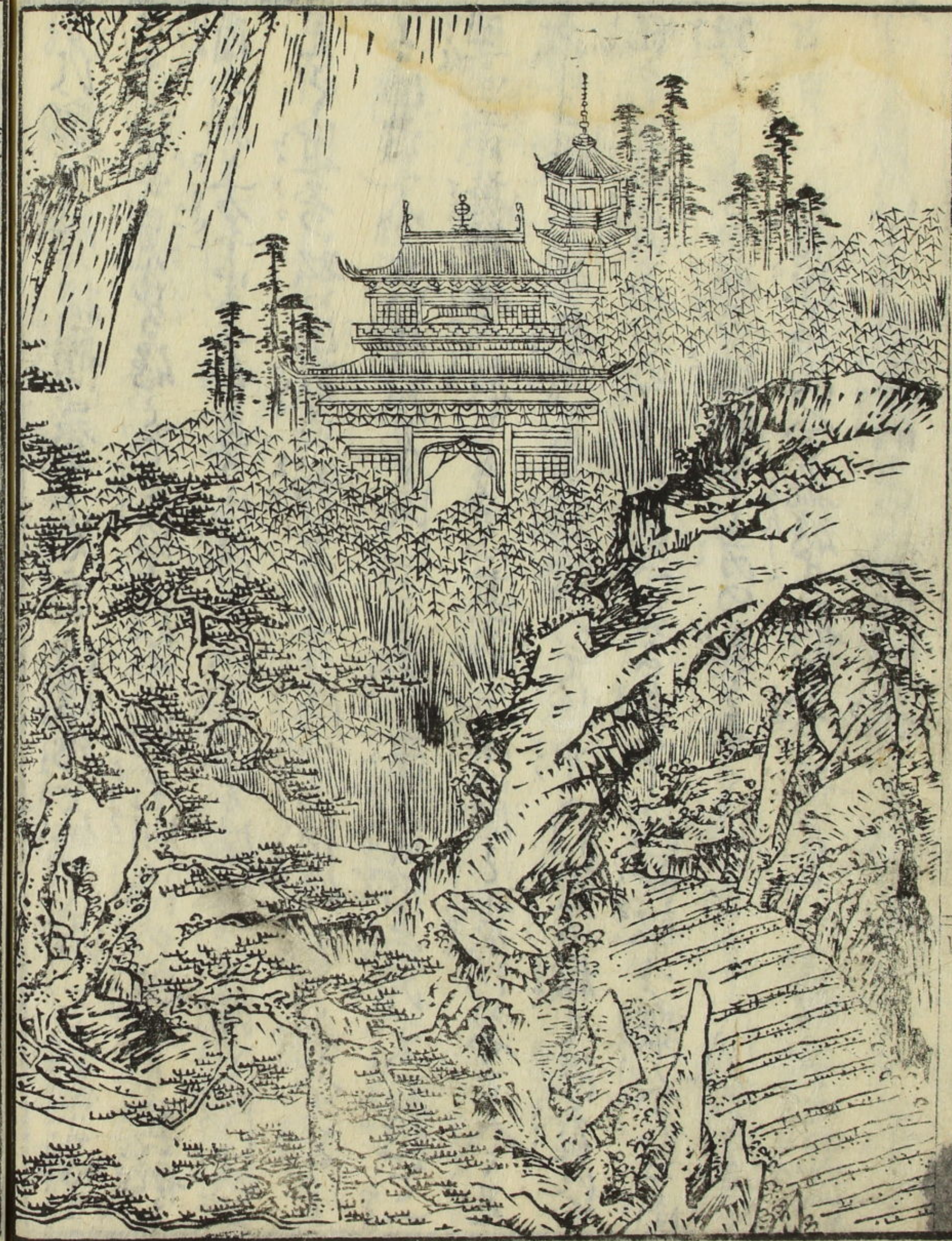
とは鄭(鄭)芝(芝)龍(龍)は捕(捕)籠(籠)に登(登)り先(先)よりけ(け)後(後)船(船)と條(條)を居(居)る(る)大(大)言(言)は(は)り  
 多(多)くの(の)事(事)を(を)由(由)る(る)傳(傳)を(を)其(其)の(の)言(言)に(に)あ(あ)り(り)芝(芝)別(別)海(海)の(の)歌(歌)なり(り)其(其)歌(歌)は  
 角(角)より(り)方(方)十(十)里(里)余(余)と(と)背(背)の(の)と(と)い(い)ふ(ふ)あり(り)海(海)濱(濱)杜(杜)鰲(鰲)と(と)呼(呼)ぶ(ぶ)船(船)  
 見(見)る(る)近(近)寄(寄)ぬ(ぬ)け(け)歎(歎)の(の)節(節)と(と)い(い)ふ(ふ)海(海)城(城)の後(後)海(海)磨(磨)と(と)唱(唱)て(て)思(思)ふ(ふ)  
 と(と)け(け)者(者)へ(へ)今(今)其(其)後(後)瓜(瓜)見(見)ん(ん)と(と)い(い)ふ(ふ)例(例)の(の)南(南)蠻(蠻)傳(傳)来(来)の(の)大(大)石(石)炮(炮)と(と)  
 連(連)三(三)に(に)挺(挺)彼(彼)海(海)人(人)放(放)ち(ち)る(る)小(小)其(其)多(多)霹(霹)靂(靂)と(と)震(震)ら(ら)り(り)と(と)人(人)々(々)見  
 る(る)後(後)の(の)舟(舟)の(の)大(大)勢(勢)忽(忽)と(と)い(い)ふ(ふ)一(一)搖(搖)ゆ(ゆ)つ(つ)て(て)海(海)中(中)へ(へ)引(引)入(入)り(り)板(板)上(上)海(海)庭(庭)に(に)  
 吼(吼)る(る)聲(聲)を(を)後(後)に(に)首(首)の(の)後(後)を(を)垂(垂)実(実)と(と)い(い)ふ(ふ)は(は)お(お)船(船)の(の)衆(衆)人(人)大(大)き(き)ふ  
 恐(恐)る(る)あり(り)不(不)怪(怪)の(の)海(海)歎(歎)や(や)身(身)の(の)毛(毛)と(と)ま(ま)く(く)握(握)ひ(ひ)る(る)は(は)危(危)き(き)海(海)洋(洋)  
 と(と)い(い)ふ(ふ)と(と)善(善)院(院)と(と)い(い)ふ(ふ)孤(孤)舟(舟)と(と)考(考)へ(へ)る(る)震(震)は(は)風(風)を(を)お(お)ど(ど)す(す)  
 と(と)い(い)ふ(ふ)と(と)潮(潮)音(音)と(と)い(い)ふ(ふ)岩(岩)洞(洞)と(と)い(い)ふ(ふ)登(登)り(り)ぬ(ぬ)け(け)不(不)可(可)言(言)の(の)奇(奇)境(境)

鄭芝龍  
菴音洞  
詩と賦凡



只此...  
...  
...

...



只此...  
...  
...

...

と設け觀音菩薩と安んずり鄭芝龍を清孫をば寺僧  
をゆるし用基と同ふは言て曰く若日日本の佛慧尊なる人入  
深して觀音の靈像と携へ日本をゆえんとけ洋中とるるに及  
んぐそ松盤石のどく居りて勅うは慧尊即觀音の靈像を  
船より下しけりは腰しきんば思はずかたを船何の恙もるく風  
又吹く廻遊せり是の依り慧尊けり中より寺と刻後觀音  
菩薩と安んずりその後國朝萬曆三十二年勅家を賜りて永樂  
寺と名づく刻津製の序論是のよとて是出り拜見せり正  
鄭芝龍謹く拜跪し教日け寺院に歸ぬは此とも逆風は  
いざんばを後世と志しんとく寺僧の懐ひ海舟と巡り松ぶら  
腰藏るく簪(異樹を石をば)也なり見も知くぬるよの噂

飛ぶあまは雲に洋中の絶系をまはりしは海にけり  
陸に梵音洞とあり善薩室の應記しは不定とく紫竹  
松樹いよふ生く又一所の風を讀の腸と斷鄭芝龍を採り一  
棒と泳じ其棒又曰

梵音深莫測

古洞佛憑依

置拜樹崖立

龍朝披浪飛

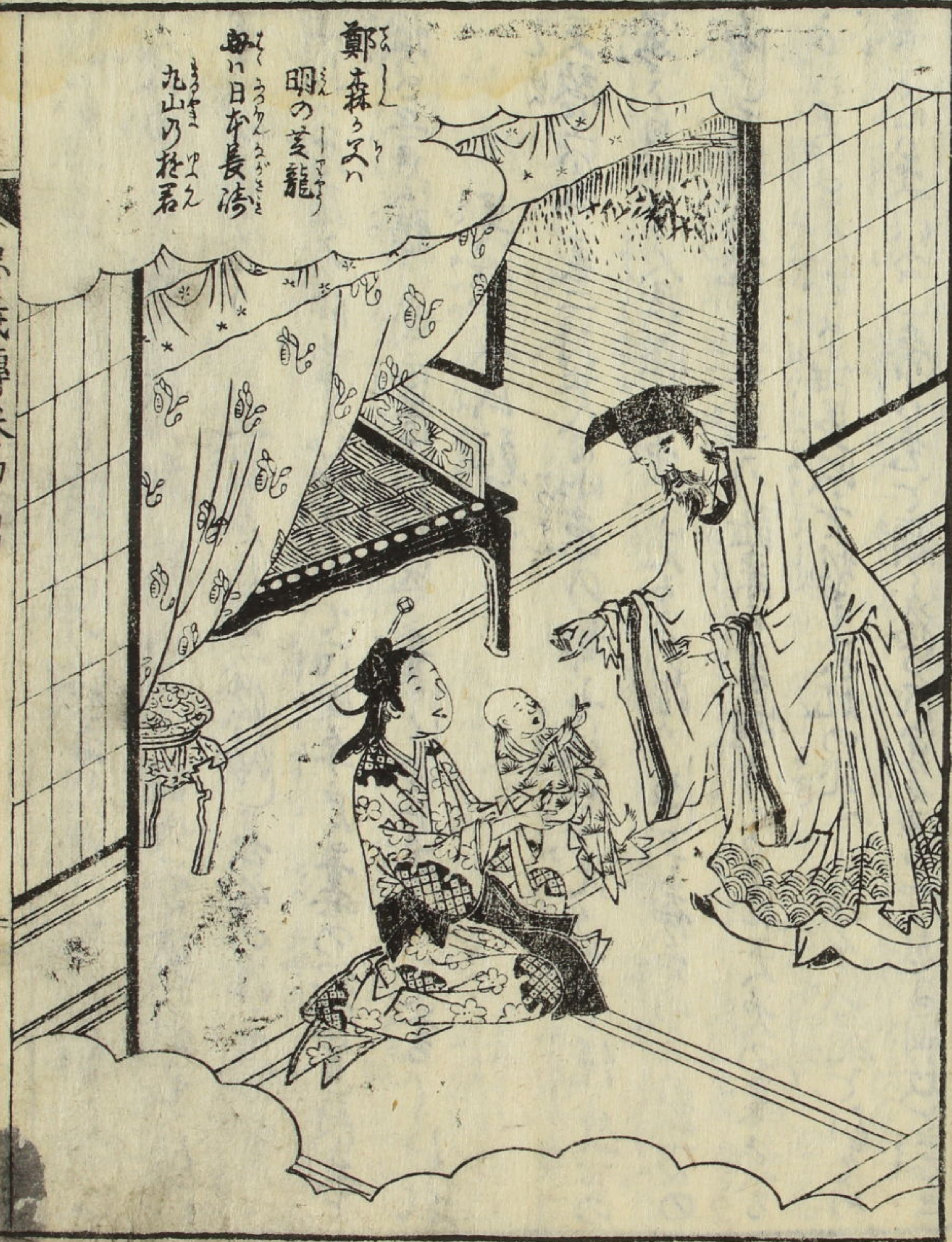
蒼松圍作宇

紫竹護成麻

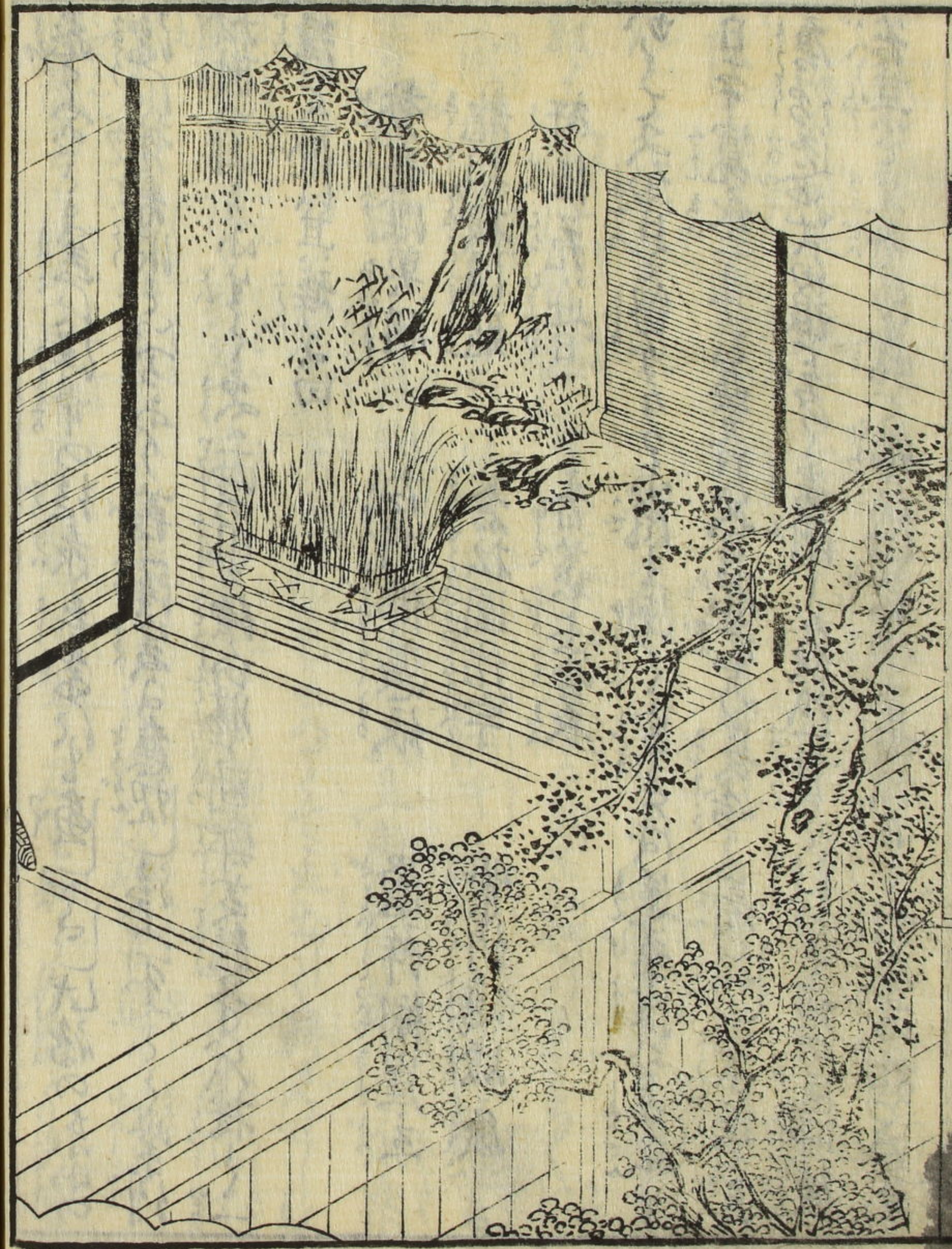
紆徑花迎日

香蕙上客衣

かくて又旬日と留りたるふ風も漸く定まは運葉洋をか舩  
日本寛永二年乙丑九月又旬肥前長崎の船に上り福島の  
唐船逸れは白浪と多く考所は名公一貫と改め其地の医師熊  
谷其之足并の義と結ひけ長崎の船を明愛の丸と遊す



鄭森の父  
明の玄龍  
丸山の花君



忠孝傳 卷之四

しいかこころき計なり後九山乃松若乃購ひ物と妻と良し  
 人の男子と儲く各瓜鄭森と呼ぶ國姓爺成功則是は此  
 之明の後州より賈物教多日本へ渡海長崎の津より明人売  
 たりて先南乃回言しし口しては國平戸の妻の嫁は是と  
 後平は移り南密流の外医と業し世と安んじて善くけれ

吳縣人民死義

天啓六年春二月廿八日山東の都は日と光りやう懐ま二の  
 事と日たり人民懐と事と力なる限りははそ夜夜中と教万の  
 夢して國公使の軍馬の紐束る者頻りうは天火の塵發る  
 めの天の不徳は後長政を乱す大札の兆して万民扇といそめ  
 事と心と交は白帝は是と顧と後乃宮房の冲遊は國政と事と

魏忠賢一人は但せよと取よ忠賢孫指と忠は  
 魏廣微崔呈秀らんとは福の小人と公の合せ忠臣と相隔  
 邪心と言亂朝廷の政のいも衷と人いとして是輩を白を  
 定は是の依て上疏して忠賢が信徳と言若毒く獄より刑は及  
 ぶ者も教を知らずは是の吳縣の周順昌とい縣令あり忠仁  
 をして臣と接する更る節義たりはは庶民徳は懐れ骨肉の親  
 其切に周順昌が心を重なりと魏忠賢が後大悪と詔と仿官軍  
 殺十人と吳縣に遣し周順昌と捕し周順昌が交士は陳文探と  
 つも者ありあけけりて使出夜中順昌が館に來り志うくの  
 中抱滞りいもは官軍の來りする間は何國も道と多罪あり死  
 免さしと考る小順昌が叔父と是も愛は子と愛さるる水と事と

忠義傳卷之四



天乃中營天



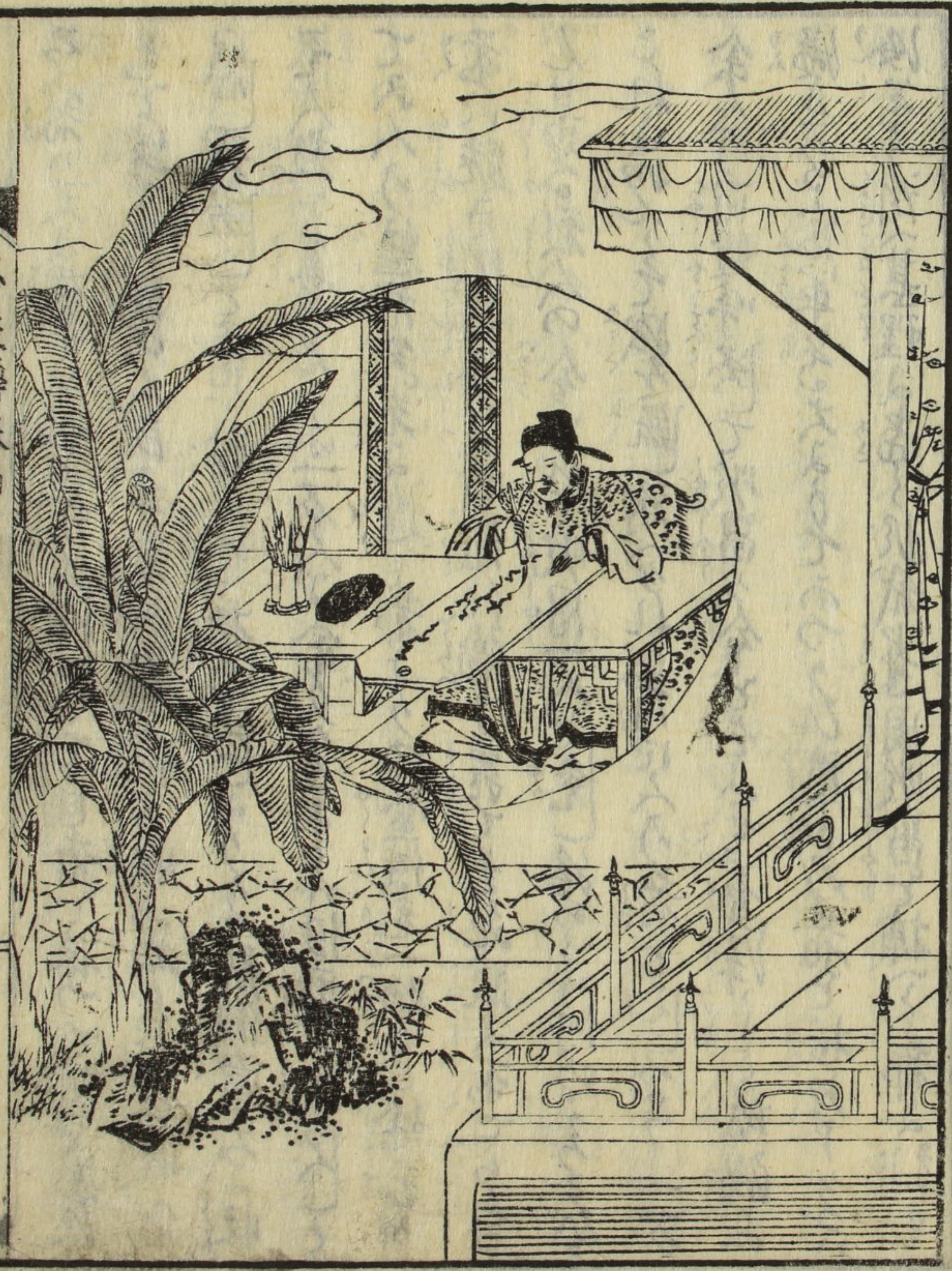
忠義傳卷之四

志を以て死すべし天子命して我をなすべしといひて私に遊ぎ  
 たりたりと遊ぎ去りたりたりと後を捨てて人吾天命あり  
 人力を以て生活する自に在らざるやと又も愕く形勢は附くや  
 驕り後人暇暇と致せしと毛一強きといふ者詔命と讀て暇暇  
 と讀て暇暇で命と承り望み立く都に遊んじ世に業を以て  
 傍らを見ん看てやうの龍樹菴の僧に持を授けて去り書と云ふ  
 秋既に海濱せり今筐に書あり」として筆を以て大字と書に  
 雲痕を以りも強健なり筆は拙門と云ふは兵縣の百姓群衆  
 別と云ふ遊遊と遊遊たり死と歎く官軍の是と排し除けりて吏  
 廟の門へ入ぬ蓋は兵縣の賈人の子と歎佩韋といふ者あり力強  
 南越と好く任快を以て人を知りて今度周暇暇が輩なり」と

獄より出でてあまの怒り同窓の朋友周文元といふ興ま揚念如と云ふ  
 夜家の少年と先と牙僧とを沈揚去民の馬傑をんと集め  
 中々の秘忠切政ゆと丸(罪)罪なき忠臣と喜とるなり教と云ふ  
 と今周暇暇も不実の罪せりといふ獄より出たり我々東暇暇と親  
 りはるるも保る事と錦で知りはれぬとあるなり男児の乳像  
 又のまじしいとや牙と捨て暇暇とぬい我々が校業と人々志を以  
 ぬし善叶いといふ死を仰いで志と秀えんといふ中々の名は名を  
 乞ふ日(け)は人の者抱き本心打て街とあり村の人民と度々  
 (集)集り叔父なる香の燦と大地の衆に歎佩常諸人の向ひ中  
 吳縣の令衆かくて獄より出たり我々人志といひて周暇暇  
 三令と執りては餘る義と志と信守守り我輩と援人と



忠義傳卷之四十四



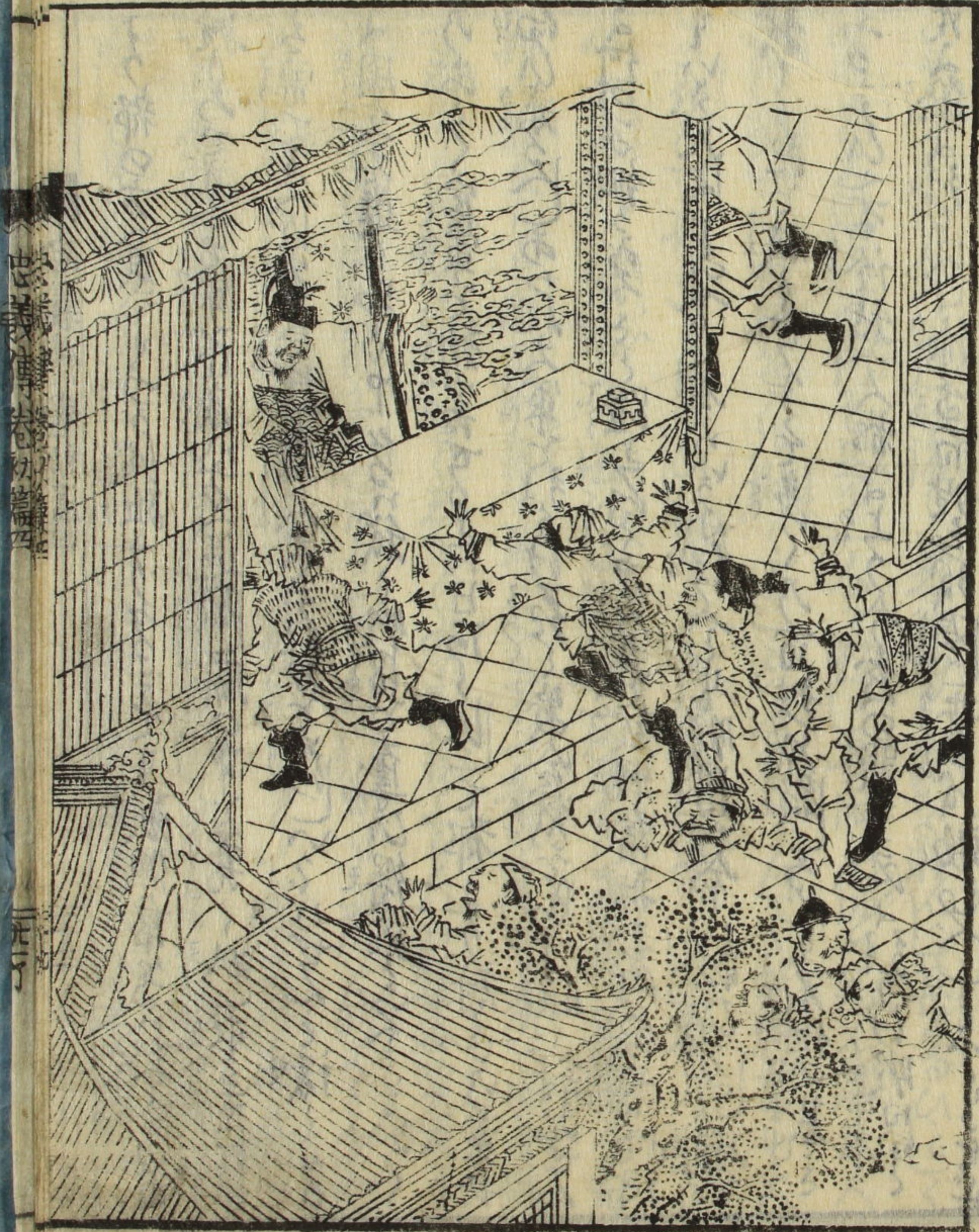
周順昌  
繼之  
所

忠義傳卷之四十四



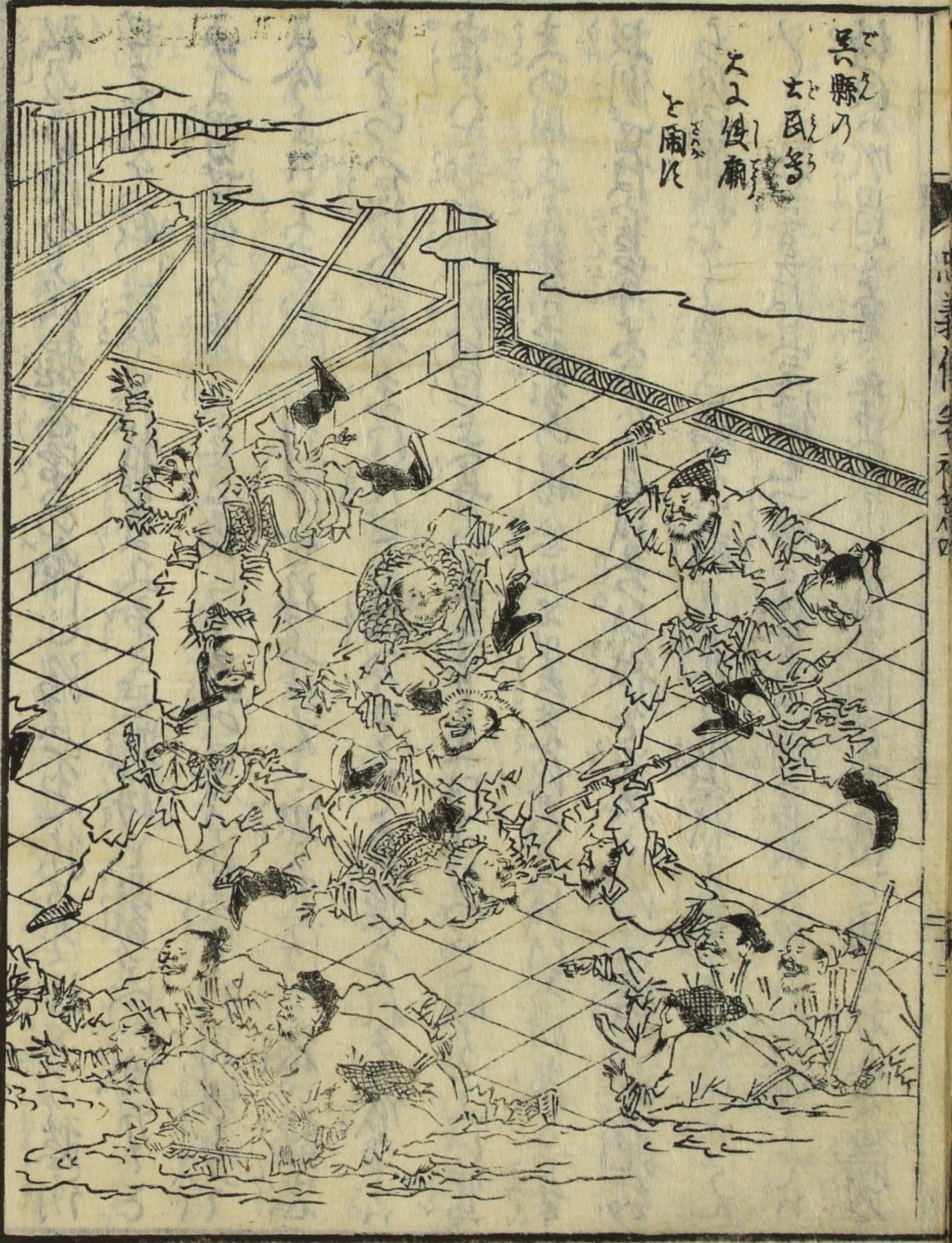
その著の天は相成て我と結ぶるとして自書と接つて盟とぬれ  
是とて吳縣の人民率来順昌が徳の懐きぬきは皆ほを  
心し我勝とて香と拈焚後拈とほしうなる秋佩帝は又  
そ人教と兼へんふ一万人は余りたるさうが倭願と兼はんと  
て又人の懸着先又進と都よりの豊後毛一踏ると徐吉が  
是に跪き順昌を其の罪に論り死して是死罪とせらるる  
ん某等教人の命とて順昌一人と免し然るが何のうらむ  
これ又妙んを成を流し所へられは若人若とににらる一  
余人の百姓味送て順昌が命とをよそ奪得くと燃濁ぬ  
歸する官軍を大よめてあつらひ着る若と拈たアツる  
汝等が所甚理は高し我我昔周順昌と捕へ都より

私ゆにありは魏忠賢の命し給ふ是徳を汝等が懇術  
せらるるて救し救とい我我又争き罪科と豊多し冷方と  
ゆは勞せんより速よと云ふしとほせらるふとくは百姓多  
よ今とい天子の詔し給ひせ給うんと怒とてし給ひ魏忠  
賢とい倭人我我に任せと捕らるこそ奇懐るんを依る  
官人とお頼し順昌と奪ひ去とて一日とつこ問を上げ駕  
まの園と元徳南衣家の揚念如者先の大いけあふと幸  
扱例せば官軍大きに給ふ我を奪と防ぎ死んは生死知  
らばの百姓が嘆き叫んで群り毒り彼戦長刀と奪ひ去と  
くは新守は其至使毛一踏る徐吉の両官よと奪たはけ侍り  
徳の順昌と奪えとて自中知て順昌と馬は打奪せ同



長門守 大内侍

五



長門守  
大内侍  
と雨氏

長門守 大内侍

五

より都の方へ真ともつが兵強かりたるまてり新佩常等の殺すの首  
 姓のあとの小友軍と南の方へ退散し湖の中と棄けけし東に元成昌  
 とも留て居る兵を以て衆人大き力と為しいへせんと後く  
 又周文元進くとゆくやうに我の成昌と奪ひ得たるとすむく  
 のおとく官軍と新害せるとい日たつて都より討るる軍兵  
 向ひ来るべしありし大軍と引けを合せ合戦せしむ討せし  
 又何の子細あると躍る中々ると新佩常押さるる下は  
 といふはとすり今いふ程も成昌の命に懸ひしに死  
 我く死と候くせんと多く乃百姓を救はん不仁の甚と  
 ろるまひ之不仁我一人都より今度の罪と為し引け成昌と  
 たはれぬにべし休き百姓を安し其業を勤むしとすむ

くやうなる小に人の首魁落し義の勇を記し其名をいし  
 け堂の大おとて何を足中一人を殺し安閑と仰る居る魁又人  
 姓に配し百姓を瓜助くはしとて是より大に新佩常と大  
 よまひ百姓といへはるし皆くを家居に送りしに都より討  
 今や悉くと待居りう去程も毛一騎徐若のあ官に呉縣より百  
 姓を斬らるる湖周成昌と馬より其のせ都とて後日又繼  
 て登りたる候て朝又ゆきまうくのば言よとれが魏忠賢大  
 勝き是皆周成昌があおるるを名引出く首と刻よと少知  
 たりい表とむし周成昌犯せる罪一点もして其まのあ新罪  
 せらる首を樹る事らさるるに憂悲かりしものも魏忠賢は  
 令して呉縣の百姓と捕しむし討新佩常を人いおひ討けし

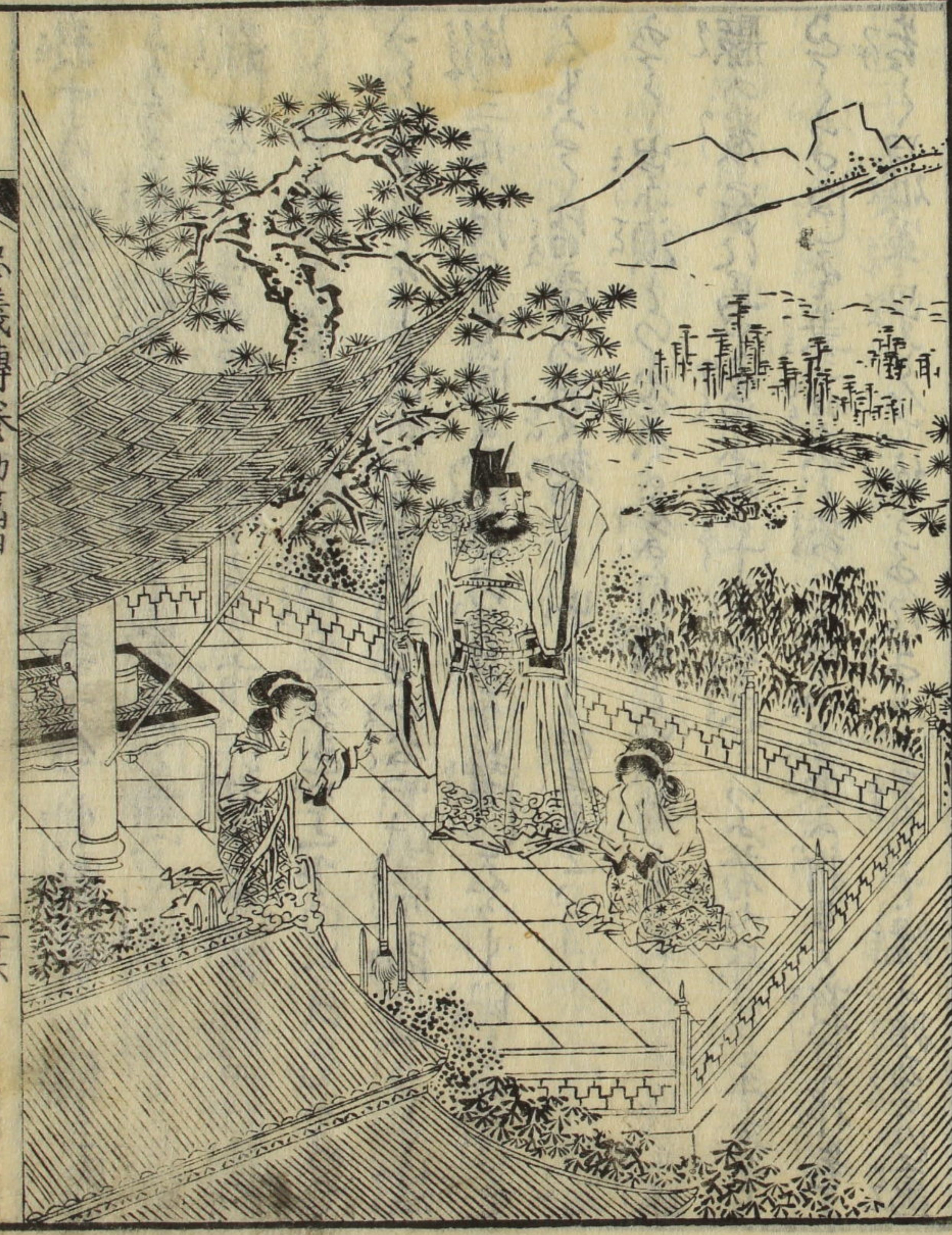
忠義傳卷初篇四

十三

むるに及ばず道は遠く公方と稱す姓名と唱へ都より召し取  
 が記せしむと大に歎き皇族悪多を殺して忠實を罵辱し又  
 人逃く市より討て皆首と斬りたる者流と流しは人衆と  
 懼せざるは呉那のたま其義人として甚称歎首ととて死  
 合せ日々に集め葬り其不業と碑を著し顔て又人の墓と  
 との真の側希方る候まかり天啓七年八月廿二日帝率  
 して河分若信王と市河方後より即せ移り天啓帝と諡し  
 て哲宗皇帝と稱し廟と喜宗と號せり初も新帝を智  
 道く譲らせ移り若朝の政より悉く己國の兆のそとと先と改め  
 移りしにも後勢強し客氏魏忠賢が官を削て庶人となし忠  
 賢と鳳陽の地へ請えざる忠賢の妾念浪りしとて丸籠にへと

計略もたし蓋て己より後より内官を余人を引くは鳳陽に  
 出りたる帝けりしと後百は魏忠賢と大に怒り移り兵部の官を  
 百は魏忠賢の魏忠賢忠の國柄を窺ひ忠良を陥るを罪方  
 死に處るとも先朝の寵臣とせりて暫く死とゆりし  
 鳳陽へ請えしむるに却て自つて懲らば逆黨教する人を引  
 率し及送と企んと計る系奇怪とて魏軍三万余を  
 率ひ追うけて捕へ来ると命じ移り兵部官にこまり軍  
 勢と引く捕へしんで追うるは魏忠賢の阜城といふ所  
 へ到るが忽官兵来りて捕るは他人はゆるし忠賢魏忠  
 として曰く吾布衣の姓とより出づ自ら國柄を窺ひ殆ど十  
 世と奪へき大志討つて天命受ふとて後事りし

忠義傳卷之四



魏忠賢  
阜城人  
縉



忠義傳卷之四

殺十の兵士を悉く去し以て其妻一人を刺殺し自ら縊死す  
 たりたり帝は於河惣其甚く客民を捕へて殺め居よと  
 殺し忠實一味の共謀殺十人を市に斬る余の刑罰計兼  
 く是と免し天下に大赦と号す是より下の出民是より  
 去る者にこそと未だ母を養ひ居る者やけ帝即位より後  
 湖三日月のそ間女悪乃を誅し去りも助る功臣を  
 人よりも皆帝の智智より出たりは是年正月多号改元  
 ありて崇禎と名を改め李自成との名ありては延安府  
 縣の農家に馬と畜ふ李自成十于守忠との名者守忠年又十  
 ありて子は其妻石氏と共に華山の廟に祈ると教日非是  
 告く曰破軍星とて休ぶるにふくと名を以て既又姓乃及萬

曆二十八年丙午八月自成と号す父母の若の懐しははを圍  
 兜と号し六歳ありて父を殺し七歳とて妻を擄て義理を通  
 長成て自成と名を天性狼悪ありて父を打母を罵る自成廿二  
 歳の時父母を擄て死し自成悪乃を殺し其家帰宅す  
 年計の同じく悉く其の羅君を殺す者も後い叙御兵法と受  
 ぶ附て宗復元年の冬より未だ穀價ひ高く粒々珠の如く  
 柴薪も乏しく箇々掛樹の下に朝廷よは遠東荆嘉へ運送の  
 兵糧穀を求め終へて諸國乃百姓上納も乏き米粟亦く乏し  
 と議するを以て酷吏村々都々入来りて困民と虐害を  
 求めしは諸州乃人民怒り燒り山林幽谷に逃げ居る者  
 多し國々の群盜蜂の如く都々民を殺し其業を切り遂に李



忠義傳卷初篇四

五



李自成  
戦と行て  
堂と  
あつた

忠義傳卷初篇四

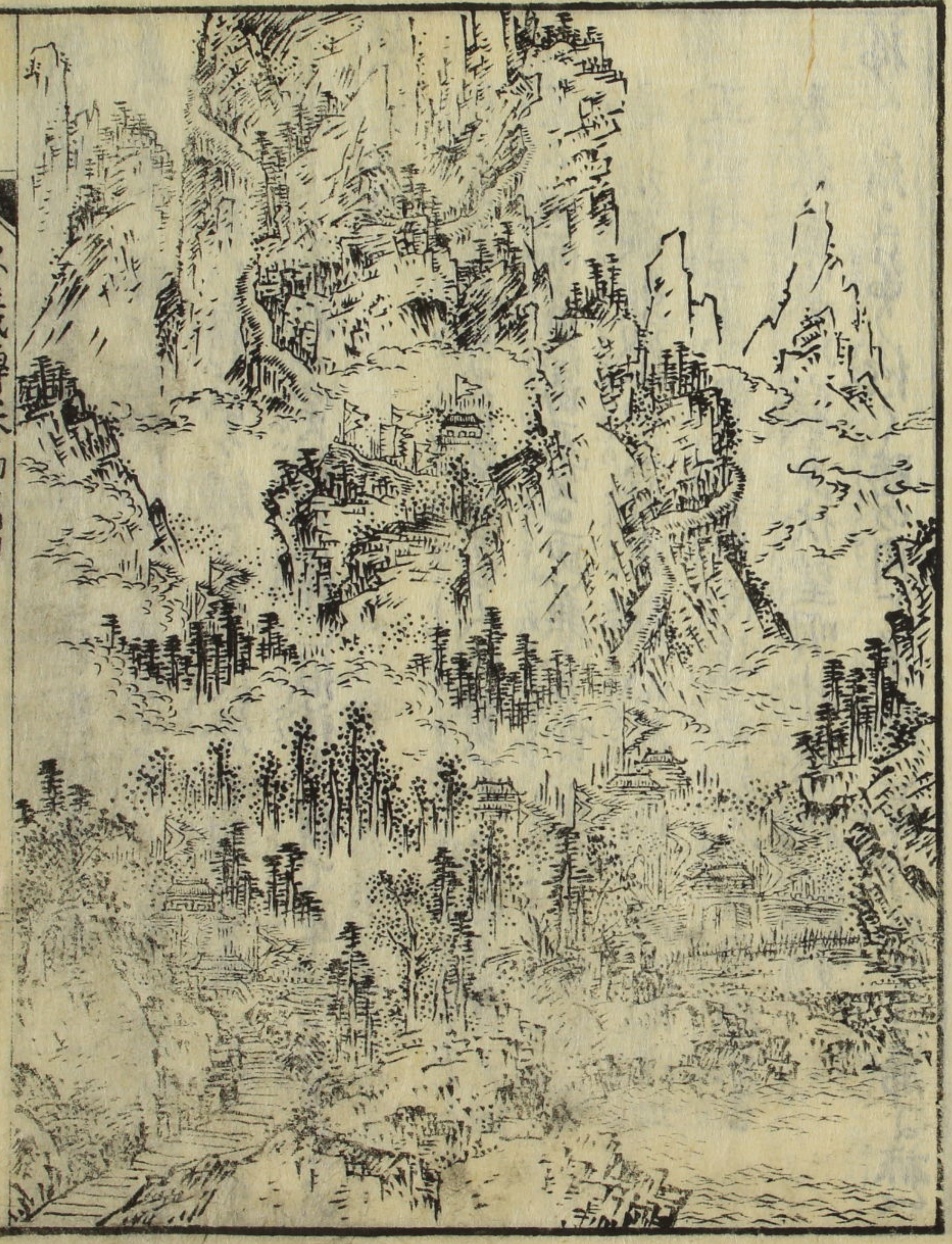
十七



自派生變凶惡の者なりは志乃悪黨殺百人と決（漢中の地  
 又盜とするは以交趾國より兵と配（明乃系族を討討宗  
 漢帝滿國より募て兵を以て給ふより國より軍勢を以  
 漢中の地より教を誘て出く都に到じむる自派は軍  
 勢より向く大者罵るの餘なきるぐ都より寇と拒んを  
 どり今の朝廷賞罰にさび功なり眾と受死て死と葬  
 乃地は唯後より力と盡しま是何の益ありん其の國中の  
 其名三秦よりく叫り人呼んで國に軍とつ餘なきるぐ  
 後い下せば乃死と安くせよ先法は我を報と月々とひし  
 びおる賊を倒はし天地はと安まるき白馬を獲り後援の地  
 ろの風乃如く弓と矢と擡ひ近きまは彼賊と射る小らま

した柄乃心中よりしと的を獲り八九才衆軍を以ては  
 者小派は謹むる命を以てしとく皆李自成が属より  
 とかり自派大はたひ母の寨を伴りんとする不忽殺十  
 人の客高小系よりゆり来る小遊り李自成を以てり  
 我輩乃得抱こそ出奉りう囊中乃物と悉く利をよと中  
 知ると小ぞ属より乃小賊百人計獲くと名聞を以て李金銀  
 少しも錢を以て奪ひ奉り自派は量ぐけ高客も乃遊り財  
 宝ありやと擡り去る今而郷ゆりても命と擡るぐを以て  
 ろりとぬとく先考の者も皆李自成が属よりありては  
 強盜とつかりとる自派は後くまはく勇を諸軍より  
 向ひやると我軍勢と集りや山賊海寇の不為と異今明の

忠義轉卷功高四



周賊西蜀  
後威と  
影人



忠義轉卷功高四



